三重県埋蔵文化財調査報告261

堀　田

第６次調査

２００５（平成17）年３月

三重県埋蔵文化財センター

堀　田

第６次調査

二〇〇五　三重県埋蔵文化財センター

三重県埋蔵文化財調査報告261

堀　　田

第 6 次 調 査

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… 水谷 …… (1)
1　調査に至る経緯 …… (1)
2　調査の経過 …… (1)
3　調査の方法 …… (2)
4　文化財保護法等にかかる諸通知 …… (3)

Ⅱ　位置と環境 …… 水谷 …… (4)
1　堀田遺跡の位置 …… (4)
2　これまでの堀田遺跡発掘調査概要 …… (4)
3　古墳時代の周辺状況 …… (4)
4　古代の周辺状況 …… (4)

Ⅲ　堀田遺跡の層位と遺構 …… 水谷 …… (6)
1　A地区 …… (6)
2　B地区 …… (6)
3　C地区 …… (7)

Ⅳ　堀田遺跡の出土遺物 …… (20)
1　土器類 …… 伊藤 …… (20)
2　木製品 …… 瀬野 …… (41)

Ⅴ　小谷A遺跡の調査 …… 水谷 …… (63)
1　調査区の層位と遺構 …… (63)
2　出土遺物 …… (63)

Ⅵ　調査のまとめと検討 …… (65)
1　堀田遺跡の地形状況 …… 伊藤 …… (65)
2　古墳時代前期の状況 …… 伊藤 …… (65)
3　古代の遺構・遺物 …… 伊藤・淺生 …… (67)

Ⅶ　総括－堀田遺跡第３～６次調査－ …… 伊藤 …… (72)

挿　図　一　覧

第１図　事業地内調査区位置図
第２図　遺跡位置図
第３図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区遺構平面図
第４図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区土層断面図
第５図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区ＳＤ96実測図
第６図　堀田遺跡（第６次）Ｂ・Ｃ地区遺構平面図
第７図　堀田遺跡（第６次）Ｂ地区土層断面図
第８図　堀田遺跡（第６次）Ｃ地区土層断面図
第９図　堀田遺跡（第６次）Ｂ地区ＳＫ143・137・139実測図
第10図　堀田遺跡（第６次）Ｂ・Ｃ地区各遺構実測図
第11図　台付甕のハケメ調整
第12図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(1)
第13図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(2)
第14図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(3)
第15図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(4)
第16図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(5)
第17図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(6)
第18図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(7)
第19図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(8)
第20図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(9)
第21図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(10)
第22図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(11)
第23図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(12)
第24図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(13)
第25図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(14)
第26図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(15)
第27図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(16)
第28図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(1)
第29図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(2)
第30図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(3)
第31図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(4)
第32図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(5)
第33図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(6)
第34図　小谷Ａ遺跡出土遺物実測図
第35図　小谷Ａ遺跡遺構平面・土層断面図
第36図　堀田遺跡周辺の旧河道を中心とした旧地形
第37図　三重県出土の須恵器平底壺
第38図　近畿地方およびその周辺地域出土の須恵器平底壺
第39図　キノコ形のつまみを持つ須恵器杯蓋
第40図　第６次調査出土須恵器の刻書
第41図　第３次調査出土須恵器の刻書

表　一　覧

第１表　堀田遺跡（第６次）遺構一覧表(1)
第２表　堀田遺跡（第６次）遺構一覧表(2)
第３表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(1)
第４表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(2)
第５表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(3)
第６表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(4)
第７表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(5)
第８表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(6)
第９表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(7)
第10表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(8)
第11表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(9)
第12表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(10)
第13表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(11)
第14表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(12)
第15表　堀田遺跡（第６次）出土木製品観察表(1)
第16表　堀田遺跡（第６次）出土木製品観察表(2)

写　真　図　版　一　覧

写真図版１　堀田遺跡（第６次）遺構(1)
写真図版２　堀田遺跡（第６次）遺構(2)
写真図版３　堀田遺跡（第６次）遺構(3)
写真図版４　堀田遺跡（第６次）遺構(4)
写真図版５　堀田遺跡（第６次）遺構(5)
写真図版６　堀田遺跡（第６次）遺構(6)
写真図版７　堀田遺跡（第６次）遺構(7)
写真図版８　堀田遺跡（第６次）遺構(8)
写真図版９　堀田遺跡（第６次）遺構(9)
写真図版10　小谷Ａ遺跡　遺構
写真図版11　堀田遺跡（第６次）遺物(1)
写真図版12　堀田遺跡（第６次）遺物(2)
写真図版13　堀田遺跡（第６次）遺物(3)
写真図版14　堀田遺跡（第６次）遺物(4)
写真図版15　堀田遺跡（第６次）遺物(5)
写真図版16　堀田遺跡（第６次）遺物(6)
写真図版17　堀田遺跡（第６次）遺物(7)
写真図版18　堀田遺跡（第６次）遺物(8)
写真図版19　堀田遺跡（第６次）遺物(9)
写真図版20　堀田遺跡（第６次）遺物(10)
写真図版21　堀田遺跡（第６次）遺物(11)

序

三重県の中央部を流れる雲出川の流域は、現在では津市・久居市・一志郡および松阪市の一部を含みますが、かつては大きく一志郡とされていた地域であります。この一志郡は、三重県下でもとくに重要な遺跡が集中する地域として知られています。弥生時代の稲作文化がまず受け入れられたのがこの地域と考えられますし、古墳時代前期において前方後方墳が集中する地域でもあります。また、古代律令期における中央的な文化が伊勢に受け入れられる状況を考えるうえでも、この地域の動向は非常に重要です。

今回発掘調査を行いました堀田遺跡は、中村川が雲出川へと合流する付近にあたる遺跡です。ここは、かつての一志郡嬉野町宮古地内にあたり、今年はじめの市町村合併により、現在では松阪市嬉野宮古町となっています。旧嬉野町域は、旧一志郡内でもとくに遺跡が密集する地域で、堀田遺跡付近はとくにそれが顕著です。付近には筒野１号墳や天花寺山丘陵内の数多くの古墳をはじめ、天花寺廃寺・一志廃寺・中谷廃寺などの古代寺院が密集しています。堀田遺跡も、一志郡衙に深く関係した遺跡と考えられています。

堀田遺跡の調査は、ほ場整備事業や県道改良工事に伴い、何度か調査されています。今回報告するのは、県道改良工事に伴う調査で、第６次調査にあたります。今回の調査では、古墳時代と飛鳥・奈良時代を中心とした土器類にはとくに見るべきものが多く、貴重な歴史資料となりました。この成果の裏には、遺跡の一部が開発に伴って消滅したという代償があります。私たちは、その結果得た成果を、迅速かつ明確なかたちで公表し、県民の皆様はもとより全国的に向けて、三重県がいにしえに育んだ文化の重要性を発信していきたいと考えます。

発掘調査にあたっては、地元である旧嬉野町および近隣在住の方々をはじめ、旧嬉野町教育委員会から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

２００５年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉水康夫

例　言

1　本書は、三重県松阪市嬉野宮古町（旧一志郡嬉野町宮古）字築山ほかに所在する堀田遺跡の第６次発掘調査と、同市嬉野天花寺町（旧一志郡嬉野町天花寺）字小谷に所在する小谷Ａ遺跡の発掘調査にかかる報告書である。

2　調査は、主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備事業に伴い、平成13年度に緊急発掘調査を実施したものである。

3　発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。
＜平成13年度（発掘調査）＞
調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
技師　水谷　豊、技術補助員　酒井巳紀子、研修員　伊藤直孝・新庄孝敏
＜平成14～16年度（報告書作成）＞
三重県埋蔵文化財センター
主査　森川幸雄、技師　伊藤裕偉、主幹　五鳩史佳、主査　田中久生
技術補助員　瀬野弥知世・淺生卓司

4　調査にかかる費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。

5　調査にあたっては、旧嬉野町在住の各位、宮古地区自治会、旧嬉野町教育委員会、および県の関係機関から多大な協力を受けたことを明記する。

6　報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示等を頂いている。記して感謝いたしたい（所属は当時）。
伊勢野久好（一志町教育委員会）、尾野善裕（(独)京都博物館）、笠井賢治（上野市史編纂室）、木野本和之（亀山市教育委員会）、瀬辺一機（四日市市教育委員会）、樋上昇（愛知県埋蔵文化財センター）、水橋公恵（鈴鹿市教育委員会）、村木一弥（津市教育委員会）、森川常厚（嬉野町教育委員会）、和氣清章（嬉野町教育委員会）、渡辺博人（各務原市教育委員会）

7　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、調査研究Ⅰ・Ⅱグループが中心に行った。報告文の執筆は水谷・伊藤・瀬野・淺生が行い、目次および文末に記した。編集は伊藤が行った。

凡　例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、嬉野町都市計画図（旧嬉野町）、主要地方道松坂一志線緊急地方道路整備工事図（三重県県土整備部）である。

2　これらの地図類は、国土地理院発行地形図を除き、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年４月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

3　挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位　は西偏６°40′、真北方位は西偏０°17’34”（平成10年）である。

＜遺構類＞

4　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

5　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(23版　日本色研事業株式会社　1967年）を用いた。

6　当報告書での遺構は、それぞれの遺跡単位で通番としている。

7　遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。

8　遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。

9　遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

ＳＤ･･･溝、流路、落ち込み　ＳＥ･･･井戸　ＳＫ･･･土坑　ＳＺ･･･落ち込みなど　pit･･･ピット、柱穴

＜遺物類＞

10　当報告書での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。

11　遺物実測図は、遺跡・調査次数毎でそれぞれまとめており、全体として通番ではない。

12　当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。

13　遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 ･･･････････････ 挿図掲載番号である。

実測番号 ･･･････････ 実測段階の登録番号である。

様・質 ･･･････････････「弥生土器」「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など ･･･････････ 遺物の器種を示す。

グリッド ･･･････････ 調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構・層名 ･･･････ 遺物の出土した遺構や層名を記した。「ｐ」は土器、「ｓ」は石、「ｗ」は木の、それぞれ取り上げの際の区分記号である。

法量（cm） ･･･････ 遺物の法量を示す。(口）は口縁部径、（底）は底部径、（高台）は高台部径、（脚柱）は脚部上端径、（脚裾）は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴 ･･･ 主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土 ･･･････････････ 小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 ･･･････････････ その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度 ･･･････････ その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項 ･･･････････ 遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

14　写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。

15　挿図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡毎の実測図番号と対応している。

16　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

Ⅰ　前　言 …… 水谷 …… (1)
　1　調査に至る経緯 …… (1)
　2　調査の経過 …… (1)
　3　調査の方法 …… (2)
　4　文化財保護法等にかかる諸通知 …… (3)

Ⅱ　位置と環境 …… 水谷 …… (4)
　1　堀田遺跡の位置 …… (4)
　2　これまでの堀田遺跡発掘調査概要 …… (4)
　3　古墳時代の周辺状況 …… (4)
　4　古代の周辺状況 …… (4)

Ⅲ　堀田遺跡の層位と遺構 …… 水谷 …… (6)
　1　Ａ地区 …… (6)
　2　Ｂ地区 …… (6)
　3　Ｃ地区 …… (7)

Ⅳ　堀田遺跡の出土遺物 …… (20)
　1　土器類 …… 伊藤 …… (20)
　2　木製品 …… 瀬野 …… (41)

Ⅴ　小谷Ａ遺跡の調査 …… 水谷 …… (63)
　1　調査区の層位と遺構 …… (63)
　2　出土遺物 …… (63)

Ⅵ　調査のまとめと検討 …… (65)
　1　堀田遺跡の地形状況 …… 伊藤 …… (65)
　2　古墳時代前期の状況 …… 伊藤 …… (65)
　3　古代の遺構・遺物 …… 伊藤・淺生 …… (67)

Ⅶ　総括－堀田遺跡第３～６次調査－ …… 伊藤 …… (72)

挿　図　一　覧

第１図　事業地内調査区位置図
第２図　遺跡位置図
第３図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区遺構平面図
第４図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区土層断面図
第５図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区ＳＤ96実測図
第６図　堀田遺跡（第６次）Ｂ・Ｃ地区遺構平面図
第７図　堀田遺跡（第６次）Ｂ地区土層断面図
第８図　堀田遺跡（第６次）Ｃ地区土層断面図
第９図　堀田遺跡（第６次）Ｂ地区ＳＫ143・137・139実測図
第10図　堀田遺跡（第６次）Ｂ・Ｃ地区各遺構実測図
第11図　台付甕のハケメ調整
第12図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(1)
第13図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(2)
第14図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(3)
第15図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(4)
第16図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(5)
第17図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(6)
第18図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(7)
第19図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(8)
第20図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(9)
第21図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(10)
第22図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(11)
第23図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(12)
第24図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(13)
第25図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(14)
第26図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(15)
第27図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(16)
第28図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(1)
第29図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(2)
第30図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(3)
第31図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(4)
第32図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(5)
第33図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図(6)
第34図　小谷Ａ遺跡出土遺物実測図
第35図　小谷Ａ遺跡遺構平面・土層断面図
第36図　堀田遺跡周辺の旧河道を中心とした旧地形
第37図　三重県出土の須恵器平底壺
第38図　近畿地方およびその周辺地域出土の須恵器平底壺
第39図　キノコ形のつまみを持つ須恵器杯蓋
第40図　第６次調査出土須恵器の刻書
第41図　第３次調査出土須恵器の刻書

表　一　覧

第１表　堀田遺跡（第６次）遺構一覧表(1)
第２表　堀田遺跡（第６次）遺構一覧表(2)
第３表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(1)
第４表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(2)
第５表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(3)
第６表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(4)
第７表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(5)
第８表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(6)
第９表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(7)
第10表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(8)
第11表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(9)
第12表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(10)
第13表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(11)
第14表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表(12)
第15表　堀田遺跡（第６次）出土木製品観察表(1)
第16表　堀田遺跡（第６次）出土木製品観察表(2)

写　真　図　版　一　覧

写真図版１　堀田遺跡（第６次）遺構(1)
写真図版２　堀田遺跡（第６次）遺構(2)
写真図版３　堀田遺跡（第６次）遺構(3)
写真図版４　堀田遺跡（第６次）遺構(4)
写真図版５　堀田遺跡（第６次）遺構(5)
写真図版６　堀田遺跡（第６次）遺構(6)
写真図版７　堀田遺跡（第６次）遺構(7)
写真図版８　堀田遺跡（第６次）遺構(8)
写真図版９　堀田遺跡（第６次）遺構(9)
写真図版10　小谷Ａ遺跡　遺構
写真図版11　堀田遺跡（第６次）遺物(1)
写真図版12　堀田遺跡（第６次）遺物(2)
写真図版13　堀田遺跡（第６次）遺物(3)
写真図版14　堀田遺跡（第６次）遺物(4)
写真図版15　堀田遺跡（第６次）遺物(5)
写真図版16　堀田遺跡（第６次）遺物(6)
写真図版17　堀田遺跡（第６次）遺物(7)
写真図版18　堀田遺跡（第６次）遺物(8)
写真図版19　堀田遺跡（第６次）遺物(9)
写真図版20　堀田遺跡（第６次）遺物(10)
写真図版21　堀田遺跡（第６次）遺物(11)

Ⅰ 前 言

1 調査に至る経緯

a 調査の契機

当該発掘調査は、主要地方道松阪一志線の道路改良工事を契機とする。当該道路は、松阪市南部域から一志町、旧嬉野町を通って久居市に至る幹線道路である。近年の交通事情の悪化により、特に堀田遺跡の所在するところは対面通行が必要な区間であるため、緊急な道路改良が実施されることとなった。

三重県埋蔵文化財センターでは、平成８年度以降、当該道路関連で数多くの発掘調査を実施している。堀田遺跡では、３次にわたる発掘調査が行われ（平成８年度・平成11年度・平成12年度。以下、「第３次調査」「第４次調査」「第５次調査」と呼称）、平成13年度に実施した今回が最終次となる。小谷Ａ遺跡は、平成13年度の調査のみで完了した。

b 堀田遺跡の調査

堀田遺跡では県営ほ場整備事業に伴い昭和53（以下、「第１次調査」）・56年度（以下、「第２次調査」）に発掘調査が行われている。第1次調査では土坑・溝・柱穴などの遺構、軒丸瓦や平瓦、暗文土師器などが出土した。

県道改良工事に伴う第３～５次調査では、古墳時代前期頃に成立したと考えられる自然流路が確認され、その流路は奈良時代頃まで湿地として残っていたと考えられる。下層から出土した遺物としては第3次調査で伊勢では最古段階になる朝顔型埴輪の出土が注目される。また、木製品も多い。上層からは多量の土器が出土し、特に暗文土師器の多量の出土が注目される。

2 調査の経過

a 調査経過概要

調査は、平成13年８月27日に、小谷Ａ遺跡から開始した。堀田遺跡の調査は同年９月11日からである。現場を撤収することができたのは、翌平成14年１月18日である。

調査は、夏の猛暑から寒風の吹く冬まで行った。特に最終調査区である堀田遺跡Ｃ地区は、ほぼ全面が自然流路であり、掘削土量・遺物出土量も膨大であったが、調査が無事終了できたのもひとえに作業員の努力によるものである。ここに御労名を記して感謝いたします。

＜発掘調査作業員＞

天野清美、淡路尚美、小河義廣、奥村公二、
小田昭男、小田清子、柿村嘉晴、加藤紗規子、
加藤直、加藤秀子、川喜田良次、鬼丸君代、
倉田正夫、栗栖一巳、鈴木和夫、関山恭子、
玉井操子、津村みさ子、中上登志夫、萩原幸子、
長谷川ハルエ、松浦ノブ子、山際勘、脇田洋子

b 作業日誌(抄)

＜小谷Ａ遺跡＞

８月１日　現地協議。
８月23日　現地打ち合わせ、測量開始。
８月27日　重機による表土除去開始。
９月４日　人力掘削開始。
９月５日　はっきりと遺構と確認できるものは検出できない。全体が流路と思われる。弥生土器・土師器等の小破片が出土。
９月12日　流路の肩近くからサヌカイト片が出土。土器はほとんど出土せず。明確な遺構は存在しない模様。
９月17日　掘削終了。清掃写真撮影。午後から平板実測開始。
９月19日　重機による断ち割り、土層図作成。終了。

＜堀田遺跡＞

９月11日　Ａ地区より重機による表土除去開始。黒色の粘質土から奈良時代頃の須恵器・土師器・瓦が出土。大溝か？
９月12日　黒色土は幅15ｍ程続く模様。須恵器・土師器が多量に出土。
９月19日　人力掘削開始。大溝（ＳＤ85）から須恵器・土師器などの遺物多く出土。

9月20日　ＳＤ85は黒色土のみに遺物が見られる模様。下層は青灰色系の粘質土となり、遺物は出土せず。溝の肩には１ｍほどの土坑が数個並んで検出される。

9月25日　黒色土を除去したところで遺構検出。杭が数本見られる。柱穴らしき遺構は確認されるものの粘土層のため検出困難。

9月26日　遺構検出。遺構掘削。

9月27日　清掃・写真撮影。

10月２日　実測開始。

10月３日　ＳＤ85肩の部分を掘削。50cm程度掘り下げるが遺物なし。杭の断ち割りを行うが、残りがよく60cmほど刺さっているものも見られる。

10月４日　遺構実測終了。

10月９日～12日　Ａ地区東側表土掘削

10月15日　人力掘削再開。

10月19日　流路掘削、遺物出土状況写真撮影、実測。

10月24日　清掃、写真撮影。実測開始。

10月26日　実測終了。埋め戻し。Ｂ地区表土剥ぎ開始。

10月29日　Ｂ地区人力掘削開始。溝・ピットなど検出。

11月１日　遺構掘削。粗砂溝からは縄文土器片が出土。黒色砂混土の溝からは飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器が出土。

11月２日　Ｂ地区南側を清掃、写真撮影。粗砂溝の上層にあるピットを実測。

11月３日　南側清掃・写真撮影。北側遺構検出、遺構掘削。竪穴住居と思われる土坑を検出。

11月12日　清掃、写真撮影。

11月13日　実測開始。Ｃ地区表土剥ぎ開始

11月20日　実測終了。Ｃ地区人力掘削開始。遺構検出。

11月21日　北側から流路掘削。黒色土が約50cm、その下に互層が1.0ｍほどあり、掘削困難が予想される。西側の浅いところから土馬出土。

11月26日　流路北側掘削。東側は一段深くなり、古墳時代前期の土器が見られる。

11月27日　流路北側ほぼ掘削完了。上層黒色粗砂混粘質土からは飛鳥・奈良時代の土器、下層からは古墳時代前期の遺物がともに多量に出土。下層は東側に寄り、導水路と思われる溝が見られる。

12月３日　流路掘削。出土状況図作成。

12月10日　流路北側写真撮影。流路掘削、上層・下層とも遺物が多量に出土。下層から木製品出土。

12月11・12日　作業を中止し、実測。

12月17日　流路東肩から古墳時代後期の須恵器・土師器がまとまって出土。出土遺物が多く、出土位置のポイント・レベルをおさえて取り上げる方針に変更。

12月25日　今日もひたすら流路の掘削が続く。土器も多量。機織具と思われる木製品が集中して出土。

12月27日　今年の最終日。写真撮影をするが、みぞれが降り始め途中で断念。

１月７日　現場再開。

１月９日　清掃、写真撮影。

１月９日～15日　実測。作業員後片付け。

１月17日　井戸断ち割り。底近くから須恵器壷・杯、土師器甕出土。後片付け。

１月18日　現場終了

3　調査の方法

a　発掘作業業務委託

今回の発掘作業では、現地作業において調査作業に専念でき、調査の効率化や安全管理の向上を図る目的で、発掘作業業務を民間発掘調査機関に委託している。その業務内容は、作業員の雇用・管理や機材の提供などの土工的作業や測量業務などである。

今回の発掘調査では、指名競争入札により落札した安西工業株式会社に委託した。

b　小地区の設定

調査は、調査地区内に４ｍ区画の小グリッドを設定して行った。グリッド設定は、Ａ・Ｂ・Ｃ地区それぞれで設定し、連動していない。また、グリッドは南から北へ数字を、西から東へアルファベッドを付加して表記した。

なお、この小地区設定は国土座標及び過去の調査

とは無関係である。

c　掘削作業

表土掘削は重機（バックフォー）で、包含層・遺構は人力で掘削した。堀田遺跡A地区では、現道とJR名松線に挟まれた調査区であることから土砂搬出が困難なため、東側と西側に分けて調査を行った。

d　遺構番号について

堀田遺跡については、第３～５次調査からの続き番号で遺構番号を付した。今回の調査は「84」から付している。

小谷Ａ遺跡については、今回の調査が初回であったが、遺構が無かったため、結果的に番号は付けていない。

e　記録類について

①　図面の作成について

小谷A遺跡については、遺構が見られないことから１/100の平板測量を行い、1/20の土層断面図を作成した。堀田遺跡については平面図・断面図を1/20で作成した。重要な遺構、遺物出土状況図については1/10で作成したものもある。

②　遺構写真について

遺構写真はモノクロとカラーリバーサルフィルムを用い、35㎜・ブローニー版を作成した。

4　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項

平成12年10月19日付け道整第236号（県教育長あて県知事通知）

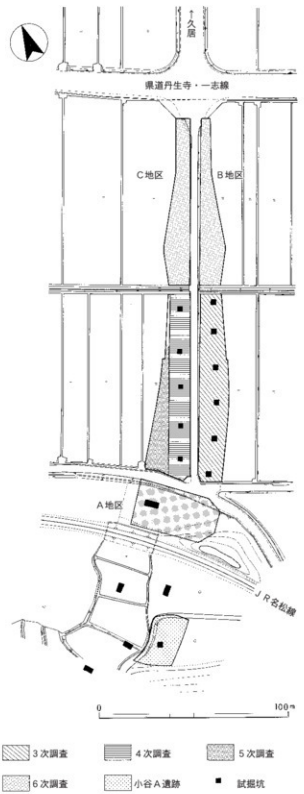
・法58条の２第１項

平成13年８月28日付け、教理第159号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

平成14年１月30日付け、教理第315号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長通知）＊県教育長から久居警察署長あてに通知

（水谷）



第１図　事業地内調査区位置図（1：2,000）

Ⅱ　位置と環境

1　堀田遺跡の位置

堀田遺跡は、松阪市嬉野宮古町（旧一志郡嬉野町宮古）字築山・堀田ほかに、小谷A遺跡は同市嬉野天花寺町（旧同郡同町天花寺）字小谷に所在する遺跡である。天花寺丘陵の北裾部に当たり、伊勢平野中央部をを流れる雲出川とその支流である中村川の合流点やや上流の標高約10mの低位段丘上に位置する。つまり、中村川の下流域であると共に雲出川が下流域にさしかかる地点である。雲出川を遡ると、青山峠を越え伊賀国に至り、伊勢と畿内を結ぶ交通の要衝であったと考えられる。

一志郡は伊勢の中でも特に重要な遺跡が数多く認められているところである。天花寺丘陵を中心として近年数多くの発掘調査が行われており、歴史的環境についてはそれらに詳しく述べられているため[1]、ここでは堀田遺跡の中心的な時期である古墳時代及び飛鳥・奈良時代の状況を概観する。

2　これまでの堀田遺跡発掘調査概要

堀田遺跡では、これまでに、昭和53・56年度に県営ほ場整備に伴う第１・２次調査[2]が、今回と同一事業で第３～５次調査[3]が行われている。第１・２次調査では古代の竪穴住居・土坑・溝などが、第３～５次調査では古墳時代前期以降の自然流路、古墳時代前期の溝、古代の掘立柱建物・溝・土坑などが確認された。第１・２次調査区は、第３～５次調査区東側の微高地に位置し、古代の居住域であったと考えられる。

第３～５次調査で確認された自然流路では、比較的流れが激しかったと考えられる下層で、古墳時代前期から後期にかけての遺物が出土する。また、流れがほとんど無く、溝状の落ち込みになったと考えられる上層からは、飛鳥・奈良時代の遺物が出土している。古墳時代前期の自然流路に取り付く数条の溝は導水路として機能していたと考えられ、当地域で灌漑施設を築くことのできる有力者の存在が推定される。また、飛鳥・奈良時代の多量な畿内系暗文土師器の出土は、当地が畿内との関連が深い地域であることを物語っていると考えられる。

3　古墳時代の周辺状況

古墳時代の一志郡は、前方後方墳が４基以上集中する特異な地域である。当遺跡の東方約1.5kmに位置する片部遺跡では大規模な灌漑施設が確認されており[4]、当地域にこのような大規模な土木工事を可能にする有力者の存在が想定される。

天花寺丘陵では、古墳時代前期から後期にかけて古墳群が形成される。前期には西野古墳群、前期から中期中葉にかけては片野池古墳群があり、全長約40mの前方後方墳である筒野１号墳も築かれる。中期から後期にかけては馬ノ瀬・小谷・清水谷古墳群など100基以上の古墳が確認されている。発掘調査された小谷13号墳は直径16mの小規模な古墳であるが、三角板鋲留短甲や鉄製武具・工具類などの優秀な副葬品が出土しており[5]、古墳時代を通じて有力者が造墓活動を行い続けたことが明らかになってきた。

4　古代の周辺状況

古代の一志郡で注目されるのは、古代寺院が密集して建立されることである。中村川流域で５寺院、雲出川流域の一志町側で２寺院が確認されている。堀田遺跡に近い天花寺廃寺では、発掘調査の結果、法起寺式の伽藍配置であり、複線鋸歯文を施す川原寺式の軒瓦が出土することが確認された[6]。また、中谷廃寺・一志廃寺が極めて近距離に密集している。一志廃寺付近には「郡一」の小字名があり、堀田遺跡の所在する宮古にはかつて「郡一神社」が存在したことなどから、周辺が古代一志郡家の可能性も含め、中枢地であったと考えられている[7]。

古代の集落跡は中村川流域に広範囲に見られる。この時期の特徴として、畿内系暗文土師器と呼ばれる精緻な暗文を施す土器が多量に出土することがあげられる。代表的な遺跡には、平生遺跡[8]、片野遺跡[9]、天花寺北瀬古遺跡[10]などがある。天花寺北瀬古遺跡では飛鳥時代の土器焼成坑が確認され、片野遺跡で

は土器焼成坑は見つかっていないものの１つの土坑から500点以上の暗文土師器が出土している。いずれも、土器生産に関わる遺跡と考えられている。また、愛知県一宮市八王子遺跡で出土した暗文土師器の一部は、一志郡産である可能性が指摘されている(11)。当地域が、近畿地方だけでなく、より広い範囲の地域との関連を考える上で注目できる事例である。

（水谷）

＜註＞

(1)一志町・嬉野町遺跡調査会『天花寺山』(1991年)
三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』(1996年)
ほか。

(2)三重県教育委員会『堀田遺跡』『昭和56年度県営圃状整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1982年)

(3)三重県埋蔵文化財センター『堀田第３～５次調査』(2002年)

(4)嬉野町教育委員会『片部遺跡発掘調査現地説明会資料』(1995年)

(5)三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財年報』平成11年度(1999年)

(6)三重県教育員会『天花寺廃寺』『昭和55年度県営圃状整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1981年)

(7)伊藤裕偉『ふたつの「こおりいち」～古代一志郡家に関する覚書』(斎宮歴史博物館研究紀要十一、斎宮歴史博物館 2002年)

(8)平生遺跡発掘調査団『平生遺跡発掘調査報告』(1976年)、三重県埋蔵文化財センター『平生遺跡発掘調査報告』(1994年)

(9)一志町教育委員会『片野遺跡IV』(2002年)など

(10)三重県埋蔵文化財センター『天花寺北遺古遺跡（第１次）薬師寺北畏遺跡発掘調査報告』(1999年)

(11)福上昇『八王子遺跡の古代を巡る諸問題』(『八王子遺跡 考察編』財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2001年)

第２図　遺跡位置図(1：50,000)〔国土地理院「大仰」1：25,000による〕　■＝前方後方墳　■＝古代寺院

１.堀田遺跡　２.西野古墳群　３.片野池古墳群　４.熊野１号墳　５.馬ノ瀬古墳群　６.小谷古墳群　７.清水谷古墳群
８.西山１号墳　９.片部遺跡　10.天花寺廃寺　11.中谷廃寺　12.一志廃寺　13.片野遺跡　14.平生遺跡

Ⅲ　堀田遺跡の層位と遺構

堀田遺跡第６次調査区は、大きく３箇所に分かれる（第１図）。ここでは、それぞれの地区単位で主な遺構の状況を述べる。その他の遺構については、後掲の遺構一覧表（第１・２表）を参照されたい。

１　Ａ地区

ａ　調査区の層位

調査区は、第３～５次調査の南に位置し、北側を道路、南側を名松線に挟まれた荒地に位置する。調査区は道路に面することから排土の搬出が困難なため、調査区西側と東側で別々に調査を行った。

調査区西側では、西端では表土・床土下で灰黄色砂質シルトが確認でき、検出面となるが、ＳＤ85が見られる部分から東側では中世包含層に当たると思われる褐灰色及び黄灰色の砂混じり土が見られる。調査区東側でも同様であるが、地形が北に向って緩やかに下がり、古代遺構（落ち込みＳＤ96など）の上層に褐灰色砂混じりシルトが堆積する。

確認した遺構は、概ね古代のもので、若干中世の可能性のあるもの（ピット、不整形土坑群など）がある。明確に古墳時代以前の遺構と捉えられるものは無かった。

ｂ　検出した遺構

ＳＤ85　調査区西側で確認した落ち込みである。当初は、過去の調査で確認されているような自然流路になると考えたが、上層の黒褐色シルト（土層８）より下からは遺物は出土していないことから、自然堆積により溝状の落ち込みとなっていた部分が湿地化し、最終的に奈良時代に埋没したものと思われる。西肩は流路と重なるためはっきりと検出できるものの、東側はゆるやかで、明瞭な肩は確認できなかった。下に自然木片など有機物を非常に多く含む暗灰色シルトの堆積があり、断ち割りを行ったが遺物を確認できなかった。

ＳＤ85の西肩には土坑が掘削されていた。いずれも井戸あるいは水溜施設の可能性があるが、明らかではない。いずれも上層の黒褐色シルト除去後に検出でき、ＳＤ85埋没以前の遺構である。埋土は地山ブロックを含む黒色粘質土である。

ＳＤ86～ＳＫ95などの不整形の落ち込みは、ＳＤ85上層の黒色土下、褐灰色シルト（土層９）で検出したものである。数本の杭が打たれた状態で確認できたが、並んでいるような状況は見受けられなかった。ただし、杭自体は出土しなかったものの、ピット状及び溝状の落ち込みがＳＤ85西肩から約７～８mほど離れて列状に見られることから、何らかの施設の痕跡である可能性もある。

ＳＤ96　調査区北東で検出した溝状の落ち込みで、北東に向って落ちる。調査区内での深さは最大で0.6mである。奈良時代の土器や木製品が出土している。

ＳＤ98　調査区南東部で検出した遺構である。幅0.6m、深さ約0.3mの断面Ｕ字形の溝で、地形に沿うように調査区内で大きく蛇行する。

ピット・不整形土坑群　調査区東部中央付近で多数のピット及び細長い土坑状の遺構を確認した。検出面からの深さが約0.3mある建物に伴う可能性のあるピットも混じるが、大半が深さ0.1m程度の非常に浅いものである。ＳＫ106からＳＫ112にかけて0.3～0.4m間隔で平行に並ぶことから何らかの遺構であると思われ、「波板状凹凸面」と呼ばれる道路遺構の可能性がある。山茶椀が出土しており、埋土も中世包含層と同じものであることから、中世の遺構と考えられる。

２　Ｂ地区

ａ　調査区の層位

Ｂ地区は第３次調査区の北側に位置する。調査前の標高は約10.2mで第３・４次調査区より低くなっている。中世の包含層である黄灰色の砂質シルトはほ場整備のため部分的に削平され、表土・床土下で遺構検出面である褐灰色シルトが確認されるところもある。調査区南東部は古墳時代以前の旧流路と思われる粗砂が走っており、古代の遺構は流路埋没後に堆積した黄灰色砂質シルト上で検出できる。遺構検出面は北に向って緩やかに低くなっており、南部では標高約10.0m、北部では約9.6mで確認できる。

b　検出した遺構

検出した遺構には、古墳時代以前の流路、飛鳥・奈良時代の土坑・溝などがある。

①　古墳時代以前

流路ＳＤ131・134　調査区南部で確認した自然流路である。いずれも埋土は小石を含む非常に粗い砂・礫である。調査区東端でわずかに検出できた自然流路の支流と思われる。底部はいずれも標高9.3～9.4mでほぼ平坦である。遺物は若干の小片が混じる程度で明確な時期は不明である。

②飛鳥・奈良時代

流路ＳＤ138　調査区北西で確認したC地区ＳＤ151の東肩と考えられる落ち込みである。調査区西端から約3m検出したが、ＳＤ168（ＳＤ151下層）埋土は確認できなかった。後述する流路に平行するように掘削されたと考えられるＳＤ136が調査区内で北向きに蛇行することから、流路も北向きに方向を変えるものと推測される。

溝ＳＤ142　調査区北西で検出した幅約0.8m、深さ約0.3mの溝である。ＳＤ138の埋土除去後に確認された遺構で、ＳＤ138の東肩に沿うように確認される。導水路のような施設と思われる。

土坑ＳＫ137　調査区ほぼ中央で検出した不整形の遺構である。数基の土坑が切り合っていると考えられるが、明確に分けることはできなかった。中央付近の最も深いところは検出面から約0.4mで、ＳＤ128に切られる。埋土は地山をブロック土に含む黒褐色の粗砂混じりシルトある。上層で炭・焼土が多量に含まれ、土師器甕が数個体破片で出土していることから、この土坑で火が使用されたと考えられる。

土坑ＳＫ143　調査区北西で検出した遺構である。流路ＳＤ138の上層に位置し、東側の一部を検出したのみである。幅約2.4mの隅丸方形を呈し、深さは約0.1mである。周囲にピットが見られ、これらを含めて何らかの施設となるのかもしれない。遺物が底面近くからまとまって出土している。炭・焼土が見られる。

土坑ＳＫ139　調査区中央西で検出した遺構である。1.0m×0.8m程度の不整形の土坑で深さ約0.1mの土坑である。このような数点の土器を含む不整形の浅い土坑が過去の調査でも確認できており、何らかの関係があると考えられる。

溝ＳＤ125　調査区南部で検出した遺構である。C地区ＳＤ176に接続すると考えられる。幅約0.6～1.0mで深さ約0.6mの溝であるが、ＳＤ131と交差する部分は幅1.6mと広くなり、1辺1.6m、深さ約0.8mの隅丸方形を呈する井戸状の落ち込みが見られる。埋土は黒色粗砂混じりシルトである。長脚２段透の高杯が1個体底から浮いた状態で出土している。溝は真北方向にほぼ直行する溝であり、地割に関連する溝の可能性がある。

溝ＳＤ124　調査区南部で検出した幅約1.0m、深さ約0.3mの溝である。C地区ＳＤ154に接続すると思われる。ほぼ真北方向を向いており、地割に関連する遺構と考えられる。なお、B・C地区で検出した溝のうちこの方向性を示すものはＳＤ124（C地区ＳＤ154）と直交するＳＤ121・ＳＤ125（C地区ＳＤ176）のみである。

溝ＳＤ136　調査区中央部で検出した幅約0.6m深さ約0.2mの溝である。C地区ＳＤ152に接続すると考えられ、意図的に流路に平行するように掘削されていると考えられる。調査区東部でやや北向きに方向を変えることから、流路も北向きに方向を変える可能性がある。

溝ＳＤ128　調査区中央を蛇行しながら東西に走る幅1.0～1.6m、深さ約0.3mの溝である。古代の瓦が出土しているが、埋土から中世の遺構の可能性がある。

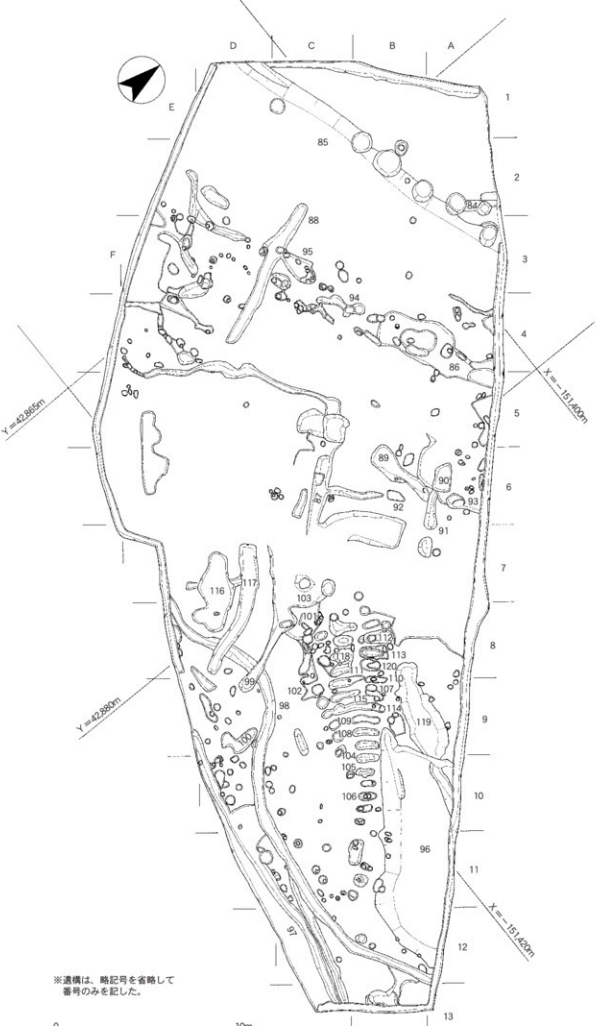
土坑ＳＫ141　調査区中央部で検出した遺構である。径約1.0mの円形を呈し、深さ約0.5mである。井戸枠などは確認できなかったが、素掘りの井戸の可能性がある。

3　C地区

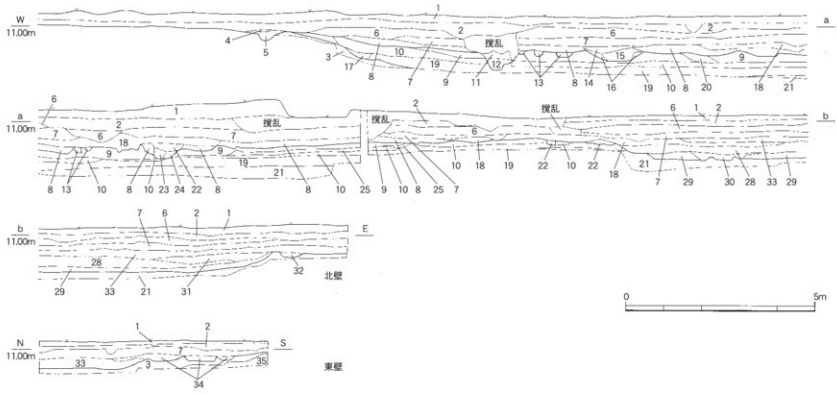
a　調査区の層位

C地区は、B地区の西、第４次調査区の北側に位置する。調査区の南東部と南西の一部を除いてＳＤ151の埋土である黒褐色シルトに覆われている。北部では全面がＳＤ151であるが、ＳＤ151の埋土下で青灰色シルトが確認でき、ＳＤ168の肩部となる。ＳＤ162、ＳＫ164などの遺構も青灰色シルト上で検出しており、ＳＤ168埋没後、一定の期間があって後、ＳＤ151が堆積したと考えられる。

ＳＤ151の見られないところは黄灰色シルトが遺構

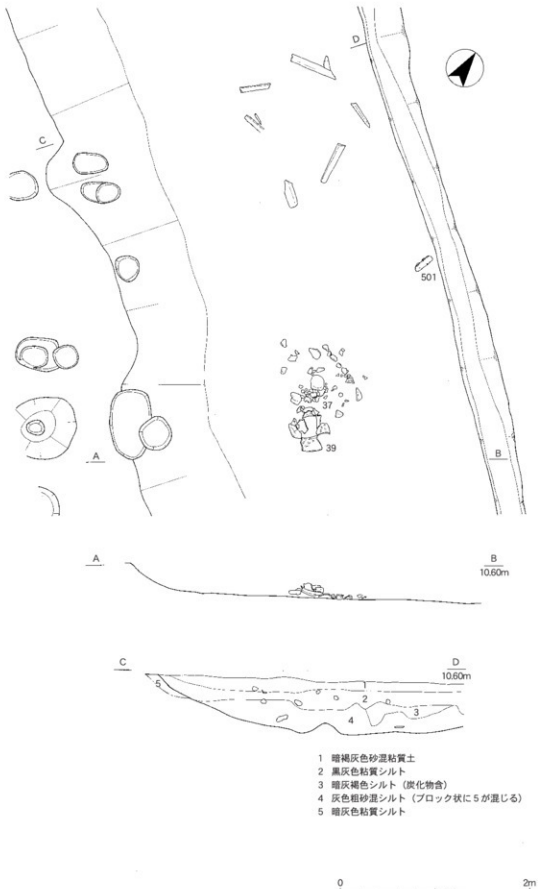


第３図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区遺構平面図（1：200）



1 表土
2 黄灰色砂質土 2.5Y4/1
3 灰黄色シルト 2.5Y6/2（地山）
4 暗褐色シルト（地山ブロック含） 10YR3/3 (SD84埋土)
5 黒褐色シルト 10YR3/2
6 褐灰色砂混じりシルト 10YR4/1
7 暗黄灰色砂混じりシルト 10YR4/2
8 黒褐色シルト（地山ブロック含） 10YR3/1（SD85埋土）
9 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1（検出面）
10 黒褐色シルト（地山ブロック含） 10YR3/1
11 黄灰色粗砂混じりシルト 2.5Y4/1（Pit埋土）
12 11に黒色シルトブロック含 10YR2/1（Pit埋土）
13 黄灰色粗砂混じりシルト 2.5Y4/1（Pit埋土）
14 暗黄灰色粗砂混じりシルト（7より多く砂が混じる） 10YR4/2
15 黒色粘土 10YR2/1 (SD86埋土)
16 褐灰色粗砂混じりシルト 10YR4/1
17 褐灰色シルト（地山ブロック含） 10YR4/1
18 黄灰色シルト 2.5Y4/1
19 極暗褐色粘土（有機物多く含） 7.5YR2/3
20 9に粗砂が多く混じる
21 黄灰色シルト 2.5Y4/1
22 8に粗砂が多く混じる
23 8に粗砂が多く混じる (SD89埋土)
24 8に黄灰色シルトブロック含 2.5Y4/1
25 28と有機物層の互層
26 褐灰色シルトと砂の互層 10YR4/1
27 黄灰色シルト（同色粘土ブロック含） 2.5Y4/1
28 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1
29 粗砂に黄灰色シルトブロック含 2.5Y4/1 (SD96埋土)
30 粗砂が多く混じる黄灰色シルト（有機物含） 2.5Y4/1
31 黒褐色粗砂混じりシルト 2.5Y3/1
32 黒褐色シルト 10YR3/1（SD98埋土）
33 褐灰色砂混じりシルト 10YR4/1
34 褐灰色砂混じりシルト（地山ブロック多く含） 10YR4/1（SD97地埋土）
35 灰白粗砂混じり粘土 2.5Y7/1

第4図　堀田遺跡（第6次）A地区土層断面図（1：100）



第５図　堀田遺跡（第６次）Ａ地区ＳＤ96実測図（１：40）

第６図　堀田遺跡（第６次）Ｂ・Ｃ地区遺構平面図（１：200）

検出面である。検出した遺構は古墳時代から飛鳥・奈良時代のものが中心で、井戸・溝・土坑などがある。

b　検出した遺構

①古墳時代以前の遺構

流路ＳＤ157・133など　Ｂ地区で検出した古墳時代以前の流路が３条確認された。Ｂ地区と同様埋土は粗い砂・礫である。

流路ＳＤ151・168　第３次調査ＳＤ８・４、および第４次調査ＳＲ41と一連の流路である。今回の調査では上層の黒褐色粗砂混じりシルトをＳＤ151、下層をＳＤ168として取上げた。埋土の状況は過去の調査と同様で、ＳＤ151は流路の機能がほぼ停止し、溝状の落ち込みになっていた段階に堆積したもので、飛鳥・奈良時代の遺物が多量に出土している。下層は細砂・粗砂・シルト・粘土が互層になり、木葉・自然木などの有機物を多く含み、埋土に中～粗砂が多く観察できる比較的水流の激しかったと考えられるもので、古墳時代前期から後期にかけての遺物が出土する。ＳＤ151・168の間には褐灰色シルトが安定して見られる。この層は基本的に遺物を含まない層であり、ＳＤ168埋没後ＳＤ151が堆積する間に一定期間の空白が存在したものと考えられる。

ＳＤ151の埋土である黒褐色系シルトは、調査区内の南東部を除いてほぼ全体を0.2～0.6mの厚さで覆っている。調査区内で北西から北東方向に向きを変え、Ｂ地区の西端でその東肩が確認できる。

ＳＤ168は調査区内で北東方向に向きを変える。調査区北部では西肩が直線的に北向きになり、Ｂ地区で確認できないことから、再度北向きに方向を変えるようである。幅約５mで、底は標高約8.5mである。古墳時代後期の遺物が、流路の東肩部分からまとまって出土している。

調査区南部では、ＳＤ168から分岐するＳＤ179を検出した。土層断面の観察では、ＳＤ179はＳＤ168よりも新しいと考えられるが、調査中は前後関係を把握することができなかった。第３次調査でＳＤ４が分岐するような形が見られ、それに接続するものと考えられる。

溝ＳＤ161・166　ＳＤ151の埋土除去後、ＳＤ168の西肩を切る形で検出した遺構である。上層の黒褐色土をＳＤ161、下層をＳＤ166とした。ＳＤ161は深さ0.4m程の溝状の落ち込みと考えられ、ＳＤ166の底は標高約8.9mである。第４次調査で確認されたＳＲ41導水路と同様の遺構と考えられる。

②古代の遺構

飛鳥・奈良時代に相当する遺構は、調査区南東部のほか、北西部のＳＤ151下から落ち込み・土坑・溝などが検出されている。

土坑ＳＫ164　ＳＤ151埋土除去後に一部を検出した幅約1.0m深さ約0.1m程の浅い落ち込み状の遺構である。埋土に炭・焼土が多量に含まれており、土師器甕がばらばらになった状態で出土している。

落ち込みＳＤ162　調査区北部、ＳＤ151埋土除去後に検出した幅約6.0m深さ0.4m程の緩やかな溝状の落ち込みである。底部近くから完形に近い土器や土馬などが出土している。ピットなども確認できる。出土遺物から、祭祀に伴う遺構の可能性がある。

溝ＳＤ152　調査区南東部で検出した幅約0.6m、深さ約0.3mの遺構である。Ｂ地区ＳＤ136と接続すると思われる。流路を意識して平行に掘削されていると考えられる。真北を意識した地割の溝であるＳＤ154やＳＤ176を切っており、より新しい時代の地割に関連してくる溝の可能性があるが、溝のみしか確認できないため、詳細は不明である。

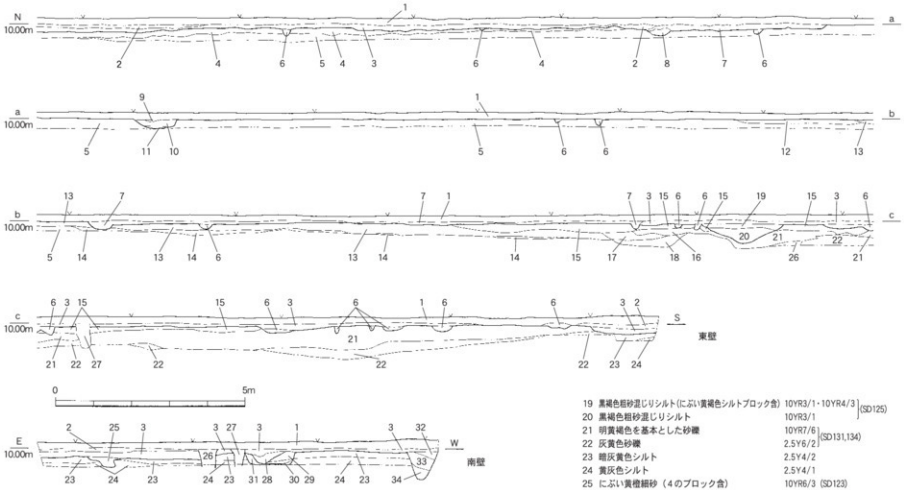
井戸ＳＥ155　調査区中央東で検出した遺構である。１辺約2.4mのやや隅丸の方形を呈し、断面は上部はラッパ状に大きく開き、底部は幅0.3mほどで非常に狭いものである。深さは検出面より1.9m（標高約8.2m）である。人力で約1.5mほど掘削したところほぼ完形の平瓶が倒立した状態で出土し、下にも遺物があることが判明したため人力掘削を中止し、重機にて断ち割りを行った。

断ち割りの結果、井戸底から土師器甕、須恵器杯・甕などが出土した。井戸枠などは見られなかった。

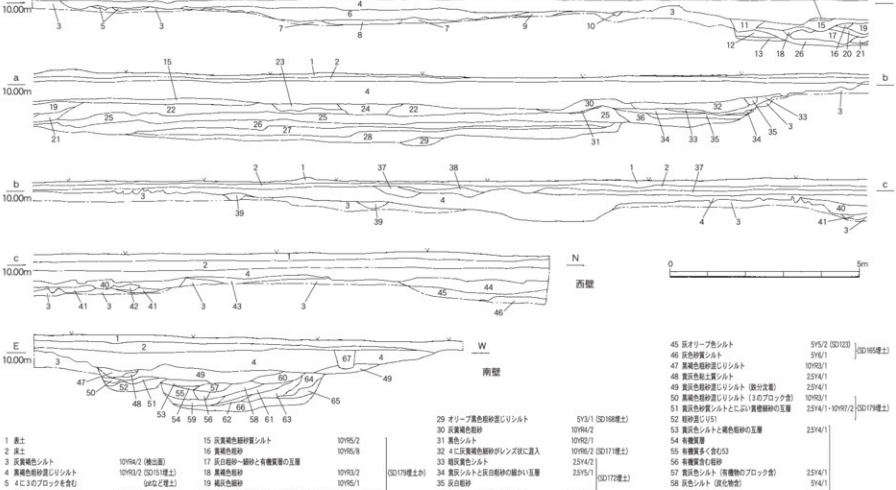
溝ＳＤ160・178　ＳＥ155とＳＤ151に接続する溝である。ＳＤ160はＳＤ178より派生している。ＳＥ155の導水路・排水路と考えられるが、ＳＥ155が粘土層で留まっており、常時の水溜が困難なための導水路と考えられる。

（水谷）

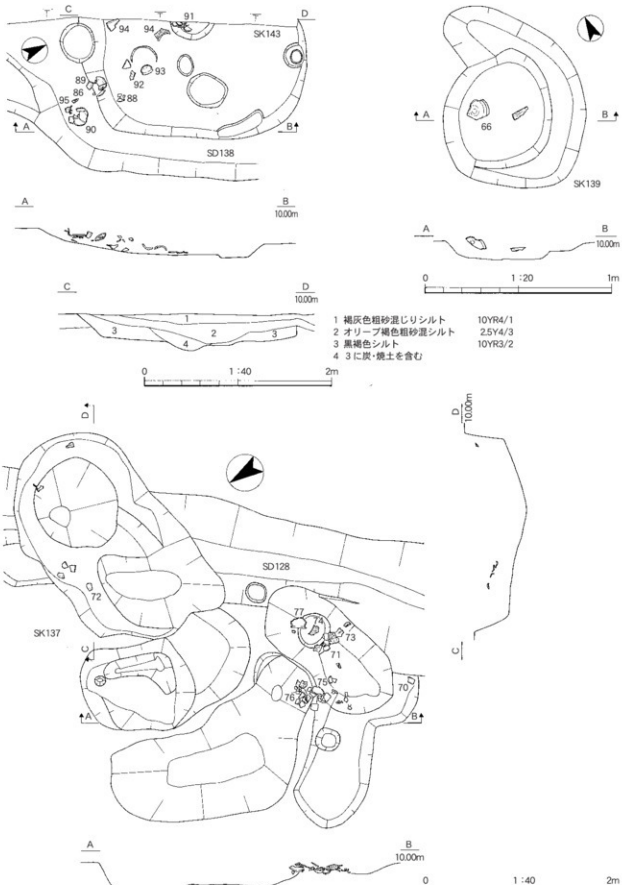
第７図　堀田遺跡（第６次）B地区土層断面図（1：100）



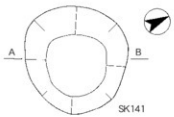
1	表土	
2	床土	
3	黄灰色小石混じり砂質土	2.5Y5/1
4	灰黄褐色シルト	10YR4/2
5	にぶい黄褐色シルト	10YR5/3
6	黒褐色粗砂混じりシルト（地山ブロック含）	2.5Y3/1
7	ほ場整備耕作土	
8	粗砂と黄灰色砂質土の互層	2.5Y4/1（SD136）
9	灰黄褐色粗砂混じりシルト	10YR4/2（SD128）
10	９に粗砂が多く混じる	（SD128）
11	黄灰色砂質土	2.5Y4/1
12	にぶい黄褐色砂質土	10YR4/3
13	暗灰黄色粗砂混じりシルト	2.5Y4/2（SD130）
14	にぶい黄褐色粗砂混じり砂質土	10YR4/3
15	黄灰色粗砂混じり砂質土	2.5Y4/1（SD130,131）
16	黒褐色粗砂混じり黄灰色砂質土	2.5Y3/1・2.5Y4/1
17	黄灰色砂質土	2.5Y4/1（SD127）
18	黒褐色粗砂混じりシルト	10YR3/1
19	黒褐色粗砂混じりシルト（にぶい黄褐色シルトブロック含）	10YR3/1・10YR4/3（SD125）
20	黒褐色粗砂混じりシルト	10YR3/1
21	明黄褐色を基本とした砂礫	10YR7/6（SD131,134）
22	灰黄色砂礫	2.5Y6/2
23	暗灰黄色シルト	2.5Y4/2
24	黄灰色シルト	2.5Y4/1
25	にぶい黄橙細砂（４のブロック含）	10YR6/3（SD123）
26	撹乱	
27	暗渠	
28	粗砂混じりシルト	2.5Y4/1
29	にぶい黄色粗砂（４のブロック含）	2.5Y6/3（SD124）
30	にぶい黄色粗砂	2.5Y6/3
31	黄灰色粗砂混じりシルト	2.5Y4/1
32	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/3
33	暗灰黄色粗砂混じりシルト	2.5Y4/2（SD127）
34	粗砂と黄褐色シルトの互層	2.5Y5/3



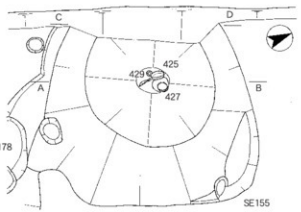
1 表土
2 床土
3 灰黄褐色シルト　10YR4/2 (検出面)
4 黒褐色粘砂混じりシルト　10YR3/2 (SD151埋土)
5 4に3のブロックを含む　(pitなど埋土)
6 黒褐色粘砂混じりシト　10YR3/2
7 暗灰色シルト (旧分北壁)　10YR5/1 (基盤)
8 黒褐色シルト (7のブロック含)　10YR2/1
9 褐色粗砂
10 5と同じ
11 黒褐色粗砂混じりシルト　2.5Y3/1
12 黄灰色シルトと細砂の互層　2.5Y4/1
13 黄灰色シルトと粗砂の互層　2.5Y4/1
14 黒褐色粗砂　10YR3/2 (SD179埋土か)
15 灰黄褐色細砂質シルト　10YR5/2
16 黄褐色粗砂　10YR5/8
17 灰白粗砂～細砂と有機質層の互層
18 黒褐色粗砂　10YR3/2 (SD179埋土か)
19 褐灰色細砂　10YR5/1
20 黄灰色細砂混じりシルトと黄灰色シルトの互層　2.5Y4/1・2.5Y5/1
21 黄灰色シルト　2.5Y4/1
22 灰色砂質シルト (旧分北壁)　5Y5/1
23 灰黄色砂と20の互層　2.5Y6/2
24 黄灰色シルト　2.5Y5/1 (SD168埋土)
25 23に有機質多く混じる
26 黄灰色シルトと有機質多く含む粗砂の互層　2.5Y4/1
27 褐灰色シルト　2.5Y4/2
28 砂礫層
29 オリーブ黒色粗砂混じりシルト　5Y3/1 (SD168埋土)
30 灰黄褐色粗砂　10YR4/2
31 黒色シルト　10YR2/1
32 4に灰黄褐色粗砂がレンズ状に混入　10YR6/2 (SD177埋土)
33 暗灰黄色シルト　2.5Y4/2
34 黄灰シルトと灰白粗砂の細かい互層　2.5Y5/1 (SD173埋土)
35 灰白粗砂
36 黄灰色シルトと灰白粗砂の互層　2.5Y5/1
37 地山ブロック含む4　(SD150埋土)
38 灰黄褐色砂質土　10YR4/2 (中世包含層)
39 3のブロック含む4　(pitなど埋土)
40 黒褐色粗砂混じりシルト (褐灰色シルトブロック含)　10YR3/2・10YR4/1
41 ブロックを多量に含む40　(SD162埋土)
42 灰黄褐色粗砂混じりシルト　10YR4/2
43 炭・焼土含む40　(SK164埋土)
44 粗砂・砂分多く含む4　(SD165埋土)
45 灰オリーブ色シルト　5Y5/2 (SD123)
46 灰色砂質シルト　5Y6/1 (SD165埋土)
47 黒褐色粗砂混じりシルト　10YR3/1
48 黄灰色粘土質シルト　2.5Y4/1
49 黄灰色粗砂混じりシルト (旧分北壁)　2.5Y4/1
50 黒褐色粗砂混じりシルト (3のブロック含)　10YR3/1
51 黄灰色砂質シルトとにぶい黄橙細砂の互層　2.5Y4/1・10YR7/2 (SD179埋土)
52 粗砂混じり51
53 黄灰色シルトと褐色粗砂の互層　2.5Y4/1
54 有機質層
55 有機質多く含む53
56 有機質含む粗砂
57 黄灰色シルト (有機物のブロック含)　2.5Y4/1
58 灰色シルト (炭化物含)　5Y4/1
59 黒褐色砂質シルト　2.5Y3/1 (SD168埋土)
60 黒褐色粗砂混じりシルト　10YR3/1
61 黒褐色砂質シルト　2.5Y3/1
62 61と粗砂の互層
63 黄灰色砂質シルト　2.5Y4/1
64 黒褐色粗砂混じりシルト (3のブロック含)　2.5Y3/1
65 黄灰色砂質シルト　2.5Y5/1
66 砂礫層と有機質層の互層
67 暗渠

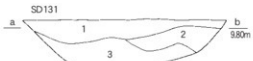


第９図　堀田遺跡（第６次）Ｂ地区ＳＫ143・137・139実測図

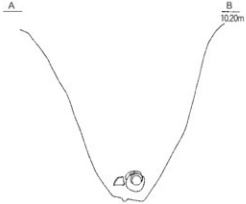


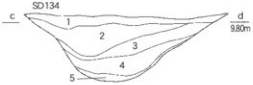
1 黒褐色粗砂混粘質土　10YR3/1
2 黄灰色粘質シルト　2.5Y4/1
3 1とほぼ同じ
4 暗灰黄色粘質土に3が混じる　2.5Y4/2



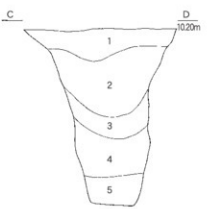


1 にぶい黄色粗砂　2.5Y6/4
2 3～5cm大の砂利層
3 にぶい黄橙色粗砂に1cm程の小石が混る 10YR6/4

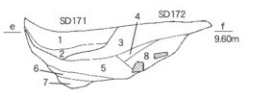




1 暗灰黄色細砂 2.5YR5/2 に黒褐色粘質土がブロック状に入る 2.5Y3/1
2 黄灰色粗砂に1～2mmの小石が混入 2.5Y5/1
3 細砂～中粒砂と粗砂の互層
4 2～5mmの大の砂利層
5 1cm以上の砂利層



1 黒色粗砂混土
2 1に黄灰色シルト大ブロックと黒色シルトブロックが入る
3 1に暗黄灰色シルト大ブロックが入る
4 1に暗黄灰色シルトブロックと褐色小石が入る
5 青灰色粘土



1 黒褐色粗砂混粘質シルト 2.5Y3/2 に暗灰黄色粘質シルトがブロック状に入る 2.5Y4/2
2 黄灰色粘質シルト 2.5Y4/1
3 灰黄色粗砂 2.5Y6/2 下部に鉄分
4 黄灰色粗砂 2.5Y5/1 と砂質土の互層
5 灰黄色小石混粗砂 2.5Y6/2 に黄灰色粘質土がブロック状に入る
6 黄灰色粗砂混シルト 2.5Y4/1
7 黒褐色粗砂混粘質シルト 2.5Y2/1 に鉄分有
8 黄灰色粗砂混砂質土 2.5Y5/1

第10図　堀田遺跡（第6次）B・C地区各遺構実測図

遺構番号	性　格	時　代	大地区	小地区	備　考
ＳＤ84	溝		A	A－1	ＳＤ84と接続する幅0.6m、深さ0.3mの溝
ＳＤ85	自然流路	奈良	A		溝状の落ち込み
ＳＤ86			A	A－4	ＳＤ85内、埋土の違いか
ＳＤ87		飛鳥・奈良	A	c－6	ＳＤ85内、須恵器甕がまとまって出土
ＳＤ88		奈良	A		ＳＤ85内の溝状の落ち込み
ＳＤ89			A	B－6	ＳＤ85内の不整形の落ち込み
ＳＫ90			A	A－6	ＳＤ85内の不整形の落ち込み
ＳＫ91			A	A－6	ＳＤ85内の不整形の落ち込み
ＳＫ92			A	B－6	ＳＤ85内の不整形の落ち込み
ＳＫ93		飛鳥・奈良	A	A－6	ＳＤ85内の不整形の落ち込み
ＳＤ94			A	B・C－4	ＳＤ85内の不整形の落ち込み
ＳＫ95		飛鳥・奈良	A	C－3	ＳＤ85内の不整形の落ち込み
ＳＤ96	自然流路	奈良	A	A９～B12	溝状の落ち込み
ＳＤ97	溝		A	C11～D11	幅0.6m、深さ0.3mの溝
ＳＤ98	溝	奈良	A	E８～B13	調査区内で蛇行、２条に別れる
ＳＤ99	溝		A	D８・９	撹乱
ＳＫ100	落ち込み		A	D９	不整形の落ち込み
ＳＫ101	落ち込み		A	C・D８	不整形の落ち込み
ＳＤ102	落ち込み		A	C８	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＤ103	溝		A	C８	撹乱
ＳＫ104	落ち込み		A	B・C10	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ105	落ち込み		A	B・C10	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ106	落ち込み		A	B・C10	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ107	落ち込み		A	B９	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ108	落ち込み		A	B・C９	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ109	落ち込み		A	B・C９	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ110	落ち込み		A	B９	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ111	落ち込み		A	B・C９	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ112	落ち込み		A	B８	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ113	落ち込み	鎌倉	A	B８	不整形土坑、波板状凹凸面か、墨書山茶椀
ＳＫ114	落ち込み		A	B・C９	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ115	落ち込み		A	C９	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＫ116	撹乱坑		A	D７・８、C７	撹乱坑
ＳＤ117	撹乱坑		A	D７・８	撹乱坑
ＳＫ118	落ち込み		A	C８	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＤ119	落ち込み	飛鳥・奈良	A	A８	ＳＤ85につながる落ち込み
ＳＫ120	落ち込み		A	B８	不整形土坑、波板状凹凸面か
ＳＤ121	溝	奈良	B	A８～C９	途切れる
ＳＫ122	土坑		B	B１	浅い土坑状の落ち込み
ＳＤ123	溝		B	C１～B３	新しい溝か
ＳＤ124	溝	奈良	B	B１～A４	ＳＤ127を切る、
ＳＤ125	溝	飛鳥	B	A５～D５	断面逆台形状、高杯ほぼ完形出土、ＳＤ176と一連
ＳＤ126	溝		B	D６、C６～９	ほ状整備以前の水田区画溝
ＳＤ127	溝	古代以前	B	A１～C５	ＳＤ124,125に切られる
ＳＤ128	溝	古代以降	B	A９～C15	ＳＫ137を切る

第１表　堀田遺跡（第６次）遺構一覧表（１）

遺構番号	性　格	時　　代	大地区	小地区	備　　考
ＳＤ129			Ｂ		ＳＤ121と同じ溝のため抹消
ＳＤ130	流路	古墳以前	Ｂ	Ｄ６～８	ＳＤ131･134と関連
ＳＤ131	流路	古墳以前	Ｂ	Ａ８～Ｃ４	古墳時代以前の流路、粗砂、Ｃ地区ＳＤ157と一連
ＳＤ132			Ｂ		ＳＤ127と同じ溝
ＳＤ134	流路	古墳以前	Ｂ	Ａ４～Ｃ３	ＳＤ131と一連
ＳＤ135	溝		Ｂ	Ｂ８･９	撹乱
ＳＤ136	溝		Ｂ	Ａ14～Ｂ16	Ｃ地区ＳＤ152と一連か
ＳＫ137	土坑	飛鳥･奈良	Ｂ	Ａ･Ｂ10･11	数基の土坑が切り合う、炭・焼土多量
ＳＤ138	溝	飛鳥･奈良	Ｂ	Ａ17～Ａ･Ｂ21	Ｃ地区ＳＤ151と一連
ＳＫ139	土坑	奈良	Ｂ	Ｃ10	浅い土坑
ＳＤ140	溝		Ｂ	Ａ16～Ｂ17	ほ場整備以前の水田区画溝
ＳＫ141	土坑	飛鳥	Ｂ	Ｂ15	井戸か、素掘り
ＳＤ142	溝	奈良	Ｂ	Ａ19～Ｂ21	ＳＤ138下で検出、ＳＤ166と一連か
ＳＫ143	土坑	奈良	Ｂ	Ａ18･19	ＳＤ138を切る方形の土坑
ＳＤ144	溝	飛鳥･奈良	Ｂ	Ａ･Ｂ20	ＳＤ138下で検出、溝状の落ち込み
ＳＤ150	溝	ほ状整備以前	Ｃ	Ｂ14～Ｄ15	ほ場整備以前の溝
ＳＤ151	流路	飛鳥･奈良	Ｃ		３次ＳＤ８、４次ＳＲ41上層と同じ
ＳＤ152	溝	飛鳥･奈良	Ｃ	Ｄ２～Ｄ10	流路と平行する溝、ＳＤ154･176を切る。ＳＤ136に接続か
ＳＤ153	落ち込み		Ｃ	Ｄ７･８	不整形の浅い落ち込み
ＳＤ154	溝		Ｃ	Ｄ８～Ｃ10	浅い溝、ＳＤ152に切られる
ＳＥ155	井戸	奈良	Ｃ	Ｄ８･９	素掘り
ＳＫ156	土坑	飛鳥･奈良	Ｃ	Ｃ･Ｄ10	数基の土坑が切り合う？
ＳＤ157	流路	古墳以前	Ｃ	Ｄ10･11	Ｂ地区ＳＤ131と一連
ＳＫ158	土坑		Ｃ	Ｄ11	ピットか
ＳＤ159	溝		Ｃ	Ｄ12	ＳＤ151肩部の落ち込み、杭跡か
ＳＤ160	溝	奈良	Ｃ	Ｄ10	ＳＤ151、ＳＤ178と接続
ＳＤ161	溝	飛鳥･奈良	Ｃ	Ｃ14～Ｄ17	ＳＤ167と同じ。
ＳＤ162	落ち込み	飛鳥･奈良	Ｃ	Ｃ16～Ｄ18	浅い落ち込み、土馬出土
ＳＫ163	落ち込み		Ｃ	Ｃ18	不整形の褐色粗砂の落ち込み
ＳＫ164	土坑	飛鳥･奈良	Ｃ	Ｃ18･19	ＳＤ151下で検出。埋土に焼土、炭が混じる
ＳＤ165	溝	古墳前期後半～後期	Ｃ	Ｄ17～20	ＳＤ151下層、ＳＤ168と同じ。北部はＳＤ151と遺物混同
ＳＤ166	溝	古墳前期後半～後期	Ｃ	Ｃ14～Ｄ17	ＳＤ161下層、ＳＤ172と同じ（調査時ＳＤ150以北をＳＤ166で取上げ）
ＳＤ167	溝	古墳前期後半～後期	Ｃ	Ｃ14～Ｄ17	ＳＤ161と同じ
ＳＤ168	流路	古墳前期･後期	Ｃ		ＳＤ151下層、３次ＳＤ４、４次ＳＲ41と一連
ＳＤ169	溝		Ｃ	Ｄ13	溝状の浅い落ち込み
ＳＤ170	溝		Ｃ	Ｄ14	溝状の浅い落ち込み、ＳＤ169を切る
ＳＤ171	流路	奈良	Ｃ	Ｂ10～Ｃ14	ＳＤ161と同じ（調査時ＳＤ150以南をＳＤ171として取上げ）
ＳＤ172	流路	古墳前期後半～後期	Ｃ	Ｂ10～Ｃ14	ＳＤ166と同じ（調査時ＳＤ150以南をＳＤ172として取上げ）
ＳＤ173	溝		Ｃ	Ｃ16	ＳＤ166に接続
ＳＤ174	溝		Ｃ	Ｄ４～Ｃ５	ＳＤ152と平行、途中で途切れる
ＳＤ175	溝		Ｃ	Ｃ６	ＳＤ151と接続
ＳＤ176	溝	飛鳥･奈良	Ｃ	Ｃ３～Ｄ４	ＳＤ151と接続
ＳＤ177			Ｃ		抹消
ＳＤ178	溝	奈良	Ｃ	Ｃ･Ｄ９	ＳＥ155、ＳＤ151に接続、導水溝か
ＳＤ179	溝	奈良以前	Ｃ	Ｄ１～Ｃ４	ＳＤ151下層、ＳＤ168を切る

第２表　堀田遺跡（第６次）遺構一覧表（２）

Ⅳ　堀田遺跡の出土遺物

第６次調査区から出土した遺物は、整理箱にして約58箱である。時期的には縄文時代晩期から中世にまで及ぶ。飛鳥・奈良時代および古墳時代前期の土器類が中心で、若干の鉄製品・木製品などを含む。

以下、各調査区ごとの出土遺物を、遺構単位となるものを中心に記述する。なお、飛鳥・奈良時代の土器については、飛鳥・藤原・平城京の都城における土器分類と編年（以下、「都城分類」「都城編年」と呼称。）[1]に準拠していく。また、個々の土器の詳細については、遺物観察表(第３～14表）を参照されたい。

１　土器類

ａ　Ａ地区出土の土器類

縄文土器（１）　１は包含層中から出土した縄文土器である。口縁部外面に貼付突帯が見られ、押し引きの刻目文が施されている。晩期末の馬見塚式に相当するものと考えられる。

埴輪（２～６）　いずれも遺構には伴わないものである。２～４は円筒埴輪、５は蓋形埴輪の笠部片、６は人物埴輪の脚部と考えられる。

５の外面には３本の平行線文様が見られる。６は盛装の人物と考えられ、脚部を表現していることから男性人物と考えられる。爪先部は方形に整形されているため、沓を履いていると考えられる。

これらの埴輪は、概ね古墳時代中期末から後期初頭頃のものと考えられる。

溝ＳＤ85出土土器（７～30）　７～14は土師器。７は杯Ｃ、８～10は杯Ａ、11～13は皿Ａ、14は高杯脚部である。７には放射状暗文、８・11には螺旋状暗文が見られる。

15～26は須恵器。15・16は杯Ｂ蓋、17は大きめの杯Ｂ蓋であろう。18は杯Ａ、19は高杯である。20は甕、21は小形の壺、22は壺で、この３点には内面に漆の付着が見られる。20には破断面にも漆が付着しており、少々の破損があっても漆の容器に用いられたものと考えられる。24は横瓶、25・26は壺ないしは甕である。

27～30は土師器甕。29は口縁部がやや内彎し、口縁端部がやや肥厚するものである。この特徴は伊勢ではあまり見られないものなので、伊賀以西からの搬入品である可能性が高い。30は口縁端部が内面に傾くもので、他の甕よりもやや新しい要素を有している。

これらの土器類は、都城編年の平城Ⅱ～Ⅲに併行するものと考えられる。

土坑ＳＫ93出土土器（31）　須恵器杯身１点を図示した。田辺昭三氏による陶邑編年(以下、「田辺編年」と呼称)[2]のＴＫ217型式に併行するものであろう。

土坑ＳＫ95出土土器（32）　図示したのは須恵器ねり鉢である。概ね７世紀代のものと考えられる。

溝ＳＤ98出土土器（33・34）　古墳時代と飛鳥・奈良時代のものが混在している。33は古墳時代中期頃と考えられる台付甕の脚台部。34は都城編年の平城Ⅲ併行頃と考えられる土師器杯Ｂである。

溝ＳＤ87出土土器（35）　図示したのは、須恵器俵瓶のみである。７世紀から８世紀前半頃までのものであろう。

溝ＳＤ96出土土器（36～39）　少量ながら良好な土器が見られる。36は土師器短頸壺で薬壺になると考えられる。口縁部外面には縦方向の暗文が施されている。37は土師器長胴甕。外面のハケメは、下半約2/3に細目の原体を用いている。38は須恵器で、薬壺の蓋であろうか。39は須恵器で大形の壺（甕）である。これらは概ね都城編年の平城Ⅲ併行期頃のものであろう。

土坑ＳＫ113出土土器（40）　13世紀代の陶器椀を１点図示した。40は瀬戸産の陶器椀（山茶椀）で、藤澤良祐氏による編年[3]の第７型式に相当する。底部外面には墨書で「○」の記号がある。

ピット出土土器（41・42）　ピットから出土した土器である。41は須恵器有蓋高杯の蓋で、内面には焼成前のヘラ記号がある。古墳時代後期後半のものであろう。42は須恵器無蓋高杯である。

包含層出土土器（43～52）　遺構に伴わない土器類を一括した。43～46・48・49は須恵器で、43は杯Ａ、

44は杯B、45・46は壺である。46は高台と体部との境目に3方向の装飾的穿孔を施している。48は壺、49は短頸壺である。47は緑釉陶器で、軟質の素地である。50・51は土師器甕で、51は9世紀代のものと考えられる。52は移動式カマドの袖部である。

瓦類（53～56）　53・54は平瓦、55・56は丸瓦である。平瓦には格子目叩きが見られる。いずれも、近隣の天花寺廃寺に関係するものと考えられる。

b　B地区出土の土器類

縄文土器（57～61）　いずれも晩期に相当するものである。57は深鉢の口縁部で、口縁端部下方が外側にやや肥厚している。58は深鉢で、内外面ともにハケ状工具による条痕文が施されている。59～61は突帯文の付く深鉢で、突帯上は、59は無文、60・61は押し引き刺突文が見られる。60の刺突は、残りが悪くて原体は不明だが、61の刺突と突帯よりも上方の条痕文は、いずれも二枚貝が原体と思われる。60は五貫森式、61は馬見塚式に相当する。

溝ＳＤ131出土土器（62・63）　62は土師器のミニチュア土器で、蓋の可能性がある。63は壺の底部で、古墳時代前期のものであろう。

溝ＳＤ144出土土器（64）　土師器杯Ｇである。7世紀後半から8世紀前半頃のものと思われる。

溝ＳＤ125出土土器（65）　65は須恵器有蓋高杯で、6世紀後葉から7世紀前半頃のものであろう。

土坑ＳＫ139出土土器（66）　66は須恵器杯蓋で、7世紀後葉頃のものと考えられる。

溝ＳＤ171出土土器（67）　67は須恵器の杯身である。時期的には、7世紀後葉から8世紀前葉頃のものであろう。

土坑ＳＫ141出土土器（68）　68は土師器の杯Ａ。外面体部下半にのみヘラミガキが認められる。7世紀後葉頃のものであろう。

溝ＳＤ128出土土器（69）　69は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に格子目叩き痕が見られる。

土坑ＳＫ137出土土器（70～77）　比較的まとまっている一群である。70は土師器蓋で、上面には丁寧なヘラミガキが見られる。71は土師器皿Ｂ、71は須恵器杯Ａである。73～75は土師器甕で、77は鉢かも知れない。74は、体部内面全体にヘラケズリが見られること、口縁部がやや内彎することなど、当地在来の甕（73・77など）とは異なっている。上記の要素からは、伊賀方面からの搬入品（もしくは模倣品）である可能性が考えられる。

流路ＳＤ138出土土器（78～85）　Ｃ地区の流路ＳＤ168と同一と考えられる遺構である。78は土師器杯Ａで、内面には2段の斜放射暗文が見られる。79～81は土師器鉢で、81は1段の斜放射暗文と螺旋状暗文が組み合わされている。81は、Ｃ地区ＳＤ168から出土した破片と接合している。82～85は須恵器で、82は杯Ｂの蓋、83は杯Ａ、84は皿Ａ、85は壺である。これらは、都城編年の飛鳥Ⅳ～平城Ⅰに併行するものと考えられる。

土坑ＳＫ143（ＳＤ138上層）出土土器（86～95）　ＳＤ138の上層に相当する一群で、出土状況としてのまとまりはよい。

91・92は須恵器、他は土師器である。86・87は杯Ｃ。86には、斜放射暗文と螺旋暗文が見られる。88は杯Ａないしは杯Ｃの蓋で、やや粗雑である。89は高杯。90は皿Ｂで、内面には斜放射状暗文が見られる。外面のミガキは、裏から見て反時計回りに8分割で施されている。91は杯ＡⅡ、92は杯Ｂである。93は小形の甕、94は甕、95は壺である。

これらは、90の形態から、都城編年の平城Ⅱに併行すると考えられる。

c　C地区出土の土器類

縄文土器（条痕文系土器）（96・97）　96は外面に二枚貝による条痕文が施される。97は口縁端部に二枚貝による刻目文を、外面には、同じく二枚貝と考えられる条痕文が見られる。96は縄文時代晩期、97は弥生時代前期の三河地方付近で流行した条痕文系土器と考えられる。

流路ＳＤ168出土遺物

流路ＳＤ168から出土した遺物のうち、古墳時代前期のものを「Ａ群」、古墳時代後期を中心としたものを「Ｂ群」、飛鳥・奈良時代を中心としたものを「Ｃ群」として報告する。Ａ～Ｃ群は、時期的にはほぼ明確に分離可能であるが、遺構での出土状況からは一部混在しつつ出土している。

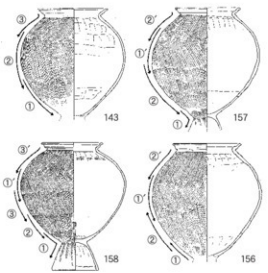
Ａ群の遺物（98～183）　ここに掲げたものは、いず

れも古墳時代前期後半に相当する遺物である。98～100はミニチュアの壺、あるいは小形丸底壺の類である。101～104は小形丸底壺の類で、101・103は平底となっている。103の頸部には沈線状の工具痕があり、後述のS字状口縁台付甕（以下、「S字甕」と呼称）の頸部調整手法と共通している。101の内外面と104の外面には、煤の付着が見られる。105・106は小形器台である。

107～130は高杯。杯部形態は、107～115のように屈曲して開くもの（高杯A）と、116・117のように杯下部が椀状をなすもの（高杯B）の、大きく2種類がある。118・119は、これらと少し形態が異なるものの、いずれも高杯Aの類であろう。120～130の脚部は、いずれも高杯Aと考えられる。高杯Aの脚柱部は、111・114・115・123～130のように、外面に面取り状の板ナデを施すものであり、その手法は後述のS字甕の脚台部調整と同じものである。111・119・124・126・128～130は、内外面に煤が付着しているが、なかでも111・119・130にはタール状の液垂れが見られ、後世の灯明皿を思わせる。

131～142は壺。131・132は二重口縁壺で、132の外面には煤が付着していることから、煮炊きに用いられたものであろう。133は外反する口縁部を持つ広口壺で、二重口縁壺の下部のみで成形を終えたような形態である。134～135は口縁部の外反しない広口壺。134・13ともに、体部下半に擬口縁を形成して体部成形するものである。135の内面には炭化物が、134・136の外面には煤が付着しているので、いずれも何らかの煮炊きに用いられたものと考えられる。139～142の底部も、広口壺と考えられる。137は長頸壺で、外面には縦方向のヘラミガキが見られる。体部成形は、やはり下半に擬口縁を用いるものである。

143～181は台付甕。S字甕で、口縁部形態からはC類[4]に相当するもの（143～152）とD類に相当するもの（153～168）、および口縁部が大きく開くもの（169・170）があるが、C類およびD類（古）の特長である体部外面上半の装飾的横ハケメが見られない。また、頸部外面には、143を除き、沈線状の工具押圧痕が見られる。口縁部形態の差があるとはいえ、これら概ね同じ時期に相当するものと考えるべきかと思われる。



第11図　台付甕のハケメ調整（①→②→③の順に施されている）

体部外面のハケメ調整手法を見ると、第11図に示したような違いが見られる。ハケメは、体部を輪切りに3～4分割した状態で施される。いずれの部位も、ハケメ単独の動きとしては「上→下」に施されている。分割部位の上ほど後に施される、つまり、頸部から体部上半にかけての左下がりのハケメが最終になるのであるが、156・157のように、体部下半に後出のハケメが施されるものも見られる。古い段階のものは158のように丁寧で、新しい時期のものほど143のような施され方が多いように見受けられる。次第に手法が簡略化するものと考えられる。

157・158は、体部の下寄り1/4ほどに煤の付着が見られない部分がある。体部下半が灰などで覆われた状態で使用されたためであろうか。

169・170は、基本的にはS字甕の系統であるが、口縁端部がやや肥厚する特長は、当該時期の布留系甕の影響と考えるべきであろう。

182・183は丸底甕。182は口縁端部がやや突出し、口縁部が「く」の字形を呈するものであり、近畿地方の庄内系甕の影響が考えられる。183は体部外面ヘラケズリで調整するものであるが、体部内面下半には擬口縁が確認できることから、基本的には在来の手法で製作されたと考えられる。

B群の遺物（184～218）　ここに掲げたものは、古墳時代後期に相当すると考えた遺物である。

184は鉄斧。挿入式のもので、鋳造と考えられる。時期的には6～7世紀代と考えられる。185はミニチュアの粗製土器である。雲出烏貫遺跡に類例があり[5]、

それが古墳時代後期にあたることから、ひとまずここに含め置いた。

以下の土師器は、河曲地区内遺跡群（鈴鹿市河田町・十宮町）における河曲Ｃ群土器分類[6]に準拠していく。186は高杯Ｂ、187・188は台付小形鉢である。188は古墳時代前期後半のものかも知れない。189・190は小形壺Ｃで、190の外面には煤が付着している。191・192は台付甕Ａで、Ｓ字甕の系統である。193・194は甕Ｂで長胴形になると考えられる。195は鉢Ａで、口縁部が開くものである。196は把手付鉢で、あまり類例を見ないもの。把手は１方にのみ付く。内面には、上部に煤、底にはベンガラと思われる赤色顔料が付着しているため、顔料精製のために用いられた特殊な器種と考えられる。口縁部形態から、当該時期のものと判断した。

197～218は須恵器。197～203は杯蓋、204は器形不明ながら何かの蓋、205は壺の蓋、206～212は杯身、213は有蓋高杯である。197がやや古く、田辺編年のＴＫ10型式併行頃、その他はＴＫ43～217型式に併行する頃のものであろう。205の内面には「○」と「×」とを組み合わせたヘラ記号が見られる。212の外面には、ベンガラと見られる赤色顔料で「十」字形の記号が塗布されている。同様な赤色顔料による記号は、小屋城１号墳[7]（安芸郡安濃町）やガガフタ２号墳[8]（一志郡白山町）に認められる程度で、例は少ない。

214～218は壺。214はずんぐりした壺で、底部を回転ケズリする以外は、全身にカキメを巡らしている。216は底部が平底となり、肩の張らない形態をなすもので、百済系の徳利形須恵器と呼ばれるものである[9]。焼成も瓦質を呈しており、他のものと比べても一風変わっている。

Ｃ群の遺物（219～236）　ここに掲げたものは、飛鳥・奈良時代に相当すると考えた遺物である。

219は土錘。220～225は土師器で、220は蓋、221は粗製の杯Ｃ、222は杯Ａ、223・224は杯Ｃ、225は高杯である。224は外面をヘラケズリのみで終える、いわゆるＣ手法である。224を除き、概ね都城編年の平城Ⅰに併行するものと考えられる。

226～229は須恵器。226・227は杯Ａで、226の内面には漆と見られる付着物がある。228は杯Ｂ蓋、229は杯Ｂである。

230～235は土師器甕類。235は長胴甕。234は把手付鍋の可能性があり、内面は頸部付近にまでヘラケズリが見られる。236は須恵器壺で、口縁部外面にカキメが３周巡る。

土坑ＳＫ164出土土器（237・238）　後述の流路ＳＤ151の下部にあたる場所である。土師器甕を２点示した。いずれも飛鳥・奈良時代に相当するものである。

流路ＳＤ151出土遺物

流路ＳＤ151から出土した遺物も、ＳＤ168と同様、古墳時代前期のものを「Ａ群」、古墳時代後期を中心としたものを「Ｂ群」、飛鳥・奈良時代を中心としたものを「Ｃ群」として報告する。ただし、ＳＤ168と異なり、Ａ・Ｂ群は少なく、Ｃ群が多いのが特長である。

Ａ群の遺物（239～242）　239～241はＳ字甕で、242は高杯。241のみＳ字甕Ａ類に相当し、やや古いが、他はいずれもＳ字甕Ｄ類およびその併行期のものである。

Ｂ群の遺物（243～251）　243～245は土師器。243は高杯Ｂ、244は小形鉢Ａ、245は台付小形鉢である。246～251は須恵器。246は杯身、247は無蓋高杯、248・249は高杯、250は甑、251は提瓶である。250の体部円孔は、使用時と思われる圧迫で欠けており、栓をしていたものと考えられる。

Ｃ群の遺物（252～387）　Ｃ群、すなわち飛鳥・奈良時代に相当する遺物は非常に多い。以下、各器形毎に見ていく。

土師器杯類（252～285）　252～264は杯Ｃ、265～274は杯Ｇ、275～283は杯Ａである。284・285は鉢状の大きなものであるが、杯Ｃに含めることも可能である。

杯Ｃは、内面に放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施すことを基本としている。大きさは、口縁部径が10～12cmの小形のもの（252～257）と、14～16cmの中形のもの（258～264）とに分けることができる。これに、284・285の鉢状のものを合めれば、杯Ｃの系統で３法量が構成されていたことになる。255の外面には、ヘラ状工具のあたり痕が見られ、内面暗文とよく似た間隔であるため、内面暗文の施文時に何らかの要因で付いた可能性があるが、現状ではそれ以上のことは分からない。杯Ｃの類は、概ね都城編年の平城Ⅰに併行する時期と考えられる。

杯Gは、266・269にように、杯Cから暗文とミガキ調整を取り去ったようなものも含む。また、267はここに含めたが、長岡京期の椀Aに相当する可能性もある。古墳時代小形鉢の系統と考えられるものは、271・272あたりであろう。

杯Aは、内面に斜放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施すことを基本としている。斜放射状暗文を2段に施すものは、2段とも右上がりとなるものが圧倒的に多いが、278のように、上段が左上がりとなって全体が矢羽根状をなすものも稀に見られる。282は斜放射状暗文が一段のもので、口縁部の形態や、素地が黄色系の胎土であることから、いずれかの地から搬入されたものである可能性がある。275は粗製の杯Aとした。282が都城編年の平城Ⅱ併行頃、その他は平城Ⅰに併行するものと考えられる。

土師器小形鉢（286）　286は小形の鉢と考えられる。あまり例を見ないものであるが、大形のものは斎宮跡第7次調査区から出土している[10]。時期的には、奈良時代後半から平安時代初頭頃までの間に収まるものであろう。

土師器杯蓋類（287～290）　杯Bの蓋である。外面には4単位ほどのヘラミガキが見られる。

土師器高杯（291～293）　暗文などが入らない、粗製のものが確認できる。291は杯部で、杯側の底部にヘラで刻みを入れ、脚部の接続を容易にしている。292・293は脚部である。

土師器皿類（294～302）　高台の付く皿B（294）、無高台の皿A（295～302）がある。295以外は、内面に放射状暗文と螺旋状暗文を施すものである。295は須恵器を模したと考えられるものである。302は薄手で深いものであり、都城編年の飛鳥Ⅳに、278は身部が浅く開き気味の口縁部であることから平城Ⅲに併行するものであろう。それ以外は、概ね平城Ⅰ～Ⅱに併行するものと考えられる。

土師器鉢（303）　高台の付く大形の鉢である。外面にはヘラミガキが見られる。

土師器甕・鍋類（304～339）　いずれも丸底の甕で、口縁部が「く」の字状に開くのが基本形である。304～317は小形の丸底甕、318～334は大形の長胴甕と考えられる。317は外面頸部から下に施すハケメと、それに新しく重複して下部に施すハケメとが、別の工具で施されている。313は口縁部が外反し、頸部が締まらない形態をなすものである。他のものとは系譜が異なるようで、当遺跡以東からの搬入品である可能性があるが、場所の特定まではできない。335～339は把手付鍋ないしは鉢にあたるものと考えられる。336は口縁部付近までヘラケズリが見られる少し珍しいもので、口縁部の形状には古墳時代後期のS字甕を含む系統の影響が残っている。

須恵器蓋杯類（340～369）　340～347は杯蓋、348～358は杯G、359～362は杯A、363～369は杯Bである。この中には、尾張地域の尾北産(341)、猿投産(363・364)、尾北ないしは猿投産(360・368)と考えられるものを含む。354・359の内面には漆が付着しており、漆工の容器として用いられたものと考えられる。

その他の須恵器（370～384）　370は、口縁部径が50cmを越える大形の鉢である。内面には墨と思われる黒色付着物がある。371は高杯で、猿投産かと考えられる。372は壺の底部。壺Gの可能性も考えられるか。373は壺で、底部内面には「东」のヘラ書き文字（焼成前）がある。374は「フラスコ」形と考えられる壺である。375は壺K で、長頸壺。376も壺Kであろう。377は丸底の壺。

378は鉦で、内面には漆が付着しており、これも漆工に用いられたものであろう。379・380は平瓶。381は鉢で、いわゆる仏鉢形のもの。382は把手が付く短頸のもので、薬壺か。383は壺である。

384は大形の鉢。外面の底部付近には焼成前の刻書（ヘラ書き文字）がある。口縁部を右に倒し、横位で書いたものと考えられ、「畏（かしこみ）」の字体に似ている。なお、同字の刻書と考えられるものが第3次調査区でも出土している[11]。

土師器甑（385・386）　大形の甑である。385・386は同一個体と考えられる。

平瓦（387）　凹面には布目痕、凸面には格子目叩き痕がある。

流路ＳＤ151・168北部出土土器（388～403）　調査区北部で、ＳＤ151・168の区分が不可能であった場所から出土した土器類である。388～397・399は古墳時代前期後半の土器類。高杯・二重口縁壺・S字甕があり、概ねＳＤ168Ａ群の時期に相当する。398・400～403は飛鳥・奈良時代の土器で、ＳＤ151Ｃ群の時期に

相当する。401の内面には焼成前のヘラ記号がある。

溝ＳＤ162出土遺物（404～420）　404は土馬で、頸～頭部のみが残る。この部位のみで独立して成形されており、その形状は高杯の脚柱部に似るため、おそらくはそれと同様に絞り成形し、別に作った胴部へ接合していたのであろう。成形方法としては珍しいものである。たてがみは本体からの捻り出しで成形する。頭頂部には小さな被り物が表現されている。その後ろには剥離痕があり、おそらくは耳の表現がなされていたものと考えられる。目と鼻の穴は、円管状の同一工具による刺突で表現されている。口はヘラ状工具の押圧による。顔側面から頸部にかけては、櫛状工具により手綱の表現がされている。手綱に沿って見られる円形の押圧文は、目・鼻と同一の円管状工具である。頸部下にも、同じ櫛状工具と円管状工具により、綱の表現がされている。素地には、土師器杯類と同じ精緻なものが使われている。

405・406は土師器杯Ｃ。405の内面には鉄分が付着している。406は外面にのみヘラミガキが見られる。407は土師器高杯。

408～417は須恵器408・409は杯蓋で、いずれも内面に返りが見られる。410は杯Ｂ、411は高杯、412～415は壺、416は捏鉢で、底部には焼成前の穿孔が見られる。417は大形の盤で、外面には円管状の把手が付く。418～420は土師器甕である。

これらは、417のみがやや新しく、都城編年の平城Ⅳ以降かと考えられるが、その他は飛鳥Ⅳ～平城Ⅰにかけてのものと考えられる。

井戸ＳＥ155出土土器（421～429）　421～422は土師器杯・皿類、424・425は須恵器杯である。42は平瓶、427は短頸壺で、いずれも口縁部を意図的に打ち欠いていると考えられる。428は土師器甕、429は土師器把手付鍋である。これらは、都城編年の平城Ⅱに併行するものであろう。

ＳＤ166出土土器（430～443）　古墳時代前期後半から後期までのものが見られる。439は内面をヘラケズリし、口縁部が「く」の字形に開くもので、近畿地方の庄内系甕の新しい部類に相当すると考えられ、その方面からの搬入品である可能性がある。

溝ＳＤ160出土土器（444）　土師器Ⅲ Ａである。都城編年の平城Ⅱに併行するものと考えられる。

溝ＳＤ161出土土器（445～449）　古墳時代前期後半から飛鳥・奈良時代までのものである。

溝ＳＤ178出土土器（450）　土師器短頸壺で、あまり例を見ない。飛鳥・奈良時代に相当する。

Ｃ区包含層ほか出土遺物（451～462）　遺構に伴わない出土遺物である。451～459は飛鳥・奈良時代の土器類および瓦。457の高杯は、美濃須衛産の可能性がある。460～461は12世紀後半から13世紀前半頃の陶器椀（山茶椀）で、461は渥美産、他は猿投～瀬戸産である。463は土師器羽釜で、15世紀後半頃の南伊勢系のものである。

（伊藤）

＜註＞

(1) 都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

(2) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）

(3) 藤澤良祐氏による山茶椀編年は、次の文献を主に参照した。藤澤「山茶椀研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994年）

(4) Ｓ字甕の分類については、赤塚次郎『廻間遺跡』（（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990年）、川崎志乃『古墳時代前期の雲出島貫遺跡』（『埋蔵文化財』Ⅲ　三重県埋蔵文化財センター　2001年）および『三重県埋蔵文化財センター』『垣田第３～５字調査』（2002年）を参照のこと。

(5) 三重県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財』Ⅱ（2000年）ｐ101、報告番号17～23。

(6) 伊藤裕偉「古墳時代の土器」（『河曲の遺跡』三重県埋蔵文化財センター　2004年）

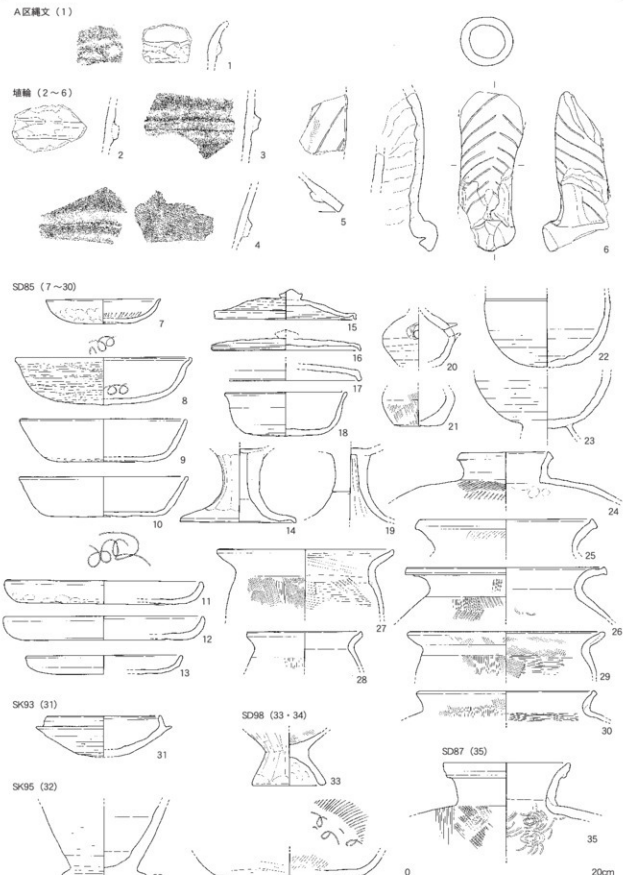
(7) 三重県埋蔵文化財センター『小屋城古墳群』（1994年）

(8) 小玉道明ほか『三重県一志郡白山町ガガフタ古墳群発掘調査報告』（『研究紀要』第５号　三重県埋蔵文化財センター　1996年）

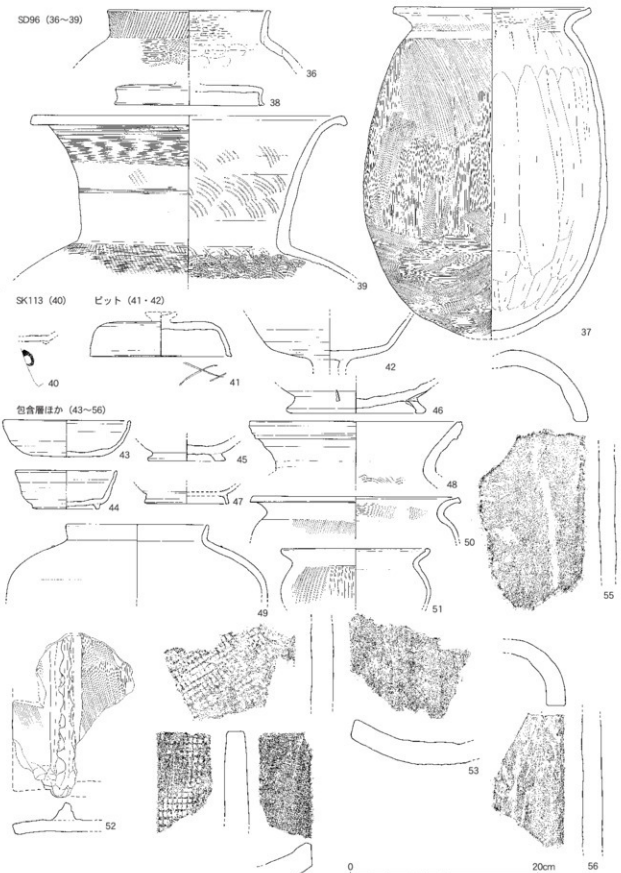
(9) 田中秀和「三重県出土の百済系土器の検討～いわゆる徳利形土器について～」（『Mie history』vol．５　1993年）

(10) 斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡平成14年度発掘調査概報』（2004年）、ｐ112報告番号35。

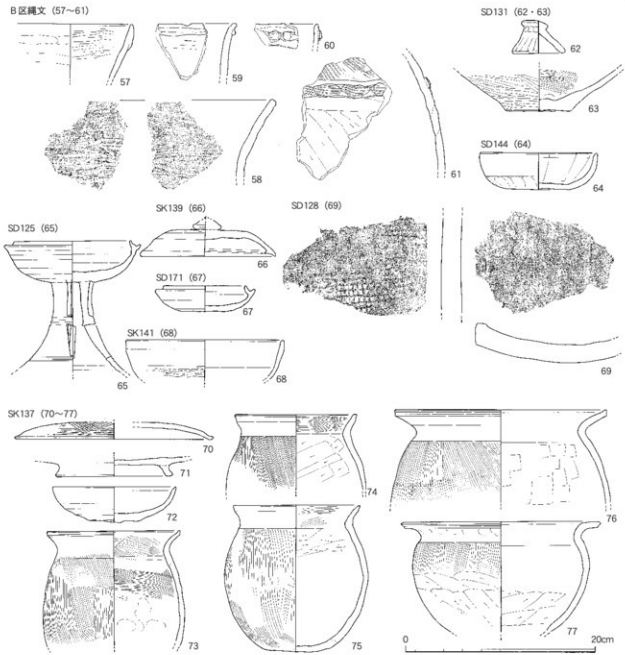
(11) 三重県埋蔵文化財センター『垣田第３～５次調査』（2002年）　本書の第40・41図も参照されたい。



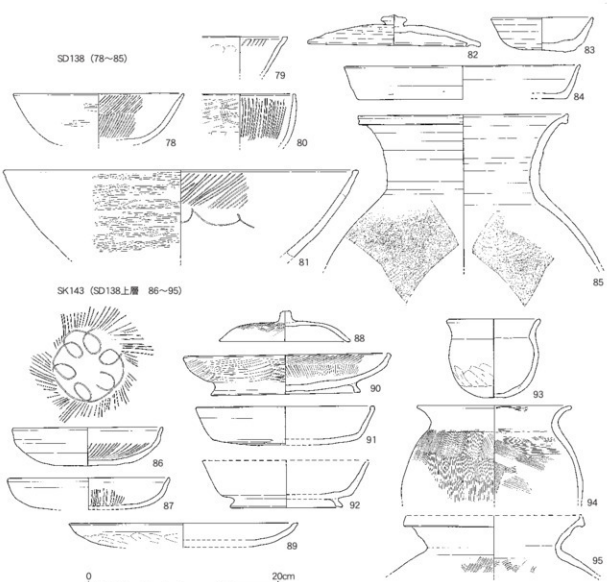
第12図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（１）（１：４）



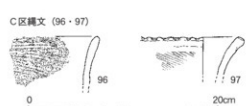
第13図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（２）（１：４）



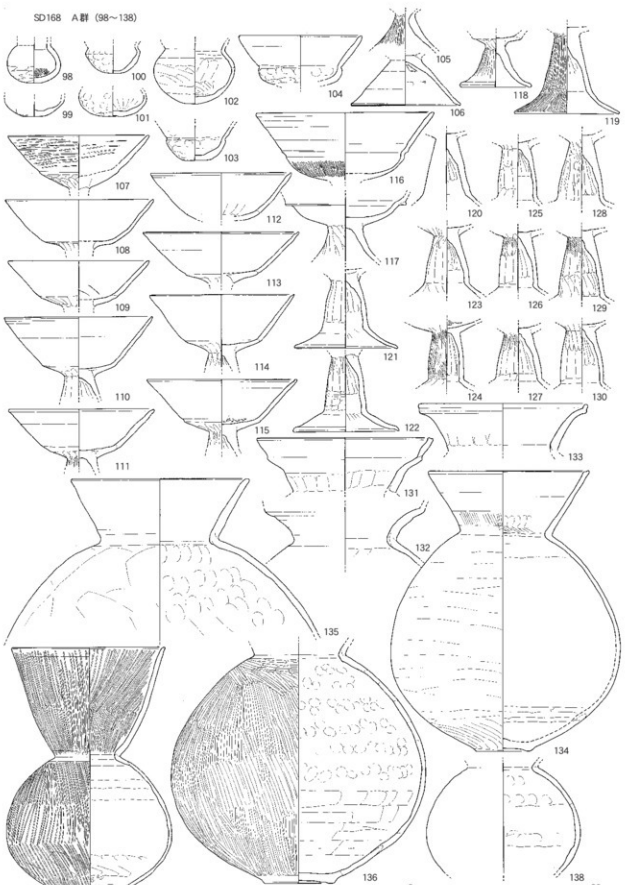
第14図　堀田遺跡(第６次)出土遺物実測図(３)(１:４)



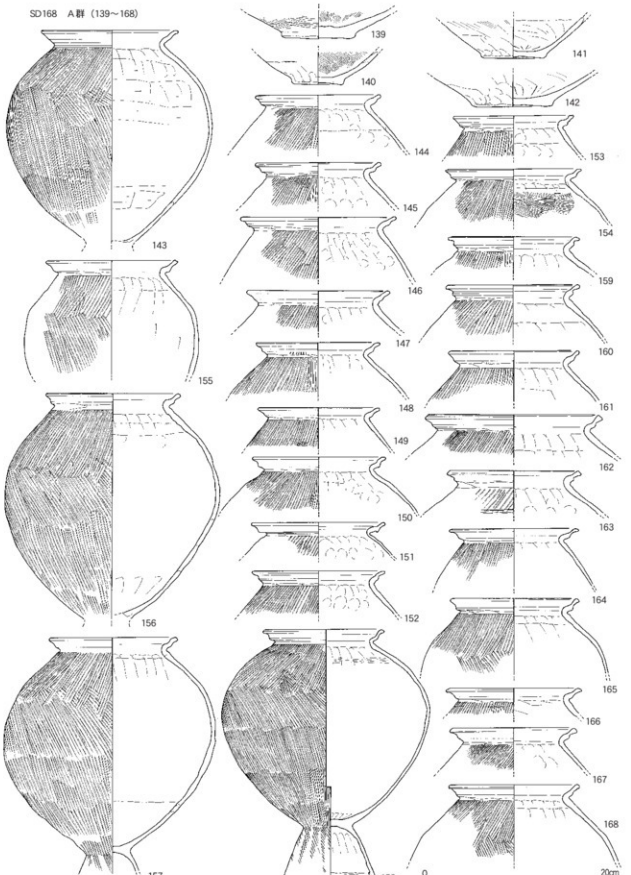
第15図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（４）（１：４）



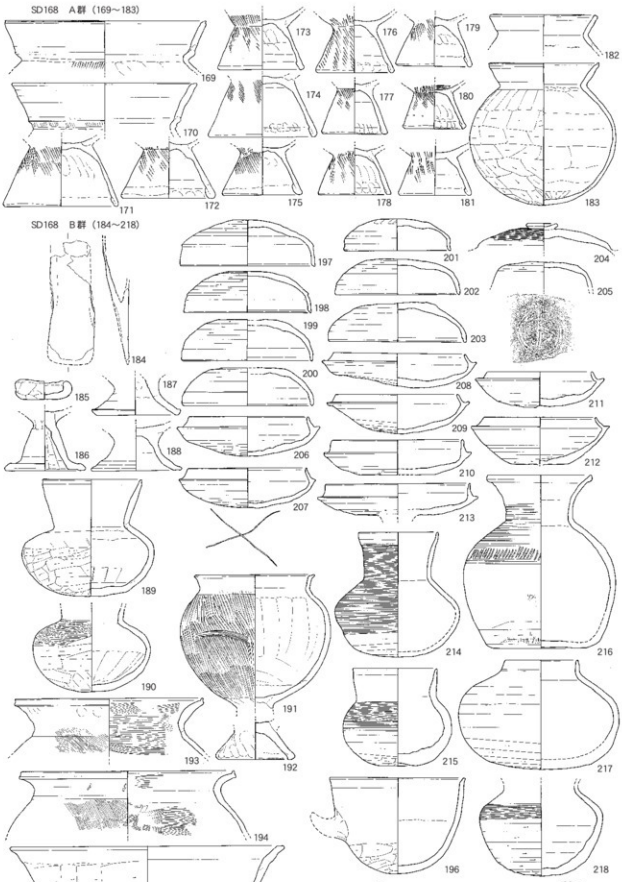
第16図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（５）（１：４）



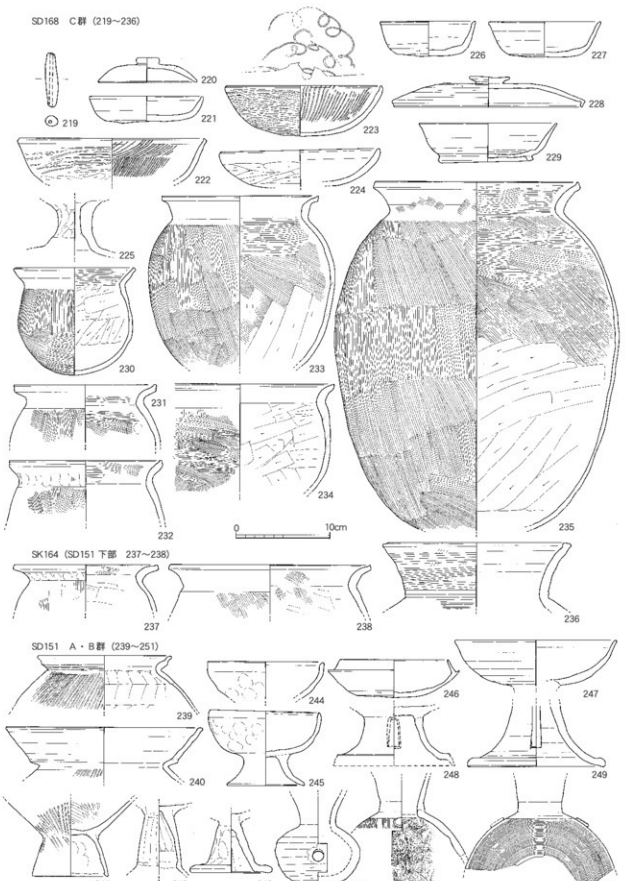
第17図　堀田遺跡(第６次)出土遺物実測図(６)（1：4）



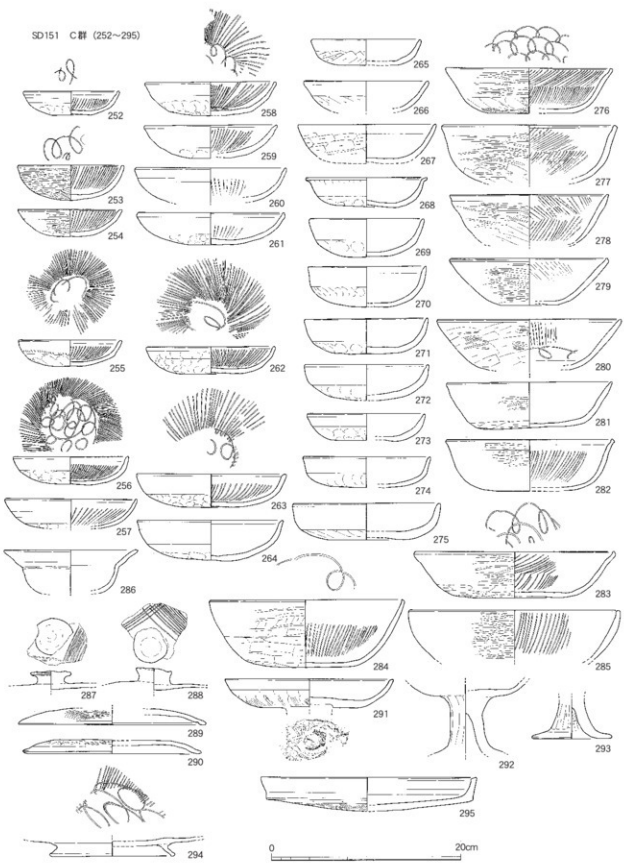
第18図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（７）（１：４）



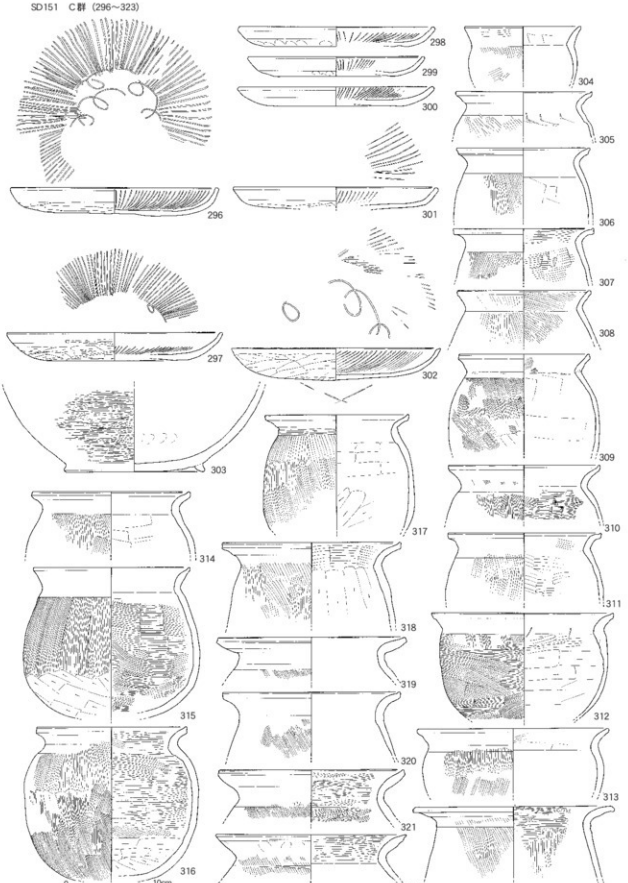
第19図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（８）（1：4）



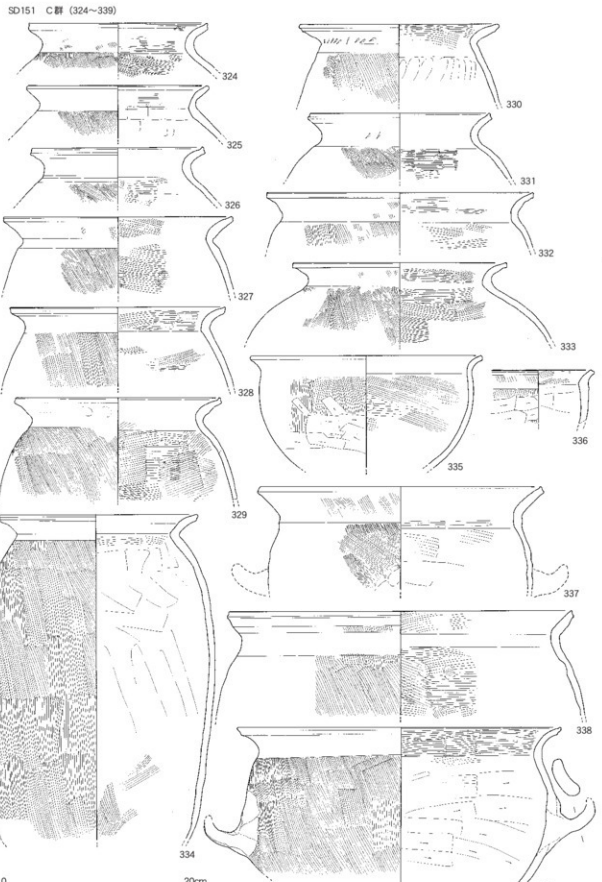
第20図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（９）（１：４）



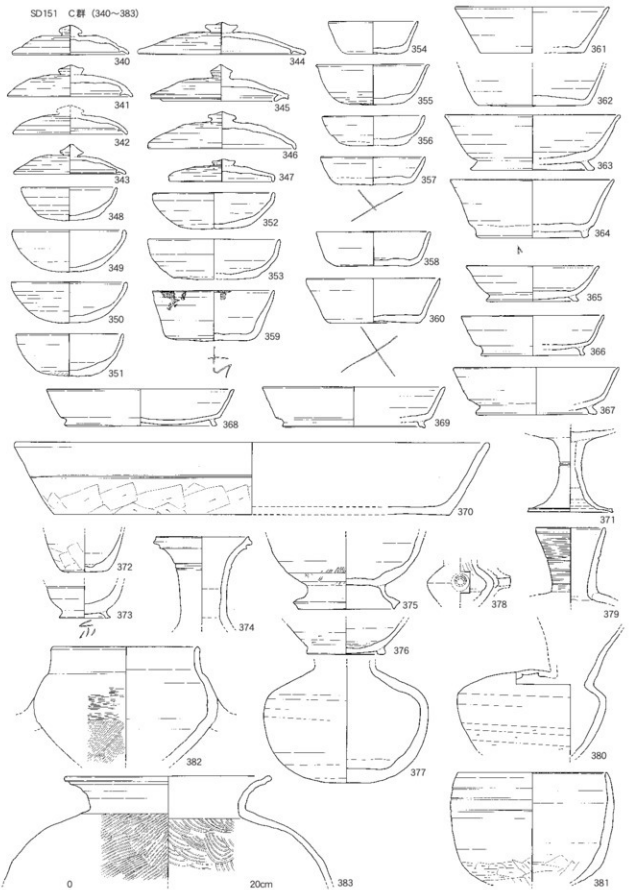
第21図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(10)（１：４）



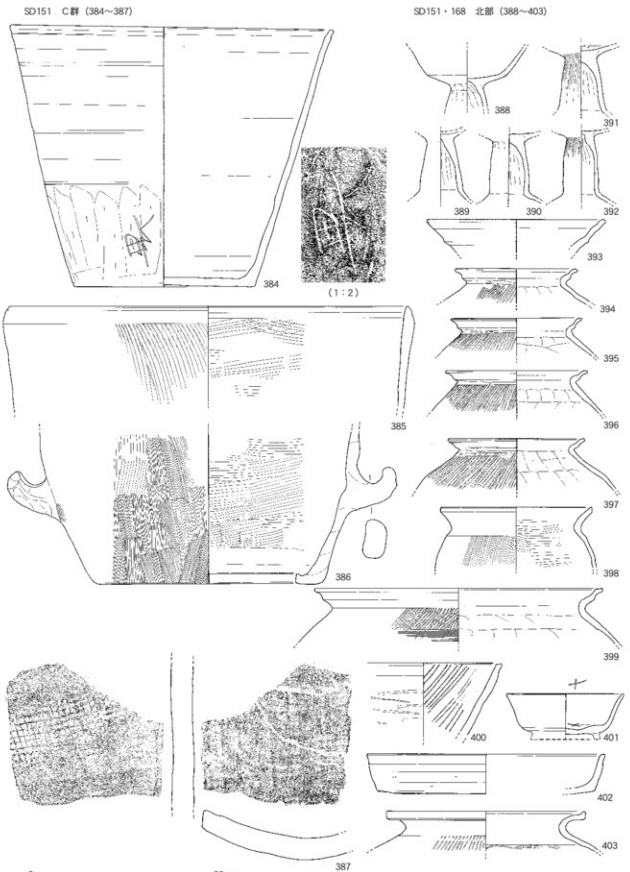
第22図　堀田遺跡(第６次)出土遺物実測図(11)（1：4）



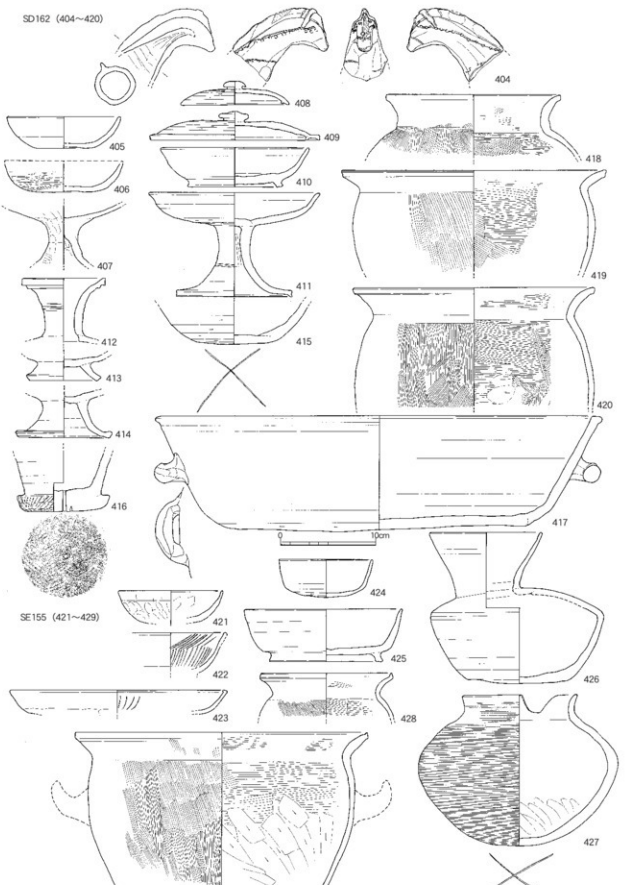
第23図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(12)（１：４）



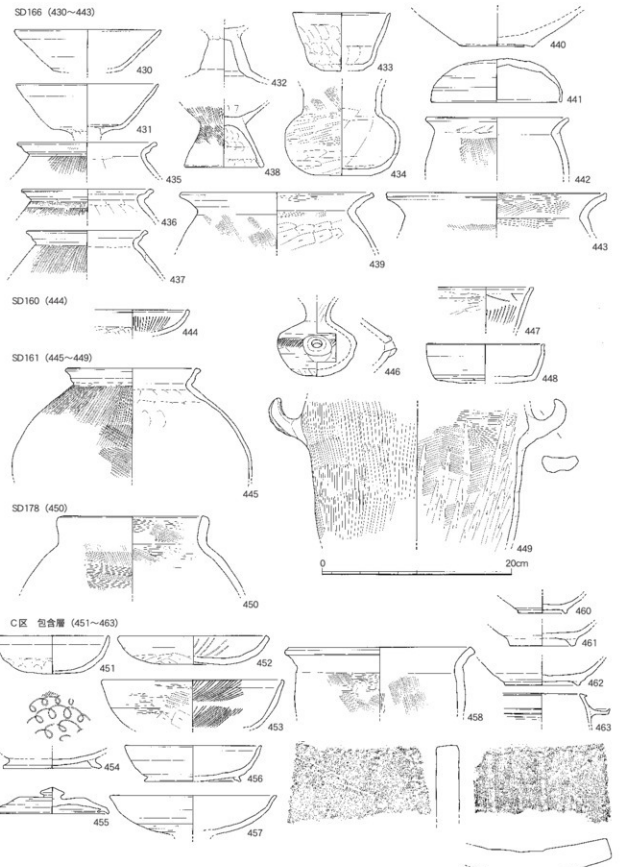
第24図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（13）（１：４）



第25図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図(14)（1：4）



第26図　堀田遺跡(第６次)出土遺物実測図(15)（１：４）



第27図　堀田遺跡（第６次）出土遺物実測図（16）（１：４）

2　木製品

木製品は大半がC地区の流路ＳＤ168からの出土であるが、その他、Ａ地区の溝ＳＤ85、溝ＳＤ96、Ｂ３グリッドpit１からも数点確認されている。各遺構の時期は、流路ＳＤ168が古墳時代前期・後期に、溝ＳＤ85と溝ＳＤ96が奈良時代に比定される。

これらの遺構から出土した木製品の傾向を見ると、溝ＳＤ85のものはほとんど杭類である。それと対照的に、流路ＳＤ168では出土した木製品の中にはもちろん杭類も含まれるが、それに加えて槽や紡績具といった日常用具もみとめられ、その種類は多様である。以下、遺構別に主な遺物に関して述べていく(1)。

a　流路ＳＤ168出土木製品

（１）容器類

槽と盤、曲物の蓋が出土している。

槽（464・465）　464は一木作りの小型槽である。底部外面中央を抉り込み、残存する三隅には脚を削り出す。平面形は長辺がわずかに外側へ膨らむ。

465は側面の立ち上がりが緩やかで、特に短辺の断面をみると曲線的である。

盤（466）　底部長辺に二孔一組の貫通する穿孔が４カ所みとめられる。孔の形状から他の部材と接合するための綴じ紐を通す孔と考えられる(2)。なお、木取りは不明瞭な部分が多い。

曲物蓋（467）　径が約40cmの半円形である。側面に段がなく、綴じ孔もみとめられない点から、蓋と判断した。表面の一部は炭化している。

（２）家具

案と考えられるものがある。

案（468）　長方形の板状具で、長辺のうち一辺に台形状の抉りが入る。特徴から案の脚板であるとみられる。『木器集成－近畿原始篇－』における分類によれば、天板に２本の溝を作り、脚板を差し込んで使用するＢ型式に相当するものであろう。

（３）生産用具

紡績関係用具と考えられるものである。

糸巻具（469・470）　469は凹部と貫通する小円孔が作られているが、詳細は欠損のため不明である。

470は幅広になる部分に５㎜大の貫通する穿孔がみとめられる。469ほど明確ではないが、穿孔部近くがわずかに凹状になる。

469・470とも十字形に組み合わせて使用する糸巻具の一種であると思われる。

（４）棒材・板材

用途は確定出来ないが、明らかに加工痕がみとめられるものをあげる。

有頭棒（471～473）　471・472は断面楕円形の棒状に成形した後、端部に両側面から抉りを入れて頭部を作る。また全面には削りが施される。

473は端部を出ホゾ状に作り出す。一部が炭化している。

３点とも形状からまず糸巻具としての用途が考えられるが、471・472に関しては、糸巻具とよく似た特徴を持つ田下駄の部材の可能性も考えられよう。

先尖棒（474～478）　５点とも幅３～４cmとほぼ規格は揃っているが、それぞれ異なる特徴を持つため用途も様々な可能性がある。

475には二孔一組の貫通する穿孔が２カ所みとめられる。『六大Ａ遺跡』で報告されている「縒かけ」の中に、幅２～４cm程の棒状具で穿孔が並ぶものが報告されている。しかし当遺跡の例のように、端部が尖頭状のものはみとめられない。

476は他よりも先端部がやや鈍角になる形であり、全面に削り痕が残る。所々に孔がみとめられる。

また、475は尖頭状の端部近くに、477は欠損部の近くに当たり痕が１ヶ所残る。

478は先端部のみに削りが入る。

棒材（479～483）　479は幅が約２cm程で、一端は円く、もう一端はやや尖るように加工してある。

480はわずかに残存する端部の一部には削りがみとめられ、杭の可能性も考えられる。

481は緩やかに彎曲する形である。

482は幅2.5cmの棒状に成形してあるが、両端欠損のため全容は不明である。

483は芯持材である。端部は炭化しているが、紐の擦り痕のような圧痕が残っているのが観察できる。

抉付棒（484・485）　484は両端が欠損しており、杭とも棒状加工品とも判断がつかない。現状では３カ所、垂木に見られるような抉りが入る。

485は幅3.7cm、厚2.6cmの棒材の一端を細く抉りだ

し、出ホゾ状にする。出ホゾ状の部分は断面が三角形を呈する。

抉付板（486）　8㎝幅の板材端部に弧状の抉りが入ることから、案の脚板である可能性も考えられる。なお、面の一部には切断途中のような工具痕が残る。

板材（487～490）　487は材本来の凹凸がそのまま残る。

488に関しては大きさ・形状から札としての用途も考えられよう。

489は腐食や欠損が激しく全容は不明だが、残存する面には加工痕が残る。

490は長辺端部に抉り状の窪みが見られるが、加工によるものかどうか確定できない。

管状木製品（491）　小型の刳り抜き材である。横断面を見ると弧を描く形であるため、元の形は半管状あるいは筒状であったと思われる。長辺に沿った方向の細かな削りが両面ともに施されている。

柄付板（492）　中央部側面に抉りを入れることにより、柄状部を作り出す。先端部には焼けたような痕が残る。両面とも平坦に作られている。

先尖板（493～495）　いずれも端部側面のみを削る（あるいは切り落とす）ことにより、先を尖らせる。板杭とするにはやや幅広であるため板材に含めた。特に493・495に関しては、幅広な形からは矢板を想起させる。

（５）杭類

棒状または細い板状のもので一端が尖らせてあるものを杭とした。ほとんどの場合が他方の端部が欠損し、全容が不明であるため、あるいは杭ではないものが含まれている可能性もある。

丸杭（496～498）　いずれも自然木を利用している。496・497は表面に樹皮が残る。

板杭（499・500）　499は先端は２方向以上の切り落としにより尖らせている。

500は断面がやや正方体に近い形である。

b　溝ＳＤ96出土木製品

下駄（501）　足を乗せる台と２枚の歯を一木で作り出した連歯式の下駄である。台の表面に指の痕跡が明瞭に残る。右足用であり、前の緒孔が前歯に切り込んでいる。

c　溝ＳＤ85出土木製品

板材（502）　後述する503～508といった杭が集中して出土した地点にて確認した。端部に明瞭な切断痕が残る。

板杭（503～508）　503～506に関しては割材削りだしである。

507・508は先端を尖らせる加工の他、板材側面にも削り痕が残る。

d　Ａ地区Ｂ３グリッドｐｉｔ１出土木製品

丸杭（509）　端部を４方向から切り落とし、尖らせている。

以上、遺構から出土した杭類を総括して、４次調査出土の杭類との比較を試みる[3]。今回の調査で確認された杭類は、４次調査報告における分類によれば、ａ類（自然木利用）およびｂ類（割材利用）のみであり、ｃ類（芯持ち削り出し）は見られなかった。先端部の加工に関しては、尖らせるための切り落としを２方向から施す方法と、３方向以上の多方向から施す方法と、どちらも併用している。

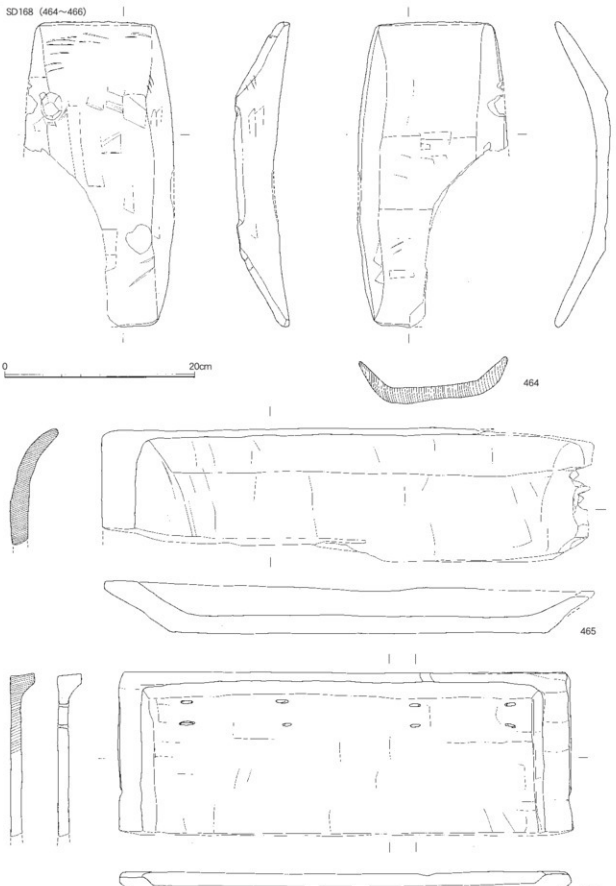
（瀬野）

＜註＞

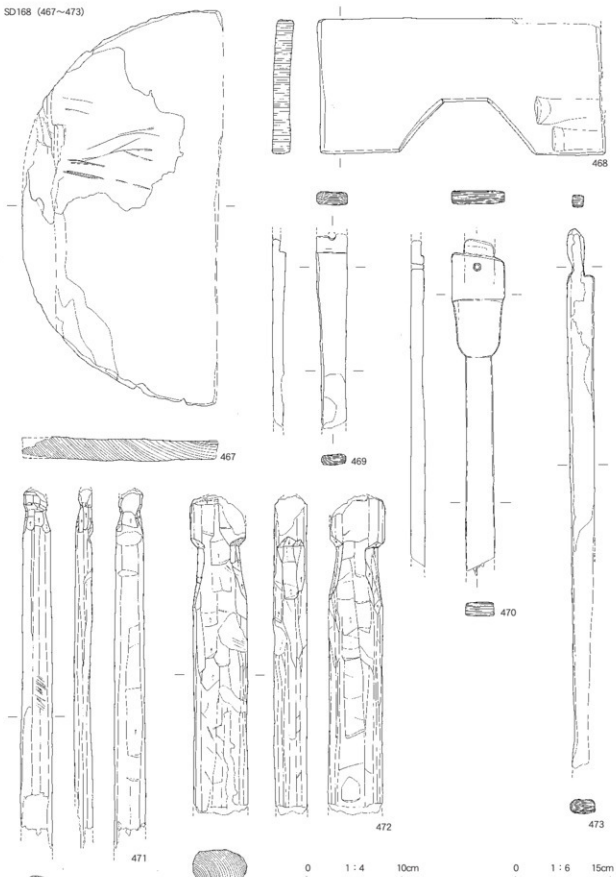
（1）木製品類の記述にあたっては、『木器集成図録 －近畿原始篇（解説）－』（奈良国立文化財研究所　1993年）、『木器集成図録－近畿古代篇－』（奈良国立文化財研究所　1984年）、および穂積裕昌『六大Ａ遺跡（木製品編）』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）を参照した。

（2）盤の穿孔の観察に関しては、穂積裕昌氏の御教示を得た。

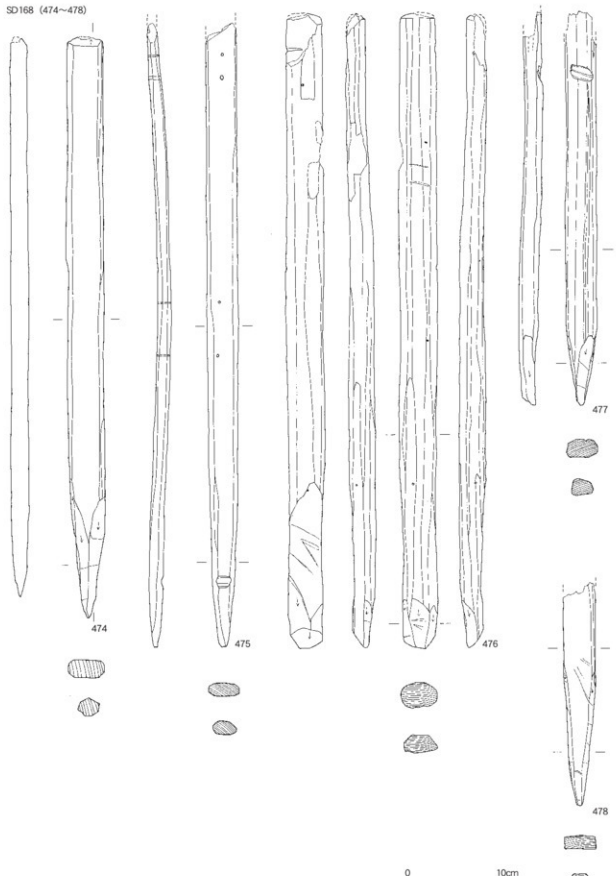
（3）三重県埋蔵文化財センター『堀田第３～５次調査』（2002年）



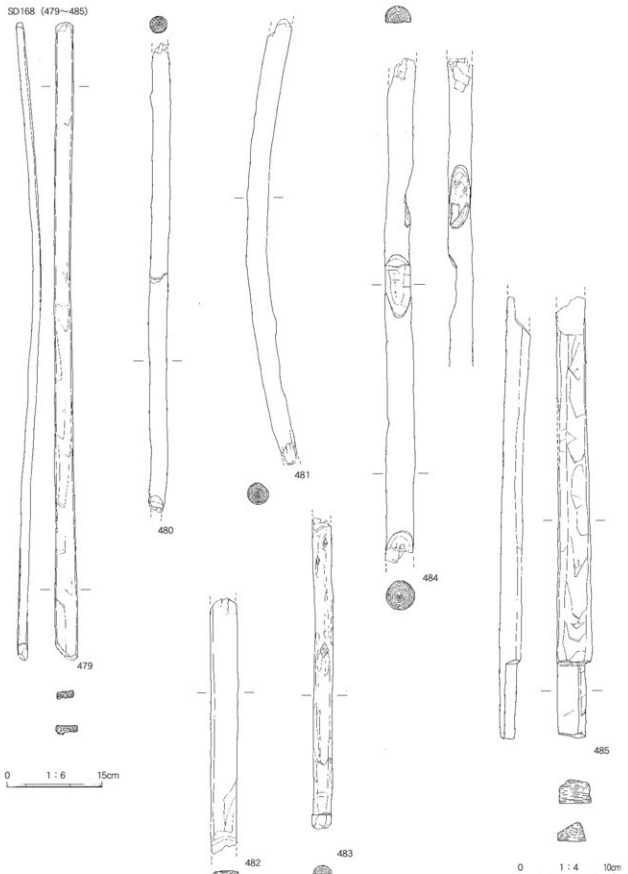
第28図　堀田遺跡(第６次)出土木製品実測図(１)（1：4）



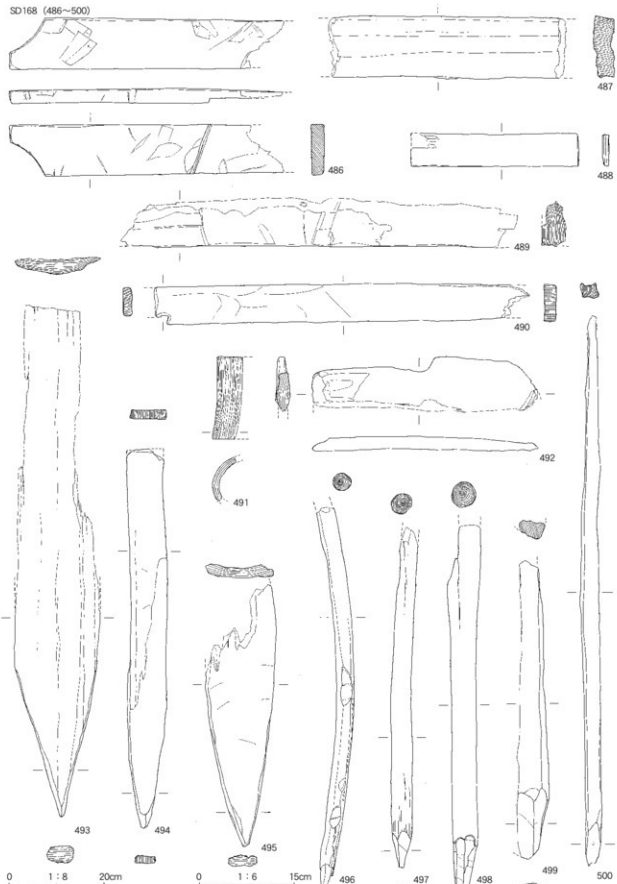
第29図　堀田遺跡（第６次）出土木製品実測図（２）（473は１：６，その他１：４）



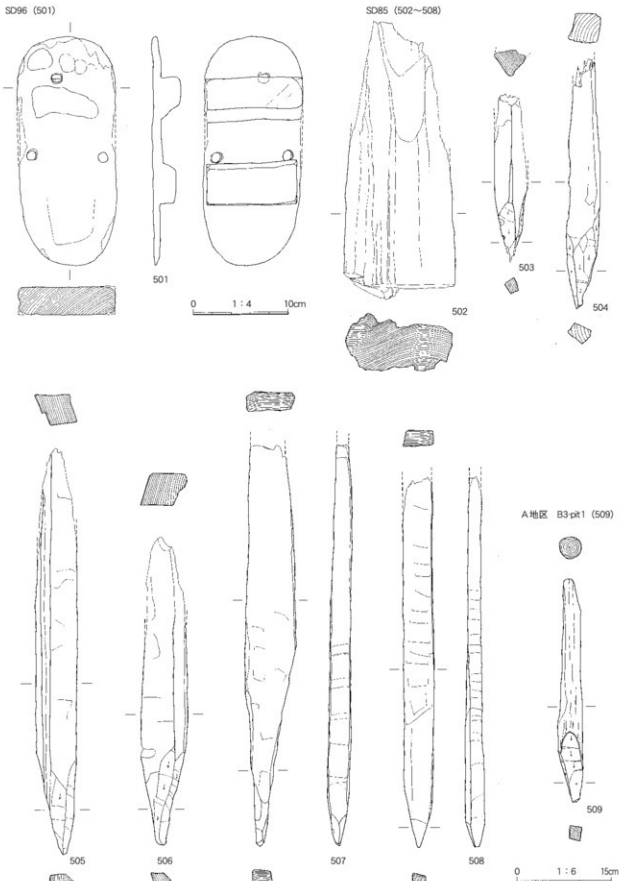
第30図　堀田遺跡(第６次)出土木製品実測図(３)（1：4）



第31図　堀田遺跡(第６次)出土木製品実測図(４)（482･483･485は１：４，その他１：６）



第32図　堀田遺跡(第６次)出土木製品実測図(５)（493･494･500は１:８,その他１:６）



第33図　堀田遺跡(第６次)出土木製品実測図(６)（501のみ１:４，その他１:６）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	2604	縄文土器	深鉢	A地区 C4	SD85	(口) —	外：突帯貼付け・押し引き施文 内：ナデ	粗	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐	口縁部片	縄文晩期 馬見塚式
2	3401	土師質	円筒埴輪	A地区	包含層		外：ヨコナデ・貼付 内：	粗	浅黄橙	突帯部片	
3	2603	土師質	円筒埴輪	A地区 B11	SD96		外：タテハケ→貼付ナデ→タテハケ 内：ハケメ→ナデ→ハケメ	やや密	にぶい黄橙	突帯部片	無黒斑
4	13304	土師質	朝顔形 埴輪	A地区 B10	SD96		外：ハリツケナデ・ハケメ 内：ハケメ	やや粗	灰白	突帯部片	朝顔か？
5	2602	土師質	蓋形埴輪	A地区 D7	SD117		外：ハケメ・線刻 内：剥離	やや密	浅黄橙	裾部片	蓋の裾か？
6	3402	土師質	人物埴輪	A地区 B6	包含層		外：オサエ・ナデ→線刻文様 内：オサエ・ナデ・粘土接合痕・指圧痕	粗	浅黄橙 にぶい黄橙	脚部片	盛装人物の足か？
7	3004	土師器	杯C	A地区 C4	SD85	(口) 12.1 (器高) 2.6	外：ヨコナデ→オサエ 内：ヨコナデ→放射状暗文	密	外：浅黄橙、灰白 内：浅黄橙	口縁2/12	
8	2803	土師器	杯A	A地区 D2	SD85	(口) 18.7 (器高) 5.0	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ→ナデ・螺旋状暗文	密	浅黄橙、橙	口縁4/12	
9	3102	土師器	杯A	A地区 D3	SD85	(口) 17.6 (器高) 4.5	外：剥離・ケズリ 内：剥離ひどく不明	密	外：橙 内：浅黄橙	口縁5/12	
10	2804	土師器	杯A	A地区 D3	SD85	(口) 17.9 (器高) 4.2	風化のため不明	密	浅黄橙	口縁4/12	
11	2802	土師器	皿A	A地区 D3	SD85	(口) 21.0 (器高) 2.4	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ→螺旋状暗文	やや密	にぶい橙 にぶい赤褐、灰	口縁8/12	
12	3202	土師器	皿A	A地区 D3	SD85	(口) 21.3 (器高) 2.5	外：オサエ→ヨコナデ・ミガキ？ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁2/12	
13	3201	土師器	皿A	A地区 D3	SD85	(口) 16.6 (器高)2.05	摩滅のため調整不明	密	橙	口縁3/12	
14	3604	土師器	高杯	A地区 D3	SD85	(脚裾)12.3	外：ケズリ(風化大で方向不明)→ナデ 内：ナデ？	やや粗	橙	口縁9/12	歪みあり
15	3601	須恵器	杯蓋	A地区 C3	SD85	(口) 15.0 (器高) 3.1	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁4/12	歪みあり
16	2902	須恵器	杯A蓋	A地区 A4	SD85	(口) 15.7	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	密	灰白	口縁3/12	内面研磨あり 転用硯か？
17	13505	須恵器	薬壺蓋	A地区 A4	SD85	(口) —	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰白	口縁部片	
18	3302	須恵器	杯A	A地区 B4	SD85	(口) 12.9 (器高) 4.6	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや粗	灰、灰白	口縁3/12	
19	2905	須恵器	高杯	A地区 B4	SD85	(脚柱) 3.2	外：回転ナデ 内：絞り目痕→回転ナデ	密	灰白、灰	脚径12/12	
20	2904	須恵器	𤭯	A地区 C5	SD85	(体) 7.6	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	密	灰白、灰	体部7/12	外面自然釉、内面・破片面に漆付着
21	3005	須恵器	小形壺	A地区 A2	SD85	(底) 5.2	外：タタキ→ケズリ 内：漆付着により不明	やや粗	外：灰白 内：黒褐	底部6/12	内面に漆付着
22	3206	須恵器	壺	A地区 A5	SD85	(体) 13.2	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰白、灰	体部4/12	内面に漆付着
23	3007	須恵器	脚付壺	A地区 C3	SD85	(脚柱) 5.6	外：回転ケズリ→ナデ 内：回転ナデ→工具あたり痕	やや密	外：灰 内：灰白	脚柱完存	
24	3602	須恵器	横瓶	A地区 A4	SD85	(口) 10.1	外：タタキメ→回転ナデ 内：あて具痕・ナデ・オサエ→回転ナデ	やや密	外：青灰 内：黄灰	口縁10/12	歪みあり
25	3301	須恵器	壺	A地区 D3	SD85	(口) 19.2 (頸) 15.0	外：ハケメ→回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰白、淡黄	口縁2/12 頸部2/12	
26	13501	須恵器	壺	A地区 A5	SD85	(口) 21.3	外：タタキメ→回転ナデ 内：同心円あて具痕→回転ナデ	やや粗	灰白	口縁1/12	
27	3101	土師器	甕	A地区 A2	SD85	(口) 18.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙、褐	口縁4/12	
28	3205	土師器	甕	A地区 E3	SD85	(口) 12.2 (頸) 10.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁2/12 頸部3/12	
29	3203	土師器	甕	A地区 C4	SD85	(口) 20.8 (頸) 17.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐、にぶい黄褐,褐灰	口縁2/12 頸部2/12	伊賀からの搬入か？
30	13301	土師器	甕	A地区 A4	SD85	(口) 19.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙、褐灰	口縁3/12	平安中期、外面に煤付着
31	3303	須恵器	杯身	A地区 A6	SK93	(口) 12.0 (高) 4.3	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰白、灰	口縁6/12 受部6/12	
32	3305	須恵器	すり鉢	A地区 C3	SK95	(底) 8.9	外：回転ナデ→ケズリ(部)・ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰白、灰	底部完存	
33	4005	土師器	台付甕	A地区 D9	SD98	(脚裾) 7.8	外：オサエ・ナデ→ケズリ→→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ハケメ・ヨコナデ	やや粗	にぶい橙 にぶい黄橙、灰	脚台5/12	古墳中期
34	4003	土師器	杯B	A地区 D11	SD98	(高台)14.6	外：ケズリ→貼付ヨコナデ 内：ナデ・放射状暗文・螺旋状暗文	やや密	にぶい橙	口縁1/12	
35	13502	須恵器	横瓶	A地区 C6	SD87	(口) 13.2	外：タタキメ→回転ナデ 内：同心円あて具痕→回転ナデ	やや粗	灰白、灰	口縁4/12	
36	2601	土師器	短頸壺	A地区 B10	SD96	(口) 17.4	外：ミガキ・暗文 内：オサエ・ナデ→ミガキ	やや密	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	口縁4/12	精製
37	9101	土師器	長胴甕	A地区 B11	SD96	(口) 20.8 (高) 35.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ・ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	にぶい黄橙	口縁10/12 体部完存	外面に煤付着
38	13503	須恵器	薬壺蓋	A地区 B11	SD96	(口) 15.9	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰白、灰	口縁1/12	
39	2701	須恵器	大形壺	A地区 B11	SD96	(口) 33.6	外：タタキメ→ヨコナデ・カキメ 内：同心円あて具痕→ヨコナデ	やや密	灰白、灰	口縁6/12	内面一部と外面に自然釉
40	3904	陶器	椀	A地区 B8	SK113	(底) —	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・一方向ナデ	やや密	灰白	底部片	山茶椀 瀬戸 底部に墨書「O」？

第３表　堀田遺跡(第６次)出土遺物観察表(１)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
41	3903	須恵器	短頸壺蓋	A地区 C 3	Ｐｉｔ２	(口) 15.1	外：回転ナデ→回転ケズリ→ナデ 内：回転ナデ・一方向ナデ	やや密	灰白、灰	口縁 7 /12	
42	3902	須恵器	高杯	A地区 B 4	Ｐｉｔ３	(体) －	外：回転ナデ→回転ケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	体部片	
43	2903	須恵器	杯A	A地区	表土(東)	(口) 13.6 (器高) 3.9	外：回転ナデ→回転ケズリ→ナデ 内：回転ナデ	密	灰白、灰	口縁 4 /12	
44	3306	須恵器	杯B	A地区 E 8	包含層	(口) 10.8 (高台) 6.6 (器高) 4.1	外：回転ナデ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	密	灰	口縁 1 /12 高台 4 /12	
45	5005	須恵器	壺K	A地区	包含層	(高台) 8.2	外：回転ナデ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや粗	灰	口縁 9 /12	
46	9001	須恵器	壺K	A地区	包含層	(高台)14.8	外：回転ケズリ→貼付ヨコナデ→高台に刺突痕 内：回転ナデ	やや粗	灰白、灰	口縁 4 /12	内面一部に自然釉、外面高台部に工具刺突痕、底部研磨黒色付着物あり、硯に使用
47	3006	緑釉陶器	碗	A地区	包含層	(高台) 8.9	外：施釉 内：施釉	密	浅黄	口縁 2 /12	軟胎
48	3603	須恵器	壺	A地区	包含層	(口) 22.8	外：回転ロナデ 内：同心円あて具痕→回転ナデ	粗	灰	口縁 7 /12	
49	3003	須恵器	短頸壺	A地区	表土	(口) 15.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	灰白、灰	口縁 4 /12	外面に自然釉　頸部に重ね焼き痕あり
50	3001	土師器	甕	A地区 A 3	包含層	(口) 22.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	褐灰	口縁 3 /12	
51	2901	土師器	甕A	A地区 A 3	包含層	(口) 15.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙、浅黄橙	口縁 2 /12	
52	2801	土師器	甑	A地区	表土		外：ナデ→ハケメ→貼付ナデ 内：ナデ	やや粗	浅黄橙	袖部片	
53	4102	瓦	平瓦	A地区 C 8	ＳＤ102	(残長) 9.5 (残幅)13.0 (厚) 2.3	凹面：布目痕 凸面：ケズリ→格子目叩き	やや粗	灰白	側部片	
54	3502	瓦	平瓦	A地区	包含層	(残長)11.5 (残幅) 5.5 (厚) 2.5	凹面：布目痕 凸面：格子目叩き	やや粗	灰白	端部片	
55	3801	瓦	丸瓦	A地区 A 3	包含層	(径) 7.5 (残長)18.5	凹面：布目痕 凸面：ナデか？剥離はげしい	粗	にぶい黄橙	側部片	土師質
56	3701	瓦	丸瓦	A地区 D 6	包含層	(残長)14.0	凹面：布目痕・吊紐痕 凸面：ナデ	やや粗	灰		
57	4505	縄文土器	深鉢	B地区 C 3	ＳＤ134	(口) －	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ミガキ	粗	にぶい黄橙、にぶい橙	口縁部片	縄文晩期か？
58	4001	縄文土器	深鉢	B地区 D 3	包含層	(口) －	外：条痕 内：ハケ状工具による条痕	やや粗	灰黄褐、にぶい黄橙	口縁部片	縄文晩期、条痕文
59	4002	縄文土器	深鉢	B地区 B14	包含層	(口) －	外：突帯(無文)・ナデ 内：ナデ	やや粗	にぶい橙	口縁部片	縄文晩期
60	4905	縄文土器	深鉢	B地区 B 4	ＳＤ127	(口) －	外：ナデ→突帯上に押し引き刺突 内：ナデ	やや粗	浅黄橙、灰、暗灰	口縁部片	五貫森式
61	4904	縄文土器	深鉢	B地区 B 4	ＳＤ127	(体) －	外：二枚貝条痕→突帯上に二枚貝押し引き刺突・下半にケズリ 内：ナデ	やや粗	にぶい橙、灰褐、暗灰	体部片	縄文晩期、馬見塚式、外面に煤付着
62	4906	土師器	ミニチュア土器(蓋?)	B地区 D 4	ＳＤ131	(台) 5.6	外：オサエ→ナデ 内：オサエ→ナデ	やや密	浅黄橙	台部 3 /12	
63	4805	土師器	壺	B地区 D 4	ＳＤ131	(底) 6.9	外：ナデ→ミガキ 内：ハケメ→ナデ	やや密	外：灰褐、灰白 内：灰白	底部 9 /12	古墳前期か？
64	4804	土師器	杯G	B地区 A21	ＳＤ144	(口) 12.5 (器高) 3.9	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：工具ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙、浅黄橙	口縁 7 /12	外面に煤付着
65	3901	須恵器	高杯	B地区 A 5	ＳＤ125	(口) 12.3 (受部)14.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰白、灰	口縁 2 /12	口縁部歪み大、脚部透かし窓、意図的な打ち欠きの可能性有り。
66	4502	須恵器	杯蓋	B地区 C10	ＳＫ139	(口) 14.3 (器高) 3.8	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	外：灰白 内：灰黄	口縁 3 /12	生焼け
67	7902	須恵器	杯身	C地区 B11	ＳＤ171	(口) 8.5 (受部)10.5 (器高) 2.7	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ→オサエ	やや密	灰	完存	内面に漆付着
68	5001	土師器	杯C	B地区 B15	ＳＫ141	(口) 16.6	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ	やや密	橙	口縁 2 /12	黒斑不明、白色胎土
69	4101	瓦	平瓦	B地区 B10	ＳＤ128	(厚) 1.9	凹面：糸切り痕・布目痕 凸面：ケズリ・格子目叩き	やや密	にぶい黄橙		
70	4903	土師器	蓋	B地区 B10	ＳＫ137	(口) 21.0	外：ミガキ 内：ヨコナデ	やや密	橙	口縁 1 /12	
71	4907	土師器	皿B	B地区 B10	ＳＫ137	(高台)12.2	外：ナデ→貼付けヨコナデ 内：剥離	密	橙	高台 2 /12	
72	4501	須恵器	杯G	B地区 B11	ＳＫ137	(口) 13.0 (器高) 3.6	外：回転ナデ→ヘラ切り 内：回転ナデ	密	灰	口縁 3 /12	
73	4802	土師器	甕	B地区 B10	ＳＫ137	(口) 14.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙、にぶい褐	口縁 1 /12	外面に煤付着
74	4803	土師器	甕	B地区 B10	ＳＫ137	(口) 12.9	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	外：橙、黒褐 内：にぶい橙、灰褐	口縁 2 /12	内面に炭化物、外面に煤付着、伊賀方面からの搬入か
75	4701	土師器	壺	B地区 B10	ＳＫ137	(口) 13.4 (器高)15.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	外:にぶい橙、褐灰 内:灰黄褐、褐灰	口縁 4 /12	内面に炭化物、外面に煤付着
76	4801	土師器	甕	B地区 B10	ＳＫ137	(口) 22.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	粗	橙、にぶい橙	口縁 2 /12	外面に煤付着
77	4901	土師器	甕	B地区 B10	ＳＫ137	(口) 21.0	外：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	にぶい橙、にぶい褐	口縁 4 /12	外面に煤付着
78	4504	土師器	杯A	B地区 A19	ＳＤ138	(口) 18.0	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ→二段放射状暗文	やや密	橙	口縁 3 /12	黒斑不明、白色胎土、剥離はげしい、平城Ⅰか？
79	13806	土師器	杯A	B地区 A19	ＳＤ138	(口) －	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや密	にぶい橙	口縁部片	
80	13803	土師器	鉢	B地区 A19	ＳＤ138	(口) －	外：ハケメ→ヨコナデ→ミガキ・ケズリ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや粗	黒	口縁 1 /12	

第４表　堀田遺跡（第６次）出土遺物観察表（２）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
81	4702	土師器	杯	B地区B21 C地区C18	SD138 SD168	(口) 37.4	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	やや密	灰	口縁1/12	
82	4503	須恵器	杯蓋	B地区 A19	SD138	(口) 18.3 (高) 3.5	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	外：黄灰 内：にぶい橙	口縁4/12	生焼け
83	4908	須恵器	杯G	B地区 B20	SD138	(口) 10.6	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰白、灰	口縁5/12	
84	4601	須恵器	皿A	B地区 B21	SD138	(口) 24.9 (底) 22.0	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰白	口縁1/12	皿A
85	4602	須恵器	壺	B地区 A20	SD138	(口) 22.1	外：平行タタキメ→ヨコナデ 内：同心円あて具痕→ヨコナデ	やや密	外：灰白、灰 内：灰白	口縁1/12	
86	4402	土師器	杯C	B地区 A19	SK143	(口) 15.9 (器) 4.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	外:橙、淡橙、明赤褐 内:浅黄橙、黄橙	口縁6/12	白色胎土、黒斑あり
87	4203	土師器	杯C	B地区 A19	SK143	(口) 17.2	外：ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや密	にぶい橙、橙、黒褐	口縁1/12	
88	4303	土師器	蓋	B地区 A19	SK143	(口) 13.8	外：ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	外：灰褐 内：にぶい褐、灰褐	口縁3/12	歪み大きい
89	4204	土師器	高杯？	B地区 A19	SK143	(口) 24.1	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁2/12	
90	4401	土師器	皿BⅡ	B地区 A19	SK143	(口) 21.4 (底) 15.6 (高) 4.1	外：ヨコナデ→→貼付ヨコナデ→ミガキ 内：二段放射状暗文	密	橙	口縁6/12 底部完存	黒斑あり、白色胎土、精緻、平城Ⅱか？ 八分割ミガキ:裏から見て反時計回り
91	4201	須恵器	杯A	B地区 A19	SK143	(口) 18.8	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	密	灰白、灰	口縁3/12	
92	4202	須恵器	杯B	B地区 A19	SK143	(口) 11.8	外：回転ナデ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	密	外：浅黄橙 内：にぶい橙	口縁3/12	生焼け
93	4205	土師器	甕(小形)	B地区 A19	SK143	(口) 9.6	外：ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙 内：灰褐、黒褐	口縁6/12	ミニチュア？ 少し歪み有り
94	4301	土師器	甕	B地区 A19	SK143	(口) 16.7	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：浅黄橙、黒褐 内：にぶい黄橙、灰黄褐	口縁9/12	
95	4302	須恵器	壺	B地区 A19	SK143	(口) 19.0 (頸) 14.0	外：平行タタキメ→ヨコナデ 内：同心円あて具痕→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/12 頸部3/12	外面に自然釉
96	14303	縄文土器	深鉢	C地区 C11	SD168	(口) —	外：二枚貝条痕 内：ナデ	粗	外：褐灰 内：灰褐	口縁部片	
97	13406	縄文土器	深鉢	C地区 D16	SD166	(口) —	外：二枚貝条痕？→ヨコナデ→二枚貝刺突 内：ナデ	粗	黒褐、にぶい橙	口縁部片	縄文晩期～弥生前期、外面に煤付着
98	11706	土師器	ミニチュア土器(小形丸底壺)	C地区 A4	SD168	(体) 5.7	外：ナデ→ケズリ 内：ナデ・ハケメ	やや密	にぶい黄橙・褐	体部完存	
99	11606	土師器	ミニチュア土器(小形壺)	C地区 B10	SD168	(底) 2.4	外：ナデ 内：ナデ	やや粗	外：褐灰、灰黄褐 内：灰褐、黒褐	底部完存	
100	11605	土師器	ミニチュア土器(小形丸底壺)	C地区 B10	SD168	(体) 5.7	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	やや密	外：黄灰、暗灰黄、黒内：暗灰黄、黄灰	体部完存	
101	11704	土師器	小形 丸底壺	C地区 D16	SD168	(口) 7.2	外：ナデ・オサエ→ケズリ 内：ナデ	やや粗	外：暗灰黄、黄灰 内：灰黄褐、褐灰	体部下半 8/12	内外面に煤付着
102	8805	土師器	小形 丸底壺	C地区 B9	SD168	(頸) 6.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ	やや密	外：灰白 内：暗灰黄	体部完存	
103	11705	土師器	小形 丸底壺	C地区 B10	SD168	(底) 3.0	外：ナデ・オサエ→ヘラ沈線 内：ナデ	やや粗	灰黄褐	底部12/12	頸部の沈線はS字甕と共通
104	11607	土師器	小形 丸底壺	C地区 D16	SD168	(口) 13.2	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ・ケズリ→頸部に沈線 内：ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐、褐灰	口縁2/12	外面に煤付着,頸部の沈線はS字甕と共通
105	12906	土師器	小形器台	C地区 A5	SD168	(脚柱) 2.1	外：ミガキ 内：ナデ→ケズリ	密	灰黄褐、にぶい黄橙、にぶい黄褐	脚柱完存	モミガラ圧痕あり
106	13105	土師器	小形器台	C地区 B10	SD168	(脚柱) 3.2 (脚裾) 11.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：絞り目痕→板ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐、暗灰黄、黄灰	脚裾7/12	
107	13201	土師器	高杯A	C地区 D16	SD168	(口) 15.0	外：ケズリ→ミガキ 内：ミガキ	やや粗	灰黄褐、暗灰黄	口縁2/12	
108	13203	土師器	高杯A	C地区 A4	SD168	(口) 15.8 (脚柱) 3.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、灰黄褐、にぶい橙	口縁1/12	
109	12902	土師器	高杯A	C地区 C11	SD168	(口) 15.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	外：灰黄褐、黄灰 内：褐灰	口縁1/12	
110	13103	土師器	高杯A	C地区 C15	SD168	(口) 15.8 (脚柱) 3.1	外：ナデ→面取り風板ナデ(脚部)→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	灰黄褐、にぶい黄橙	口縁4/12 脚柱上部完存	
111	13104	土師器	高杯A	C地区 C10	SD168	(口) 15.5 (脚柱) 3.2	外：ナデ・オサエ→板ナデ(脚柱)・ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	黒褐、黄灰	口縁2/12	内面タール状に油煙付着、外面に煤付着
112	13205	土師器	高杯A	C地区 D15	SD168	(口) 15.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐、にぶい黄橙	口縁4/12	
113	13204	土師器	高杯A	C地区 D15	SD168	(口) 16.6 (脚柱) 2.7	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁1/12	
114	13102	土師器	高杯A	C地区 C15	SD168	(口) 15.3 (脚柱) 2.9	外：ナデ→ヨコナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙、にぶい橙	口縁4/12	
115	13101	土師器	高杯A	C地区 C14	SD168	(口) 16.0 (脚柱) 3.0	外：ナデ→板ナデ(脚柱)・ヨコナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙、にぶい黄橙	口縁7/12	
116	12001	土師器	高杯B	C地区 B7	SD168	(口) 19.0	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙、にぶい黄橙	口縁5/12	
117	12905	土師器	高杯B	C地区 D14	SD168	(脚柱) 3.8	外：ナデ→板ナデ(脚柱)・ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐、にぶい黄橙	脚柱完存	脚注S字の手法に共通
118	12904	土師器	高杯A	C地区 C10	SD168	(脚柱) 2.1 (脚裾) 7.6	外：ナデ→板ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内：ナデ→板ナデ	やや密	黒褐、暗灰黄	脚柱完存 脚裾4/12	
119	13004	土師器	高杯A	C地区 B10	SD168	(脚柱) 2.7 (脚裾) 11.2	外：ミガキ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい赤褐、にぶい黄橙、にぶい黄褐	脚柱完存 脚裾1/12	外面に油ダレ状の煤付着
120	12909	土師器	高杯A	C地区 D12	SD168	(脚柱) 2.3	外：剥離のため不明 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙	脚柱完存	

第5表　堀田遺跡(第6次)出土遺物観察表(3)

番号	実測番号	種・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
121	12908	土師器	高杯A	C地区 A5	SD168	(脚柱) 3.0 (脚裾)11.0	外：板ナデ→ヨコナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐、にぶい黄褐	脚柱完存 脚裾4/12	
122	12907	土師器	高杯A	C地区 B5	SD168	(脚柱) 2.8 (脚裾)11.3	外：板ナデ→ヨコナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、灰黄褐	脚柱完存 脚裾9/12	
123	13003	土師器	高杯A	C地区 A5	SD168	(脚柱) 2.7	外：板ナデ→ヨコナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚柱完存	
124	13002	土師器	高杯A	C地区 b5	SD168	(脚柱) 2.9	外：板ナデ→ヨコナデ 内：絞り目→ナデ・ハケメ(杯部)	やや粗	褐灰、にぶい黄橙	脚柱完存	内外面に煤付着
125	13010	土師器	高杯A	C地区 C11	SD168	(脚柱) 3.0	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚柱完存	
126	13008	土師器	高杯A	C地区 C12	SD168	(脚柱) 3.0	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐	脚柱完存	内面に炭化物付着
127	13009	土師器	高杯A	C地区 D15	SD168	(脚柱) 3.1	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐	脚柱完存	
128	13007	土師器	高杯	C地区 C11	SD168	(脚柱) 2.6	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	黄灰	脚柱完存	脚部外面に煤付着
129	13006	土師器	高杯A	C地区 C11	SD168	(脚柱) 2.8	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、にぶい黄褐	脚柱完存	杯部内面脚部外面に煤付着
130	13005	土師器	高杯A	C地区 C11	SD168	(脚柱) 3.1	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐	脚柱完存	外面に油ダレ状の煤付着(灯明具として使用?)
131	12002	土師器	壺	C地区 C11	SD168	(口) 18.8	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	灰黄褐	口縁1/12	二重口縁
132	12203	土師器	壺	C地区 B10	SD168	(頸) 10.9	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐	頸部3/12	二重口縁、外面に煤付着
133	7502	土師器	壺	C地区 B8	SD168	(口) 18.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐	口縁3/12	
134	5801	土師器	壺	C地区 C3	SD168	(口) 17.2 (体) 24.3 (底) 5.6	外：ナデ→ハケメ・板ナデ→ヨコナデ 内：ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、灰白	完存	口縁部外面・体部中央外面に煤付着
135	14201	土師器	壺	C地区 B7	SD168	(口) 19.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐、灰	口縁4/12	内面に油煙状の炭化物付着、煮沸使用？
136	5101	土師器	壺	C地区 B3	SD168	(頸) 9.7 (体) 27.0 (底) 7.3	外：ナデ・ハケメ→ヨコナデ→ミガキ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	外：にぶい黄橙 内：浅黄、灰黄	頸部11/12	内面底部に炭化物、外面一部に煤付着、黒斑あり
137	11001	土師器	長頸壺	C地区 B3	SD168	(口) 16.3 (高) 26.7	外：ナデ→ケズリ・ヨコナデ→ミガキ 内：ハケメ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ(暗文風)	やや密	灰黄褐、灰白	口縁8/12	
138	11402	土師器	壺	C地区 C15	SD168	(体) 16.4	外：調整不明 内：オサエ・ナデ	やや粗	灰黄、黄灰	体部2/12	外面に煤付着
139	11904	土師器	壺	C地区 A6	SD168	(底) 7.8	外：ナデ→ミガキ 内：ハケメ→乱ナデ	粗	外：灰黄褐 内：暗灰黄	底部完存	底部に木葉圧痕
140	11905	土師器	壺	C地区 B6	SD168	(底) 5.0	外：オサエ・ナデ 内：ハケメ	やや密	外：にぶい黄橙、にぶい橙 内：にぶい黄	底部完存	
141	11902	土師器	壺	C地区 B9	SD168	(底) 7.0	外：ナデ・オサエ→ナデ 内：ナデ	やや粗	外：暗灰黄 内：にぶい褐、にぶい黄褐	底部完存	外面に煤付着
142	11903	土師器	壺	C地区 D17	SD168	(底) 8.6	外：オサエ・ナデ 内：ナデ→板ナデ	粗	灰黄褐	底部完存	底部砂粒多い、外面に煤付着
143	5201	土師器	台付甕	C地区 D14	SD168	(口) 15.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ケズリ(上半)→ヨコナデ	やや粗	灰白、浅黄橙	口縁5/12	外面に煤付着　外面のハケメは上部ほど新
144	12801	土師器	台付甕	C地区 C11	SD168	(口) 13.4	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：暗灰、灰黄褐 内：灰黄褐	口縁2/12	外面に煤付着
145	12705	土師器	台付甕	C地区 D16	SD168	(口) 13.4	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：褐灰 内：灰白、褐灰	口縁3/12	外面に煤付着
146	12702	土師器	台付甕	C地区 C15	SD168	(口) 16.6	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄、灰黄褐、褐灰	口縁3/12	外面に煤付着
147	12704	土師器	台付甕	C地区 C10	SD168	(口) 15.3	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐	口縁3/12	外面に煤付着
148	12304	土師器	台付甕	C地区 C15	SD168	(口) 13.2	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	口縁3/12	外面に煤付着
149	12305	土師器	台付甕	C地区 D15	SD168	(口) 13.0	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：灰黄褐 内：灰白	口縁4/12	外面に煤付着
150	12403	土師器	台付甕	C地区 D16	SD168	(口) 14.2	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	黄灰	口縁6/12	外面に煤付着
151	12703	土師器	台付甕	C地区 D16	SD168	(口) 14.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：灰黄、灰黄褐 内：灰白、褐灰	口縁3/12	
152	12804	土師器	台付甕	C地区 D15	SD168	(口) 14.2	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい黄橙、灰黄褐、褐灰、橙 内：にぶい褐、にぶい橙、褐灰	口縁2/12	外面に煤付着
153	13601	土師器	台付甕	C地区 C4	SD168	(口) 12.8 (頸) 10.8	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：黄灰 内：黒褐	口縁3/12	外面に煤付着
154	12803	土師器	台付甕	C地区 D16	SD168	(口) 14.4	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：暗灰、灰黄褐 内：灰黄褐、黒	口縁2/12	外面に煤付着
155	12401	土師器	台付甕	C地区 D17	SD168	(口) 14.0	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：灰褐 内：灰黄褐	口縁3/12	外面に煤付着
156	5301	土師器	台付甕	C地区 D15	SD168	(口) 14.3	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	淡黄、にぶい黄橙、灰黄褐	口縁7/12	内面に炭化物、外面に煤付着
157	5601	土師器	台付甕	C地区 C15	SD168	(口) 13.6	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙、橙 内：にぶい黄橙	口縁5/12	外面に煤付着(体部下方は煤なし)
158	5701	土師器	台付甕	C地区 B3	SD168	(口) 12.9 (底) 9.5 (器) 26.7	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：灰黄褐 内：黒褐	口縁8/12 底部完存	外面に煤付着(台部は煤なし)
159	12303	土師器	台付甕	C地区 C11	SD168	(口) 13.9	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	灰褐	口縁1/12	外面に煤付着
160	12701	土師器	台付甕	C地区 C15	SD168	(口) 14.2	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙、にぶい橙、橙 内：にぶい黄橙、にぶい橙、黒褐	口縁3/12	内外面に煤付着、破損時に被熱(破片によって色が異なる)

第6表　堀田遺跡(第6次)出土遺物観察表(4)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
161	12301	土師器	台付甕	C地区 D16	SD168	(口) 13.9	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐	口縁3/12	外面に煤付着
162	12602	土師器	台付甕	C地区 A6	SD168	(口) 18.9	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：灰黄、暗灰黄 内：褐灰、灰黄褐	口縁3/12	外面に煤付着
163	12802	土師器	台付甕	C地区 D16	SD168	(口) 14.3	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：橙 内：黄灰、褐灰、明黄褐	口縁2/12	外面に煤付着
164	12402	土師器	台付甕	C地区 D14	SD168	(口) 13.8	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙	口縁1/12	
165	12302	土師器	台付甕	C地区 D16	SD168	(口) 13.8	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐	口縁7/12	外面に煤付着
166	11401	土師器	台付甕	C地区 D13	SD168	(口) 14.4	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐	口縁2/12	外面に煤付着
167	12604	土師器	台付甕	C地区 B9・10	SD168	(口) 13.6	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：黄灰、暗灰 内：暗灰	口縁6/12	外面に煤付着
168	12603	土師器	台付甕	C地区 C15	SD168	(口) 14.0	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙、褐	口縁3/12	内面に炭化物、外面に煤付着
169	11801	土師器	台付甕	C地区 B2	SD168	(口) 21.6	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁1/12	布留甕的な口縁部
170	12003	土師器	台付甕	C地区 C11	SD168	(口) 19.8	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙、黒褐、灰黄褐	口縁3/12	布留甕的な口縁部
171	12106	土師器	台付甕	C地区 C2	SD168	(脚台)12.3	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、灰白	口縁2/12	
172	12504	土師器	台付甕	C地区 C11	SD168	(脚台)10.1	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白、淡黄、にぶい橙	脚台完存	
173	12105	土師器	台付甕	C地区 C11	SD168	(脚台) 9.8	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙、灰黄褐	脚台7/12	
174	12101	土師器	台付甕	C地区 B7	SD168	(脚台)11.6	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙、灰白、褐灰、黒褐	脚台完存	脚台上部外面に煤付着
175	12503	土師器	台付甕	C地区 C11	SD168	(脚台) 8.5	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白	脚台9/12	
176	12104	土師器	台付甕	C地区 B9	SD168	(脚台) 8.3	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	灰褐、黒、にぶい黄橙、灰黄褐	脚台5/12	
177	12506	土師器	台付甕	C地区 D15	SD168	(脚台) 7.0	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚台完存	内外面に煤付着
178	12103	土師器	台付甕	C地区 D14	SD168	(脚台) 7.9	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	褐灰、灰黄褐、にぶい褐	脚台完存	
179	12102	土師器	台付甕	C地区 B4	SD168	(脚台) 8.2	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	灰黄褐、にぶい赤褐、褐灰	脚台完存	脚台上部外面に煤付着
180	12108	土師器	台付甕	C地区 B10	SD168	(脚台) 6.7	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	褐灰、にぶい黄橙、黒、	脚台完存	脚台上部外面に煤付着
181	12505	土師器	台付甕	C地区 C15	SD168	(脚台) 7.8	外：ナデ→ハケメ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙、灰	脚台10/12	
182	11804	土師器	甕	C地区 D16	SD168	(口) 11.5 (頸) 9.7	外：ナデ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁11/12	布留系、外面に煤付着
183	10901	土師器	甕	C地区 C10	SD168	(口) 11.7 (高) 15.2	外：板ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	灰白	口縁10/12	黒斑あり 体部下半に擬口縁 形態は布留甕を真似るが手法はS字甕と同じ
184	14902	鉄器	斧	C地区 C9	SD168	(残長)12.5	鋳造				鋳造鉄斧
185	11707	土師器	ミニチュア土器(鉢)	C地区 B10	SD168	(口) 3.1 (高) 2.1	外：オサエ・ナデ 内：オサエ	やや密	外：灰黄、黄灰 内：灰黄	完形	古墳後期か 雲出島貫遺跡に類例有り
186	7604	土師器	高杯	C地区 B2	SD168	(脚裾) 8.6	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→ケズリ	やや粗	橙	脚裾1/12	古墳後期
187	11304	土師器	壺？	C地区 D13	SD168	(脚裾) 9.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚裾完存	
188	8904	土師器	壺？	C地区 B5	SD168	(脚裾) 9.7	外：ナデ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄	脚裾2/12	古墳前期後半か？
189	10802	土師器	長頸壺	C地区 D14	SD168	(口) 10.6 (高) 12.4	外：ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：ナデ→板ナデ→ヨコナデ	密	外：明褐灰、にぶい橙 内：明褐灰、にぶい橙	口縁2/12	
190	10701	土師器	長頸壺	C地区 B2	SD168	(体) 12.5	外：ナデ→ケズリ→ミガキ 内：ナデ→板ナデ	やや粗	浅黄橙、灰白	体部完存	底部やや平底、外面に煤付着
191	10903	土師器	台付甕	C地区 D14	SD168	(口) 12.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→板ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙、灰褐	口縁10/12	
192	11305	土師器	台付甕	C地区 D13	SD168	(脚台) 8.5	外：オサエ・ナデ 内：オサエ・ナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁8/12	
193	12601	土師器	甕	C地区 C11	SD168	(口) 20.1	外：オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：灰黄褐 内：褐灰	口縁3/12	6世紀代
194	14701	土師器	甕	C地区 B5	SD168	(口) 22.6	外：オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：浅黄橙 内：浅黄橙、にぶい褐	口縁1/12	外面に煤付着
195	11002	土師器	鉢	C地区 D13	SD168	(口) 29.4	外：ヨコナデ・ケズリ 内：板ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁2/12	外面に煤付着
196	11604	土師器	把手付鉢	C地区 D13	SD168	(口) 14.4 (器高)10.1	外：ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：褐灰、黒褐	口縁1/12	把手は一方向のみ 内面赤色顔料(ベンガラ?)付着、内外面煤付着。
197	13705	須恵器	杯蓋	C地区 B3	SD168	(口) 14.4	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	褐灰、にぶい黄橙	口縁1/12	
198	9603	須恵器	杯蓋	C地区 A5	SD168	(口) 13.6 (高) 4.4	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	黄灰	口縁6/12	
199	9604	須恵器	杯蓋	C地区 A5	SD168	(口) 14.0 (高) 4.4	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁3/12	
200	9701	須恵器	杯蓋	C地区 B2	SD168	(口) 14.0	外：回転ナデ→ヘラ切り後回転ケズリ→ナデ 内：回転ナデ	やや粗	外：灰 内：灰白	口縁3/12	外面に凹線

第７表　堀田遺跡(第６次)出土遺物観察表(５)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
201	9702	須恵器	杯蓋	C地区 C 3	S D168	(口) 11.4 (高) 3.4	外：回転ナデ→ヘラ切り→ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰白～灰	口縁完存	
202	9705	須恵器	杯蓋	C地区 A 4	S D168	(口) 13.4 (高) 3.8	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁 1 /12	
203	9706	須恵器	杯蓋	C地区 B 4	S D168	(口) 14.8 (高) 4.2	外：回転ナデ→ヘラ切り→ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁 1 /12	
204	9704	須恵器	杯蓋	C地区 B 2	S D168	(稜) 14.0 (摘) 3.4	外：回転ナデ→カキ目→貼付ナデ 内：回転ナデ	やや密	外：灰、灰白 内：黄灰	稜 10/12	
205	9605	須恵器	杯蓋	C地区 D13	S D168	(体) －	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰白、灰	体部片	内面にヘラ記号
206	9501	須恵器	杯身	C地区 D13	S D168	(口) 12.8 (受) 15.2 (高) 4.2	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	粗	灰	口縁11/12	内面に黒色付着物(墨？)
207	9403	須恵器	杯身	C地区 A 4	S D168	(口) 12.6 (受) 14.5 (高) 4.2	外：回転ナデ→回転ケズリ後ナデ後ヘラ記号 内：回転ナデ	やや粗	外：灰白～灰 内：灰	口縁 9 /12 受部11/12	底面ヘラ記号「×」
208	9504	須恵器	杯身	C地区 A 4	S D168	(口) 14.1 (受) 16.5 (高) 3.5	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁 1 /12 受部 6 /12	内面は研磨、外面に煤付着、歪み有り
209	9402	須恵器	杯身	C地区 A 5	S D168	(口) 12.9 (受) 15.2 (高) 4.2	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁 9 /12 受部10/12	
210	9503	須恵器	杯身	C地区 D14	S D168	(口) 14.2 (受) 15.7 (高) 3.7	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ・同心円あて具痕	やや粗	灰白	口縁 3 /12 受部 3 /12	
211	5004	須恵器	杯身	C地区 B 3	S D168	(口) 11.1 (受部) 13.8 (高) 3.8	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	密	灰	口縁 1 /12 受部 1 /12	
212	9502	須恵器	杯身	C地区 A 4	S D168	(口) 12.0 (受) 14.7 (高) 5.0	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	外：黄灰 内：黄灰、灰褐	口縁 1 /12 受部 6 /12	外面に赤色顔料(ベンガラ)による記号？「+」
213	9404	須恵器	高杯	C地区 A 5	S D168	(口) 15.4 (受) 17.0	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁 1 /12 受部 3 /12	
214	10902	須恵器	壺	C地区 D14	S D168	(口) 8.5 (高) 13.2	外：回転ナデ→カキメ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	暗灰	口縁完存	内外面に自然釉
215	10702	須恵器	小形壺	C地区 D15	S D168	(口) 8.8 (高) 10.4	外：回転ナデ→カキメ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁 1 /12 体部完存	
216	10803	須恵器	壺	C地区 D14	S D168	(口) 11.3 (高) 18.4	外：タタキ→回転ナデ・カキメ→刺突→回転ケズリ 内：回転ナデ	密	灰白	口縁 1 /12 体部完存	焼成は脆弱、上部薄く剥離している部分有り
217	10801	須恵器	短頸壺	C地区 D10	S D168	(口) 7.9 (高) 11.6	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	粗	灰白、灰	口縁完存	
218	9602	須恵器	壺	C地区 B 2	S D168	(体) 13.1 (頸) 7.8	外：回転ナデ→カキメ→回転ケズリ 内：回転ナデ	粗	灰	体部 6 /12 頸部 1 /12	
219	11806	土師質	土錘	C地区 D13	S D168	(長) 5.8 (幅) 1.3	長楕円形、円棒状具による孔	やや密	にぶい黄橙	完存	(重)7.8g
220	11703	土師器	蓋	C地区 B 5	S D168	(口) 10.6 (高) 2.6	外：ヨコナデ→剥離 内：ヨコナデ→ナデ	やや粗	外：にぶい橙～橙 内：橙	口縁 7 /12	
221	11803	土師器	杯C	C地区 C 7	S D168	(口) 12.2 (高) 2.8	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁 6 /12	粗製
222	11702	土師器	杯A	C地区 D16	S D168	(口) 20.1	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→二段斜放射状暗文	やや密	橙	口縁 2 /12	
223	11805	土師器	杯C	C地区 C 7	S D168	(口) 16.8 (高) 5.4	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	やや密	にぶい橙	口縁 6 /12	
224	12901	土師器	杯C	C地区 D16	S D168	(口) 17.2	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁 2 /12	奈良頃か、C手法
225	14103	土師器	高杯	C地区 B 4	S D168	(脚柱) 3.5	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：オサエ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	基部完存	杯と脚との接合面が杯部に刻まれた線の陽刻になっている
226	14105	須恵器	杯A	C地区 B 5	S D168	(口) 10.2 (高) 3.7	外：回転ナデ→回転ケズリ→研磨 内：回転ナデ→ナデ	やや密	黄灰	口縁 3 /12	内面に炭化物～ベンガラ？付着(ベンガラの精製容器に使用か？)
227	13707	須恵器	杯身	C地区 C 8	S D168	(口) 12.0 (高) 3.7	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁 2 /12	
228	9703	須恵器	蓋	C地区 B 5	S D168	(口) 20.5 (高) 3.3	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付後ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁 5 /12	
229	9401	須恵器	杯B	C地区 D 3	S D168	(口) 14.6 (底) 10.1 (高) 4.1	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内：回転ナデ	やや粗	外：灰白、灰 内：灰	口縁 4 /12 底部 9 /12	
230	10603	土師器	甕	C地区 B 5	S D168	(口) 12.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁 8 /12	口縁部内面に炭化物付着、外面に煤付着
231	12202	土師器	甕	C地区 B 4	S D168	(口) 15.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：黒褐、にぶい橙、にぶい褐 内：灰褐	口縁 3 /12	内面に炭化物、外面に煤付着
232	12201	土師器	甕	C地区 B 4	S D168	(口) 16.2	外：オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙、にぶい黄橙、 内：褐灰、灰白	口縁 2 /12	内面に炭化物、外面に煤付着
233	14301	土師器	甕	C地区 A 4	S D168	(口) 16.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	にぶい橙、黒褐	口縁12/12	外面に煤付着
234	14003	土師器	甕	C地区 B 4	S D168	(口) －	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ケズリ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁部片	
235	5401	土師器	長胴甕	C地区 C12	S D168	(口) 22.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	にぶい黄橙、暗灰	口縁 8 /12	外面に煤付着
236	9601	須恵器	壺	C地区 B 4	S D168	(口) 20.0 (頸) 15.3	外：タタキメ→ヨコナデ・カキメ 内：ヨコナデ	やや密	灰	口縁 5 /12 頸部 3 /12	
237	8702	土師器	甕	C地区 D18	S K164	(口) 15.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙 内：浅黄橙	口縁 2 /12	内面に炭化物付着
238	8704	土師器	甕	C地区 D18	S K164	(口) 21.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	灰白、にぶい橙	口縁 2 /12	
239	7601	土師器	台付甕	C地区 D16	S D151	(口) 14.2	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：褐灰 内：灰黄褐	口縁 4 /12	外面に煤付着
240	4902	土師器	台付甕	C地区 B 6	S D151	(口) 20.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁 1 /12	古墳前期

第８表　堀田遺跡(第６次)出土遺物観察表(６)

番号	実測番号	器・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
241	7504	土師器	台付甕	C地区 C 8	S D151	(脚台) 8.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ	粗	外：灰白、にぶい黄橙 内：灰白	口縁3/12	
242	11303	土師器	高杯	C地区 B 8	S D151	(脚柱) 3.0	外：ハケメ→ナデ 内：絞り目→ナデ	やや密	灰黄	脚柱12/12	
243	12903	土師器	高杯B	C地区 C 2	S D151	(脚柱) 2.4 (脚裾) 8.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ケズリ→ヨコナデ	やや粗	橙	脚部完存	
244	11306	土師器	小形鉢	C地区 D13	S D151	(口) 12.4	外：オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
245	11701	土師器	台付 小形鉢	C地区 D12	S D151	(口) 11.8	外：オサエ・ナデ→貼付ヨコナデ・ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：浅黄橙、にぶい橙、 内：にぶい橙、橙	口縁6/12	6世紀代
246	9903	須恵器	杯身	C地区 B 4	S D151	(口) 11.5 (受) 14.0 (高) 4.0	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁1/12	内面に墨付着
247	9801	須恵器	高杯	C地区 C11	S D151	(口) 17.2	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁6/12	口縁部歪み有り
248	11302	須恵器	高杯	C地区 C10	S D151	(脚柱) 6.4	外：回転ナデ→二方透かし窓 内：回転ナデ	やや密	灰	脚柱12/12	
249	9905	須恵器	高杯	C地区 B 9	S D151	(脚裾)14.6	外：回転ナデ→二方透かし窓 内：回転ナデ	やや密	灰、灰白	脚裾3/12	
250	11301	須恵器	𤭯	C地区 B 9	S D151	(体) 9.1 (頸) 3.8	外：回転ナデ→回転ケズリ→穿孔 内：回転ナデ	やや粗	灰白、灰	体部 /12	穿孔部分剥離(使用時の圧力か？栓をしていたか？)
251	11201	須恵器	提瓶	C地区 D12	S D151	(頸) 4.9	外：回転ナデ・カキメ→頸部付加ヨコナデ→浮文 内：回転ナデ・同心円あて具痕	やや密	外：灰 内：灰白	頸部6/12	ボタン状浮文・接合痕あり、外面に自然釉
252	6604	土師器	杯C	C地区 B 4	S D151	(口) 10.2 (高) 2.5	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙、にぶい赤褐	口縁4/12	
253	6603	土師器	杯C	C地区 D12	S D151	(口) 11.2 (高) 3.7	外：ヨコナデ→ヘラミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙、にぶい黄橙	口縁5/12	白色胎土
254	6802	土師器	杯C	C地区 B 4	S D151	(口) 11.0 (高) 2.85	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内：放射状暗文	やや粗	橙、にぶい橙	口縁2/12	黒斑あり
255	6402	土師器	杯C	C地区 D 1	S D151	(口) 10.9 (高) 2.8	外：オサエ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁11/12	外面の工具痕はヘラ状工具か暗文のピッチであたっている。ほぼ全周している。
256	6403	土師器	杯C	C地区 C 2	S D151	(口) 12.3 (高) 3.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	やや密	にぶい橙	口縁7/12	褐色胎土
257	8901	土師器	杯C	C地区 D 2	S D151・179	(口) 14.0	外：オサエ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	密	にぶい橙	口縁4/12	褐色胎土
258	7101	土師器	杯C	C地区 C18	S D151	(口) 13.8	外：ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	外：にぶい橙 内：橙、にぶい黄橙	口縁2/12	白色胎土、黒斑あり
259	6801	土師器	杯C	C地区 D 2	S D151	(口) 14.0 (高) 3.45	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや粗	にぶい褐、にぶい橙	口縁3/12	
260	7003	土師器	杯C	C地区 C 8	S D151	(口) 16.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ→放射状暗文	密	外：にぶい橙、 内：にぶい橙、橙	口縁1/12	
261	6903	土師器	杯C	C地区 C 8	S D151	(口) 15.6	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	密	外：橙、にぶい橙 内：橙	口縁2/12	
262	6202	土師器	杯C	C地区 D 2	S D151	(口) 13.5 (高) 2.9	外：ヨコナデ→オサエ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	にぶい橙	口縁5/12	褐色胎土
263	6401	土師器	杯C	C地区 D13	S D151	(口) 15.8 (高) 3.5	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	にぶい橙、橙	口縁1/12	
264	11603	土師器	杯C	C地区 B 3	S D151	(口) 15.5 (高) 4.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	外：にぶい橙、オリーブ黒 内：にぶい橙	口縁3/12	白色胎土、黒斑あり
265	6907	土師器	杯G	C地区 C 1	S D151	(口) 11.6 (高) 2.75	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ヨコナデ	密	外：橙 内：灰、にぶい黄橙	口縁3/12	
266	6704	土師器	杯G	C地区 C 1	S D151	(口) 13.0	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ヨコナデ→摩滅	やや密	橙	口縁3/12	内面黒斑
267	6002	土師器	杯A	C地区 C12	S D151	(口) 14.5	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ→ナデ	密	外：明赤褐 内：にぶい橙	口縁6/12	C手法、平安Ⅱ古併行か
268	6001	土師器	杯A	C地区 B 4	S D151	(口) 12.8 (高) 3.1	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁11/12	斎宮Ⅱ3併行、平安中期か？
269	6906	土師器	杯G	C地区 C19	S D151	(口) 12.2 (高) 4.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	外：にぶい橙、 内：灰褐、にぶい褐	口縁3/12	
270	6004	土師器	杯G？	C地区 C12	S D151	(口) 12.5	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁9/12	
271	6902	土師器	杯G	C地区 C 8	S D151	(口) 13.0 (高) 3.7	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁6/12	歪み有り
272	11601	土師器	杯G	C地区 C 8	S D151	(口) 13.2 (高) 3.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	灰黄褐	口縁2/12	
273	6003	土師器	杯G	C地区 C 3	S D151	(口) 12.4	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁9/12	
274	11602	土師器	杯G	C地区 B 9	S D151	(口) 13.5 (高) 3.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	外：灰黄褐 内：灰黄褐、明褐	口縁2/12	
275	6904	土師器	杯A	C地区 A 4	S D151	(口) 15.6 (高) 3.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	外：橙、にぶい橙 内：にぶい橙	口縁4/12	粗製
276	6601	土師器	杯A	C地区 D 1	S D151	(口) 17.6 (高) 4.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ→二段放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁2/12	
277	7005	土師器	杯A	C地区 C11	S D151	(口) 18.5	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→二段斜放射状暗文	密	外：橙、にぶい赤褐、黒 内：橙	口縁1/12	緻密、褐色胎土
278	6506	土師器	杯A	C地区 C 3	S D151	(口) 16.8	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→二段放射状暗文	密	橙、浅黄橙	口縁1/12	白色胎土、黒斑不明
279	6703	土師器	杯A	C地区 C 1 C 3	S D151	(口) 16.4 (高) 4.9	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→暗文(摩滅)	密	橙	口縁3/12	白色胎土、赤色粒含む
280	14102	土師器	杯A	C地区 C 3	S D151	(口) 19.2	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	やや密	外：橙 内：明赤褐、橙	口縁3/12	

第9表　堀田遺跡(第6次)出土遺物観察表(7)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
281	6901	土師器	杯A	C地区 C1	SD151	(口) 17.4 (高) 4.7	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ	密	橙	口縁9/12	暗文なし
282	6908	土師器	杯A	C地区 C19	SD151	(口) 17.5	外：ヨコナデ→ミガキ(磨耗) 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや粗	外：明褐灰 内：にぶい黄橙	口縁4/12	黄色胎土、暗文は粗雑、素地も含め異質な土器
283	6602	土師器	杯A	C地区 C9	SD151	(口) 21.2 (高) 4.85	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→二段放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙、灰白	口縁1/12	緻密、白色胎土
284	6301	土師器	杯C	C地区 C3	SD151	(口) 20.5 (高) 3.8	外：ヨコナデ→ケズリ→弱いミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁2/12	大形、褐色胎土
285	6505	土師器	杯C？	C地区 C3	SD151	(口) 22.4	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや密	にぶい橙、橙	口縁1/12	大形
286	7001	土師器	鉢	C地区 C10	SD151	(口) 14.1	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	外：にぶい橙、赤褐 内：にぶい橙、褐灰	口縁2/12	
287	6804	土師器	蓋	C地区 C1	SD151	(摘) 4.3	外：貼付ナデ→ミガキ 内：ナデ	やや密	外：橙 内：にぶい橙	摘み8/12	奈良頃か？
288	6805	土師器	蓋	C地区 C1	SD151	(摘) 3.8	外：貼付ナデ→ミガキ 内：ナデ	やや密	橙	摘み9/12	
289	6805	土師器	蓋	C地区 C1	SD151	(口) 19.7	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ナデ	やや密	橙	口縁2/12	
290	7002	土師器	蓋	C地区 C8	SD151	(口) 18.9	外：ヨコナデ→ケズリ・ミガキ 内：ヨコナデ→ナデ	密	橙	口縁2/12	
291	7803	土師器	高杯	C地区 C1	SD151	(口) 17.8	外：オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙、にぶい黄橙	口縁2/12	杯と脚との接合面にヘラで刻みを入れている。
292	7804	土師器	高杯	C地区 C1	SD151	(脚柱) 3.4	外：ミガキか？(剥離激しく調整不明) 内：ナデ	やや密	にぶい橙	脚柱完存	
293	7703	土師器	高杯	C地区 B1	SD151	(脚裾) 8.5	外：ケズリ→ヨコナデ 内：ナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	外：浅黄橙 内：浅黄橙、明赤褐	脚裾9/12	
294	7006	土師器	皿B	C地区 C8	SD151	(高台)13.2	外：ナデ→貼付けナデ 内：斜放射状暗文・螺旋状暗文	密	外：にぶい橙 内：橙、褐灰	高台1/12	緻密、褐色胎土
295	6101	土師器	皿A	C地区 A5	SD151	(口) 22.7	外：ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰白、にぶい黄橙、灰	口縁6/12	須恵器模倣か、一部瓦質を呈する
296	6201	土師器	皿A	C地区 B2	SD151	(口) 21.7 (高) 3.0	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙、明赤褐	口縁7/12	白色胎土、黒斑あり
297	6302	土師器	皿A	C地区 C3	SD151	(口) 22.9 (高) 2.9	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	やや密	外：橙 内：橙、にぶい橙	口縁5/12	外面C手法　粗い褐色胎土
298	6502	土師器	皿A	C地区 B8	SD151	(口) 20.9 (高) 2.1	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	密	橙	口縁2/12	
299	6504	土師器	皿A	C地区 B7	SD151	(口) 18.8 (高) 2.1	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	密	橙	口縁1/12	
300	6503	土師器	皿A	C地区 C3	SD151	(口) 20.9 (高) 2.05	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや粗	橙、灰	口縁1/12	
301	6701	土師器	皿A	C地区 D3	SD151	(口) 21.8 (高) 1.6	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ヨコナデ→放射状暗文	密	橙、浅黄橙	口縁2/12	白色胎土、黒斑あり
302	6102	土師器	皿A	C地区 C14	SD151	(口) 22.2 (高) 3.4	外：ヨコナデ→ケズリ・ヘラ記号？ 内：ヨコナデ→放射状暗文・螺旋状暗文	やや粗	外：橙、にぶい橙 内：にぶい黄橙	口縁3/12	
303	14702	土師器	鉢	C地区 B10	SD151	(高台)14.9	外：ナデ→貼付ナデ→ミガキ 内：オサエ→板ナデ	密	外：橙、浅橙、灰 内：橙、にぶい橙	口縁1/12	
304	7401	土師器	小形甕	C地区 C4	SD151	(口) 12.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい褐 内：浅黄橙	口縁4/12	内面に炭化物、外面に煤付着
305	14604	土師器	甕	C地区 A5	SD151	(口) 14.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	密	外：黒褐、浅黄橙 内：浅黄橙	口縁3/12	外面に煤付着
306	7603	土師器	甕	C地区 C11	SD151	(口) 14.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙、橙 内：にぶい黄橙	口縁5/12	
307	14605	土師器	甕	C地区 C3	SD151	(口) 15.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密	外：灰黄褐、淡橙 内：にぶい橙、褐灰、黒	口縁1/12	内面に炭化物、外面に煤付着
308	7501	土師器	甕	C地区 C9	SD151	(口) 14.1	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙 内：にぶい橙、褐灰	口縁3/12	
309	7403	土師器	甕	C地区 B7	SD151	(口) 14.0	外：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内：板ナデ→ヨコナデ	やや密	外：灰黄褐、褐灰 内：褐灰、にぶい黄橙	口縁1/12	内面に炭化物、外面に煤付着
310	14603	土師器	甕	C地区 C3	SD151	(口) 16.2 (頸) 13.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12 頸部3/12	内外面に煤付着
311	7301	土師器	甕	C地区 B6	SD151	(口) 16.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：褐灰 内：浅黄橙	口縁3/12	外面に煤付着
312	10601	土師器	鉢	C地区 B4	SD151	(口) 19.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや密	浅黄橙、にぶい黄橙	口縁9/12	横方向ハケメ
313	7402	土師器	甕	C地区 B7	SD151	(口) 20.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙 内：灰黄褐	口縁1/12	内面一部に炭化物、外面薄い煤付着
314	13906	土師器	甕	C地区 C3	SD151	(口) 17.0 (頸) 14.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	粗	外：にぶい褐 内：灰黄褐、黒褐	口縁4/12 頸部4/12	外面に煤付着
315	7201	土師器	甕	C地区 C3	SD151	(口) 16.5 (体) 18.8	外：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁5/12	内面黒いタール状に炭化物、外面に煤付着、外面下部赤変
316	5501	土師器	甕	C地区 B10	SD151	(口) 15.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	にぶい黄橙、浅黄橙、にぶい橙	口縁1/12	内面に炭化物、外面に煤付着
317	10602	土師器	甕	C地区 B4	SD151	(口) 15.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	やや密	にぶい橙、にぶい褐、褐灰	口縁7/12	内面に炭化物、外面に煤付着
318	7203	土師器	甕	C地区 D1	SD151	(口) 19.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや密	褐灰、灰黄褐	口縁3/12	異系統
319	14503	土師器	甕	C地区 C2	SD151	(口) 20.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：剥離	密	にぶい橙、浅黄橙	口縁2/12	
320	14601	土師器	甕	C地区 C2	SD151	(口) 19.0 (頸) 15.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁1/12 頸部3/12	

第10表　堀田遺跡(第６次)出土遺物観察表(８)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
321	13901	土師器	甕	C地区 C３	ＳD151	(口) 19.9 (頸) 15.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	口縁２/12 頸部２/12	
322	14602	土師器	甕	C地区 A５	ＳD151	(口) 20.2 (頸) 16.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：灰白 内：褐灰、灰白	口縁１/12 頸部３/12	
323	13902	土師器	甕	C地区 C３	ＳD151	(口) 21.5 (頸) 16.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙、灰黄褐	口縁２/12 頸部２/12	異系統　搬入か？
324	13903	土師器	甕	C地区 B４	ＳD151	(口) 19.1 (頸) 16.1	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙、灰黄褐	口縁３/12 頸部３/12	外面煤付着
325	7503	土師器	甕	C地区 A７	ＳD151	(口) 19.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	粗	外：にぶい橙、にぶい褐 内：にぶい黄橙	口縁４/12	７世紀代か？外面に煤付着
326	7802	土師器	甕	C地区 B４	ＳD151	(口) 18.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁２/12	
327	7304	土師器	甕	C地区 C２	ＳD151	(口) 24.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、灰黄褐	口縁１/12	内面に炭化物、外面に煤付着
328	7204	土師器	甕	C地区 C３	ＳD151	(口) 23.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐	口縁３/12	外面に煤付着
329	7202	土師器	甕	C地区 C３	ＳD151	(口) 22.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、灰黄褐	口縁３/12	
330	7602	土師器	甕	C地区 C３	ＳD151	(口) 21.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	粗	外：にぶい褐 内：にぶい黄橙	口縁３/12	６世紀代か？外面に煤付着
331	7701	土師器	甕	C地区 B４	ＳD151	(口) 19.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁３/12	外面に煤付着
332	14502	土師器	甕	C地区 B７	ＳD151	(口) 28.4 (頸) 25.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁１/12	外面に煤付着
333	14501	土師器	甕	C地区 B６	ＳD151	(口) 22.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙、にぶい橙	口縁３/12	
334	11101	土師器	長胴甕	C地区 A５	ＳD151	(口) 21.1	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ・板ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白、灰黄褐	口縁６/12	外面一部黒変、煤付着
335	7302	土師器	鉢	C地区 D１	ＳD151	(口) 24.8	外：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄褐 内：褐灰	口縁２/12	内面に炭化物付着
336	13904	土師器	鉢	C地区 C３	ＳD151	(口) －	外：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙、橙	口縁１/12	
337	7702	土師器	把手付鍋	C地区 B９	ＳD151	(口) 30.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ・板ナデ→ヨコナデ	粗	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰黄	口縁３/12	把手の痕跡あり
338	7303	土師器	鉢	C地区 C14	ＳD151	(口) 36.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐	口縁１/12	内面に炭化物付着
339	10501	土師器	把手付鍋	C地区 C２	ＳD151	(口) 34.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや粗	にぶい橙、黒褐	口縁10/12	外面一部煤付着　把手は挿入
340	9203	須恵器	杯蓋	C地区 C３	ＳD151	(口) 12.2 (高) 3.1	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁１/12	
341	9204	須恵器	杯蓋	C地区 B１	ＳD151	(口) 13.2 (高) 3.35	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰白	口縁７/12	尾張北部産か
342	9207	須恵器	杯蓋	C地区 C３	ＳD151	(口) 11.9	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰白	口縁３/12	
343	9202	須恵器	杯蓋	C地区 C２	ＳD151	(口) 11.8 (高) 3.1	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	密	灰	口縁７/12	
344	9301	須恵器	杯蓋	C地区 D２	ＳD151	(口) 17.6 (高) 3.3	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	密	灰	口縁２/12	
345	9201	須恵器	杯蓋	C地区 C18	ＳD151	(口) 14.5 (高) 3.9	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	密	灰白	口縁５/12	
346	9208	須恵器	杯蓋	C地区 B７	ＳD151	(口) 15.6 (高) 3.9	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁２/12	
347	9206	須恵器	杯蓋	C地区 C３・C４	ＳD151	(口) 11.2 (高) 2.4	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや粗	灰	口縁９/12	
348	6905	須恵器	杯G	C地区 B11	ＳD151	(口) 10.1 (高) 3.5	外：回転ナデ→ナデ 内：回転ナデ	密	外：にぶい橙、灰、暗灰 内：灰、暗灰	口縁３/12	生焼け、表面が剥離
349	9305	須恵器	杯G	C地区 B９	ＳD151	(口) 11.8 (高) 4.4	外：回転ナデ→ヘラ切り→ナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや粗	灰	口縁６/12	
350	9304	須恵器	杯G	C地区 B９	ＳD151	(口) 12.3 (高) 4.3	外：回転ナデ→ヘラ切り→ナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや粗	灰	口縁10/12	
351	9303	須恵器	杯G	C地区 B９	ＳD151	(口) 10.4 (高) 4.5	外：回転ナデ→ヘラ切り→工具なで 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁11/12	
352	9302	須恵器	杯G	C地区 B９	ＳD151	(口) 12.8 (高) 3.9	外：回転ナデ→ヘラ切り 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁11/12	外面に煤付着
353	9804	須恵器	杯A	C地区 B８	ＳD151	(口) 14.0 (高) 4.2	外：回転ナデ→ヘラ切り 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁２/12	
354	9807	須恵器	杯A	C地区 C19	ＳD151	(口) 9.5 (底) 5.5 (高) 3.4	外：回転ナデ→ヘラ切り 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰、灰白	口縁４/12	内面に漆付着
355	9306	須恵器	杯A	C地区 B９	ＳD151	(口) 11.9 (高) 4.2	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	口縁７/12	
356	9806	須恵器	杯A	C地区 D13	ＳD151	(口) 10.8 (高) 3.1	外：回転ナデ→ヘラ切り→ナデ 内：回転ナデ	やや粗	外：灰白 内：灰	口縁３/12	口縁部灰かぶり
357	10102	須恵器	杯A	C地区 b１	ＳD151	(口) 11.0 (高) 3.0	外：回転ナデ→ナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	口縁３/12	底面にヘラ記号「×」
358	13706	須恵器	杯A	C地区 C10	ＳD151	(口) 11.1 (高) 3.6	外：回転ナデ→ヘラ起こし→ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰、灰白	口縁２/12	
359	10204	須恵器	杯A	C地区 C３	ＳD151	(口) 13.0 (高) 5.3	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや粗	外：灰黄褐、褐灰 内：灰白、褐灰	口縁10/12	底面にヘラ記号、内外面に漆付着
360	9803	須恵器	杯A	C地区 C19	ＳD151	(口) 14.2 (底) 9.5 (高) 4.7	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰白、灰	口縁３/12	底面にヘラ記号あり、内外面に自然釉あり

第11表　堀田遺跡(第６次)出土遺物観察表(９)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
361	10104	須恵器	杯A	C地区 B7	SD151	(口) 16.3 (底) 11.0 (高) 4.8	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	外：灰白～暗灰 内：灰	口縁2/12 底部2/12	内面剥離はげしい
362	10203	須恵器	杯A	C地区 B6	SD151	(底) 11.6	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰白	口縁4/12	
363	10101	須恵器	杯B	C地区 A5	SD151	(口) 18.4 (高台) 12.7 (高) 5.8	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや粗	灰	口縁3/12 底部3/12	
364	10001	須恵器	杯B	C地区 C13	SD151	(口) 17.2 (高台) 11.0 (高) 2.1	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	外：にぶい橙、灰褐 内：灰赤、にぶい橙	口縁2/12 底部9/12	猿投？底面にヘラ記号あり
365	10004	須恵器	杯B	C地区 C3	SD151	(口) 14.1 (高台) 9.8 (高) 3.7	外：回転ナデ→糸切り→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁2/12 高台11/12	
366	10002	須恵器	杯B	C地区 C12	SD151	(口) 15.1 (高台) 10.8 (高) 4.2	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁3/12	
367	10003	須恵器	杯B	C地区 C10	SD151	(口) 17.5 (高台) 12.7 (高) 5.0	外：回転ナデ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁3/12 高台3/12	
368	10102	須恵器	杯B	C地区 D1	SD151	(口) 19.7 (高台) 16.0 (高) 4.0	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	外：黄灰～灰黄、灰黄褐 内：黄灰	口縁2/12 底部3/12	
369	10103	須恵器	杯B	C地区 C3	SD151	(口) 19.3 (高台) 14.9 (高) 4.3	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	外：黄灰 内：灰白	口縁2/12 底部2/12	内面上部・底に研磨あり
370	10301	須恵器	鉢	C地区 C1	SD151	(口) 50.2 (底) 42.0 (高) 7.6	外：回転ナデ→ケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰白	口縁2/12 底部2/12	内面に黒色付着物あり(墨？)
371	9907	須恵器	高杯	C地区 A4	SD151	(脚裾) 9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰白、灰	脚裾2/12	
372	9808	須恵器	壺G？	C地区 C14	SD151	(底) 5.1	外：回転ナデ→ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰	底部8/12	
373	11204	須恵器	小形壺	C地区 C12	SD151	(高台) 5.4	外：回転ナデ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	灰白	高台4/12	内面に自然釉.底面にヘラ記号「火」か？
374	9902	須恵器	壺	C地区 C12	SD151	(口) 10.2	外：回転ナデ・ヘラ状具沈線 内：回転ナデ	やや密	灰白、灰	口縁6/12	フラスコ形.湖西あるいは猿投産か？
375	10401	須恵器	壺K	C地区 C2	SD151	(高台) 12.2	外：タタキメ→回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	外：灰白、灰 内：灰	高台3/12	
376	10201	須恵器	壺K	C地区 A6	SD151	(高台) 8.4	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰白	高台10/12	内外面に自然釉あり
377	10402	須恵器	壺	C地区 D17	SD151	(体) 17.3	外：回転ナデ→ナデ 内：回転ナデ	やや密	外：灰白、灰 内：灰白	体部12/12	自然釉付着
378	11205	須恵器	𤭯	C地区 B8	SD151	(体) 7.0 (頸) 3.5	外：回転ナデ 内：絞り目痕→回転ナデ	やや密	外：灰 内：灰白	体部3/12	内面に漆付着、外面に自然釉あり
379	11203	須恵器	平瓶	C地区 B2	SD151	(口) 7.4	外：回転ナデ・カキ目・沈線 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁11/12	
380	14901	須恵器	平瓶	C地区 C11	SD151	(体) 15.6	外：回転ナデ→回転ケズリ→口縁部付加 内：回転ナデ	密	灰白	体部9/12	外面に自然釉あり
381	11202	須恵器	鉢	C地区 A5	SD151	(口) 15.8	外：回転ナデ→ヘラケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	口縁2/12	
382	9901	須恵器	薬壺	C地区 C8	SD151	(口) 15.6	外：タタキメ→回転ナデ・カキ目→把手貼付ナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	口縁1/12	把手は貼り付けによる
383	10302	須恵器	壺	C地区 C1	SD151	(口) 21.8	外：タタキメ→回転ナデ 内：同心円あて具痕→回転ナデ	やや粗	外：灰 内：灰白	口縁4/12	
384	14401	須恵器	鉢	C地区 B6	SD151	(口) 34.2 (底) 19.0 (高) 27.2	外：回転ナデ→ケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	黄灰	口縁6/12 底部10/12	外面下半に線刻文字あり(焼成前)
385	14801	土師器	甑	C地区 C3	SD151	(口) 48.1	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁1/12	386の上半部　内面炭化物付着
386	14801	土師器	甑	C地区 C3	SD151	(底) 24.0	外：ハケメ→貼付ナデ 内：ハケメ→ナデ	やや密	浅黄橙	底　3/12	385の下半部
387	11501	瓦	平瓦	C地区 C10	SD151	(厚) 2.2	凹面：布目痕 凸面：格子目叩き痕→ナデ	やや粗	浅黄橙、にぶい黄橙		煤付着
388	14104	土師器	高杯A	C地区 D17	SD165	(脚柱) 3.4	外：摩滅 内：ナデ	やや粗	浅黄橙、灰黄褐	脚柱完存	
389	8306	土師器	高杯A	C地区 D17	SD165	(脚柱) 2.8	外：剥離 内：絞り目痕	やや密	にぶい橙、浅黄橙	脚柱完存	
390	8406	土師器	高杯A	C地区 D18	SD165	(脚柱) 3.4	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ	やや密	浅橙、浅黄橙	脚柱完存	
391	8405	土師器	高杯A	C地区 D18	SD165	(脚柱) 3.3	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ	やや密	灰白、灰	脚柱完存	
392	8407	土師器	高杯A	C地区 D18	SD165	(脚柱) 2.8	外：板ナデ→ナデ 内：絞り目→ナデ	やや密	にぶい黄橙、灰黄褐	脚柱完存	杯内面・脚外面に煤付着
393	8302	土師器	壺	C地区 C17	SD165	(口) 18.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	灰黄褐	口縁3/12	二重口縁
394	8205	土師器	台付甕	C地区 C17	SD165	(口) 12.8	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい赤橙、にぶい赤	口縁2/12	
395	8204	土師器	台付甕	C地区 C15	SD165	(口) 13.8	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・板ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙、褐灰	口縁3/12	外面に煤付着
396	8203	土師器	台付甕	C地区 C17	SD165	(口) 15.0	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・板ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：浅黄橙、 内：にぶい黄橙	口縁3/12	外面に煤付着
397	8202	土師器	台付甕	C地区 D18	SD165	(口) 14.4	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・板ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁3/12	外面に煤付着
398	13305	土師器	甕	C地区 C18	SD165	(口) 15.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙 内：褐灰	口縁1/12	7～8世紀代.内面炭化物・外面煤付着
399	8201	土師器	台付甕	C地区 C19	SD165	(口) 30.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白、黄灰	口縁2/12	S字B類
400	13403	土師器	鉢	C地区 D18	SD165	(口) －	外：ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文	密	にぶい橙、にぶい黄橙	口縁部片	8世紀初め

第12表　堀田遺跡(第6次)出土遺物観察表(10)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
401	8403	須恵器	杯B	C地区 D18	SD165	(口) 12.3	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰白、灰	口縁4/12	内面底にヘラ記号あり
402	8402	須恵器	皿A	C地区 D18	SD165	(口) 25.0 (高) 4.2	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	灰白	口縁2/12	
403	13701	須恵器	壺	C地区 排水溝	SD165	(口) 21.0 (頸) 16.8	外：タタキメ→回転ナデ 内：同心円あて具痕→回転ナデ	やや密	灰	口縁1/12	
404	8408	土師質	土馬	C地区 C17	SD162	(残長) 9.3	外：目・鼻・手綱装飾の円形刺突は全て同一工具 内：絞り目痕→ナデ	密	外：橙 内：灰褐、褐灰	頭部、頸部	精緻、頭部から頸部は一体で成形
405	8304	土師器	杯G	C地区 C17	SD162	(口) 12.0 (高) 3.3	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁4/12	内面に鉄分付着
406	8305	土師器	杯G	C地区 C17	SD162	(口) 12.4	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙、橙	口縁1/12	
407	13001	土師器	高杯	C地区 C17	SD162	(脚柱) 3.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	やや密	橙、にぶい橙	脚柱完存	7～8世紀代
408	8102	須恵器	杯蓋	C地区 C17	SD162	(口) 11.4 (高) 2.5	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	口縁6/12	
409	8101	須恵器	杯蓋	C地区 C16	SD162	(口) 17.9 (高) 3.0	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	口縁6/12	猿投産か？
410	8002	須恵器	杯B	C地区 C17	SD162	(口) 15.5 (高台) 9.8 (高) 4.1	外：回転ナデ→ヘラ切り→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰白	口縁4/12 高台6/12	
411	8003	須恵器	高杯	C地区 C17	SD162	(口) 18.0 (脚裾) 12.2 (高) 10.9	外：回転ナデ・沈線→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや密	灰	口縁3/12 脚柱完存 脚裾4/12	美濃須衛産？
412	7903	須恵器	壺K	C地区 d17	SD162	(口) 8.8 (頸) 4.0	外：回転ナデ・沈線 内：回転ナデ	密	灰白	口縁8/12 頸部完存	内面に自然釉あり
413	8103	須恵器	壺K	C地区 C17	SD162	(脚柱) 5.6 (脚裾) 7.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰、灰白	脚柱完存 脚裾完存	
414	8004	須恵器	壺	C地区 C16	SD162	(脚柱) 5.2 (脚裾) 10.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰、暗灰	脚柱完存 脚裾完存	
415	8001	須恵器	壺	C地区 C18	SD162	(底) 7.5	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	灰白	底部完存	底面にヘラ記号「×」
416	7904	須恵器	捏鉢	C地区 C16	SD162	(底) 9.0	外：格子目タタキ→回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	灰	底部完存	内面に鉄分付着、底面に焼成後の穿孔あり
417	5901	須恵器	把手付 深皿	C地区 C17	SD162	(口) 47.2 (底) 30.0 (高) 12.2	外：回転ナデ→ケズリ→貼付ナデ(把手) 内：同心円・平行タタキ(底部)→回転ナデ	やや密	灰白、灰	口縁4/12 底部8/12	
418	7901	土師器	甕	C地区 C17	SD162	(口) 18.4 (頸) 16.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙 内：浅黄橙、にぶい黄橙	口縁6/12 頸部6/12	7世紀代、外面煤付着
419	8301	土師器	甕	C地区 C17	SD162	(口) 27.9	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙、暗灰	口縁2/12	内外面に黒変している部分あり
420	14004	土師器	甕	C地区 C18	SD162	(口) 25.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：橙、にぶい橙、にぶい褐、 内：にぶい黄橙	口縁1/12	
421	8902	土師器	杯G	C地区 D9	SE155	(口) 11.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	
422	13405	土師器	杯B	C地区 D9	SE155	(口) －	外：ナデ 内：二段放射状暗文	精密	外：にぶい赤褐 内：にぶい橙	口縁部片	
423	13805	土師器	皿A	C地区 D9	SE155	(口) 23.0	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや密	橙	口縁2/12	
424	8603	須恵器	杯A	C地区 D9	SE155	(口) 9.9 (高) 4.0	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	外：青灰 内：灰黄	口縁10/12	
425	8602	須恵器	杯B	C地区 D9	SE155	(口) 16.6 (高台) 11.9 (高) 5.5	外：回転ナデ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	密	灰	口縁10/12 高台完存	内面及び高台内面が研磨　黒色付着物 硯に使用か？
426	8502	須恵器	平瓶	C地区 D9	SE155	(口) 11.8 (体) 18.2 (高) 15.9	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ(口縁部) 内：回転ナデ	やや粗	灰白、灰	口縁6/12 体部完存	口縁は体部と水平になる 口縁部に意図的な打ち欠きあり
427	8501	須恵器	壺	C地区 D9	SE155	(口) 12.1 (高) 15.8	外：回転ナデ・カキメ 内：ナデ→回転ナデ	やや密	外：灰白、暗灰 内：灰、暗灰	口縁9/12	底部にヘラ記号「×」　外面に煤付着 口縁部に意図的な打ち欠きあり
428	8604	土師器	甕	C地区 D9	SE155	(口) 14.1	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙～褐 内：浅黄橙、黒	口縁3/12	内面に炭化物、外面に煤付着
429	8601	土師器	把手付鍋	C地区 D9	SE155	(口) 30.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	密	外：灰白、にぶい黄橙 内：灰黄	口縁6/12	外面に煤付着
430	14101	土師器	高杯A	C地区 C14	SD166	(口) 15.9	外：ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁2/12	
431	13202	土師器	高杯A	C地区 C14	SD166	(口) 15.0 (脚柱) 3.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	外面に煤付着
432	5003	土師器	高杯	C地区 C14	SD166	(脚柱) 3.3	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：灰白、浅黄橙 内：にぶい黄橙	脚柱12/12	古墳中期
433	8903	土師器	小形丸底壺	C地区 B10	SD172	(口) 10.3	外：オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐	口縁2/12	
434	8804	土師器	壺	C地区 C11	SD172	(体) 12.0	外：ハケメ→ナデ→ミガキ 内：板ナデ	やや密	灰黄褐、褐灰、黄灰	体部6/12	外面が一部黒変
435	14001	土師器	台付甕	C地区 C14	SD166	(口) 14.8 (頸) 12.3	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁3/12 頸部3/12	外面に煤付着
436	13905	土師器	台付甕	C地区 C14	SD166	(口) 14.0 (頸) 12.0	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・板ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐	口縁1/12 頸部3/12	外面に煤付着
437	5002	土師器	台付甕	C地区 C14	SD166	(口) 12.8 (頸) 10.8	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12 頸部2/12	
438	8905	土師器	台付甕	C地区 C14	SD172	(脚台) 8.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙、にぶい黄橙	脚台11/12	外面体部に煤付着　外面脚部は赤変
439	8703	土師器	甕	C地区 B12	SD166	(口) 20.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	やや密	にぶい黄橙	口縁1/12	外面に煤付着
440	13302	土師器	壺	C地区 C16	SD166	(底) 8.1	外：剥離 内：剥離	やや粗	外：浅黄橙 内：灰白	底部9/12	

第13表　堀田遺跡(第６次)出土遺物観察表(11)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
441	8801	須恵器	杯蓋	C地区 C11	S D172	(口) 13.8 (高) 4.5	外：回転ナデ→ヘラ切り 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰白、灰	口縁12/12	
442	14002	土師器	甕	C地区 C14	S D166	(口) 14.8 (頸) 13.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/12 頸部1/12	
443	8705	土師器	甕	C地区 C15	S D166	(口) 23.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	外面に煤付着
444	13802	土師器	皿A	C地区 C10	S D160	(口) －	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや密	橙	口縁1/12	
445	14302	土師器	台付甕	C地区 C14	S D161	(口) 13.4	外：ハケメ→ヨコナデ→頸部にヘラアタリ 内：オサエ・板ナデ→ヨコナデ	やや粗	外：浅黄橙 内：灰黄	口縁1/12	外面に煤付着
446	8803	須恵器	はそう	C地区 C16	S D167	(頸) 2.5	外：回転ナデ→縦突文・回転ケズリ→貼付ナデ(口口) 内：ナデ	やや密	灰白、黄灰	体部完存	外面に白熱輪
447	13804	土師器	杯A	C地区 C15	S D161	(口)約15.0	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ→放射状暗文	やや密	にぶい橙	口縁1/12	
448	8802	須恵器	杯A	C地区 B11	S D171	(口) 12.4	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	外：灰 内：灰白	口縁3/12	
449	13603	土師器	甑	C地区	S D161	(体) 22.7	外：ハケメ 内：ハケメ→ケズリ→把手挿入	やや密	外：浅黄橙 内：褐灰	体部片	
450	8701	土師器	壺	C地区	S D178	(口) 16.1	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙 内：灰黄	口縁2/12	短頸壺 異質
451	13801	土師器	杯G	C地区	排水溝	(口) 12.0 (高) 4.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
452	13404	土師器	杯C	C地区	表土	(口) 16.0 (高) 3.0	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ→放射状暗文	密	橙	口縁1/12	
453	7004	土師器	杯A	C地区	排水溝	(口) 19.2	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内：ナデ→ヨコナデ→二段斜放射状暗文	密	橙、にぶい橙	口縁1/12	白色胎土
454	13401	土師器	杯B	C地区	排水溝	(高台)10.4	外：貼付ヨコナデ 内：ナデ→螺旋状暗文	やや密	外：橙 内：にぶい褐	高台4/12	内面に煤付着
455	9205	須恵器	杯蓋	C地区 B12	包含層	(口) 11.8 (高) 2.75	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	やや粗	灰	口縁6/12	
456	9805	須恵器	杯B	C地区	表土	(口) 14.4 (高台)10.0 (高) 3.8	外：回転ナデ→回転ケズリ→貼付ヨコナデ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	灰	口縁1/12 高台4/12	
457	9802	須恵器	高杯	C地区	排水溝	(口) 17.5	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ→ナデ	やや密	黄灰	口縁3/12	光鹿須恵産？
458	7801	土師器	甕	C地区	表土	(口) 20.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：灰白 内：にぶい黄橙	口縁1/12	
459	11403	瓦	平瓦	C地区	表土	(厚) 2.4	凹：右口板 凸：格子口叩き口板→ケズリ・ナデ	粗	浅黄橙	端部片	
460	13704	陶器	椀	C地区C 17	包含層	(高台) 5.2	外：ロクロナデ→糸切り→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰白	高台完存	山茶椀 鹿投・瀬戸
461	13703	陶器	椀	C地区 C18	包含層	(高台) 6.9	外：ロクロナデ→糸切り→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰白	高台4/12	山茶椀 渥美
462	13702	陶器	椀	C地区	表土	(高台) 7.8	外：ロクロナデ→糸切り→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰白	高台4/12	山茶椀 鹿投・瀬戸
463	13604	土師器	羽釜	C地区	表土	(口) －	外：ハケメ→貼付ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁1/12	南伊勢系 外面に煤付着

第14表　堀田遺跡(第６次)出土遺物観察表(12)

番号	実測番号	種　類	グリッド	遺構・層名等	法　量(cm)	調整・技法の特徴等
464	008-01	槽	C地区 B 3	SD168 W. 1	長　32.3 幅　15.8 高　5.8	底部に脚を削り出す。抉り部分は欠損ではなく意図的なもの
465	019-01	槽	C地区 C12	SD168 №8	長　52.0 高　5.0 厚　2.0	
466	019-02	盤	C地区 C 2	SD168	長　48.0 高　2.5 厚　1.3	底部長辺に二孔一組の穿孔が4カ所あり
467	024-01	曲物蓋	C地区 B 4	SD168 W. 1	最大径　42.0 厚　2.5	
468	007-01	案	C地区 B 4	SD168 №11	長　30.6 幅　14.5 厚　1.8	板材の一辺に台形状の抉りが入る
469	018-02	糸巻具	C地区 B 7	SD168	残存長 20.6 幅　2.6 厚　1.1	穿孔近くは凹状
470	017-01	糸巻具	C地区 C 3	SD168	残存長 35.0 幅　5.6 厚　1.5	穿孔近くは凹状
471	015-04	有頭棒	C地区 C 2	SD168 W. 1	残存長 37.9 幅　3.4 厚　1.7	全面を削る
472	015-03	有頭棒	C地区 C 2	SD168 W. 2	残存長 33.8 幅　5.9 厚　3.6	全面を削る
473	011-03	有頭棒	C地区 D14	SD168 W. 2	残存長 85.8 幅　4.2 厚　2.2	先端が出ホゾ状になる。一部炭化
474	014-02	先尖棒	C地区 C 2	SD168 W. 8	残存長 61.6 幅　4.0 厚　2.0	ほぼ完存、先端を削る
475	014-04	先尖棒	C地区 C 2	SD168 W. 3	残存長 66.0 幅　3.3 厚　1.7	板状に加工し、先端を削る。二孔一組の穿孔が2カ所あり、端部近くに当たり痕あり
476	014-03	先尖棒	C地区 C 2	SD168 W. 9	残存長 67.1 幅　4.0 厚　2.8	板状に加工し、先端を削る。所々径1mmほどの孔あり
477	014-05	先尖棒	C地区 C 2	SD168 W. 7	残存長 41.7 幅　3.3 厚　1.9	先端を削る。当たり痕あり
478	014-07	先尖棒	C地区 C 2	SD168 W.11	残存長 23.7 幅　3.4 厚　1.5	先端を削る
479	014-01	棒材	C地区 C 2	SD168 W. 5	残存長101.1 幅　3.5 厚　1.5	ほぼ完存、板状に加工し、端部を加工
480	011-08	棒材	C地区 B 6	SD168	残存長 74.7 最大径　2.7	先端を削る、以外は樹皮残る。自然木加工
481	013-03	棒材	C地区 B 3	SD168	残存長 70.7 最大径　3.5	端部欠損。自然木加工
482	018-03	棒材	C地区 A 4	SD168	残存長 27.2 幅　2.8 厚　1.1	端部欠損、板状に加工
483	014-06	棒材	C地区 C 2	SD168 W. 6	残存長 32.9 最大径　2.0	端部近くにひもずれのような痕跡あり。樹皮一部残る
484	011-04	抉付棒	C地区 A 5	SD168	残存長 80.3 最大径　4.6	端部欠損、３カ所に削りが入る。自然木加工
485	015-05	抉付棒	C地区 C 2	SD168 W.10	残存長 46.7 幅　3.7 厚　2.6	端部を三角形の出ホゾ状に加工
486	015-02	抉付板	C地区 C 2	SD168 W. 4	残存長 43.5 幅　8.2 厚　2.1	板状に加工、端部を弧状に抉る、工具痕あり

第15表　堀田遺跡(第６次)出土木製品観察表(１)

番号	実測番号	種　類	グリッド	遺構・層名等	法　量(cm)	調整・技法の特徴等
487	011-05	板材	C地区 C 1	SD168 W.2	残存長 37.6 幅 9.7 厚 3.2	両端欠損
488	011-06	板材	C地区 C 1	SD168 W.4	長 26.7 幅 5.1 厚 1.0	端部欠損、板状に加工
489	015-01	板材	C地区 C 2	SD168 W.12	残存長 62.8 幅 7.6 厚 3.8	
490	012-02	板材	C地区 C 3	SD168	残存長 59.5 幅 6.0 厚 2.0	板状に加工し、端部に抉り状の窪みあり
491	022-02	管状木製品	C地区 D16	SD168 №1	残存長 13.0 幅 5.0 厚 1.2	刳り抜き材
492	022-01	柄付板	C地区 D15	SD168	残存長 35.7 厚 2.3	劣化大
493	011-02	先尖板	C地区 D14	SD168 W.3	残存長107.7 幅 18.0 厚 3.4	板状に加工し、先端を三角に削る
494	013-02	先尖板	C地区 B 8	SD168 №1	残存長 79.9 幅 8.2 厚 1.8	板状に加工し、先端を三角に削る
495	017-02	先尖板	C地区 B 7	SD168	残存長 41.0 幅 10.5 厚 1.5	板状に加工し、先端を三角に削る
496	012-05	丸杭	C地区 C 1	SD168	残存長 61.1 最大径 2.8	曲がった木を使用、先端を削る、以外樹皮残る。自然木加工
497	011-07	丸杭	C地区 B 6	SD168	残存長 54.0 最大径 3.2	先端を削る、以外は樹皮残る。自然木加工
498	012-03	丸杭	C地区 B 4	SD168	残存長 59.2 最大径 4.0	先端を削る。自然木加工
499	012-04	板杭	C地区 B 4	SD168 №8	残存長 47.3 最大径 5.0	先端を削る。板材加工
500	011-01	板杭	C地区 B 4	SD168 №6	残存長116.0 幅 4.0 厚 3.0	断面方形。先端を削る。板材加工
501	016-01	下駄	A地区 A11	SD96 №15	長 25.0 幅 12.8 高 3.4	右足用、指の痕跡明瞭。一木作り
502	002-03	板材	A地区 B 4	SD85 杭1	残存長 44.0 残存幅 17.6 厚 9.0	端部に切断痕
503	005-01	板杭	A地区 B 4	SD85 杭13	残存長 26.7 幅 5.1	断面方形。先端を削る。割材加工
504	004-01	板杭	A地区 B 4	SD85 杭4	残存長 39.5 幅 5.1	断面方形。先端を削る。割材加工
505	006-01	板杭	A地区 B 4	SD85 杭2	残存長 65.1 幅 6.6	断面方形。先端を削る。割材加工
506	006-02	板杭	A地区 B 4	SD85 杭10	残存長 48.8 幅 7.4	断面方形。先端を削る。割材加工
507	002-04	板杭	A地区 B 4	SD85 杭8	残存長 63.7 残存幅 8.0 厚 3.0	先端・側面を削る、調整痕明瞭。板材加工
508	002-05	板杭	A地区 B 5	SD85 杭12	残存長 64.0 残存幅 4.8 厚 2.8	先端・側面を削る、調整痕明瞭。板材加工
509	004-02	丸杭	A地区 B 3	Pit 1 杭	残存長 35.3 最大径 4.0	先端を削る、以外は樹皮残る。自然木加工

第16表　堀田遺跡(第６次)出土木製品観察表(２)

Ⅴ　小谷Ａ遺跡の調査

1　調査区の層位と遺構

小谷Ａ遺跡は天花寺丘陵北裾部に位置する遺跡で、調査前の標高は約14ｍである。

範囲確認調査では、灰黄色シルト（第５層）上で黒褐色の溝状の遺構を確認していたが、調査の結果ほとんど深さの無いものであり、遺構ではないものとした。調査は第４層の黒褐色シルトを包含層と考えて調査を行ったが、明確な遺構は確認できなかった。一部ピット状の落ち込みを確認したが、遺物も無く遺構とは断定できなかった。調査区が砂混じりの土層であり、旧流路であったと考えられる。

当初、北側の高まりが土塁の可能性があると判断したため、断ち割りを行ったが、自然のものと判断した。国鉄（現在のＪＲ）名松線建設時に北側は削平され、南側も道路建設などに際し削平されており、残存した地形と思われる。

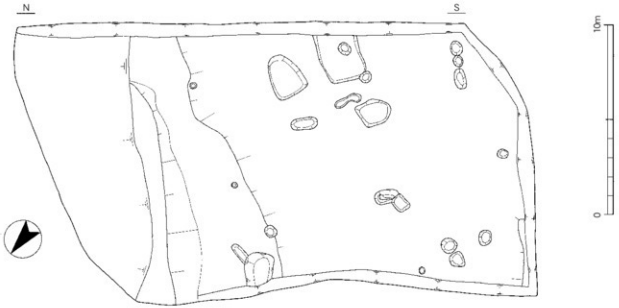
2　出土遺物

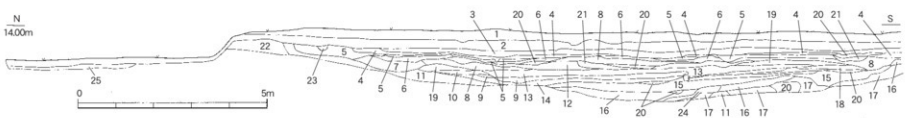
この調査区から出土した遺物のうち、図示可能なのはわずかに１点である（第34図）。これ以外では、他にサヌカイトの剥片が数点出土しているが、いずれも明確な調整などは観察できない。これらの石器剥片は、丘陵部からの流失遺物と思われる。

１は、縄文時代晩期に属すると思われる深鉢の破片である。口縁部に素文の突帯が二段めぐる。胎土は粗い。

（水谷）

第34図　小谷Ａ遺跡出土遺物実測図（1：4）





1 表土
2 暗黄灰色砂質土 2.5Y5/2
3 黄灰色シルト 2.5Y4/1
4 黒褐色シルト（有機物多く含） 10YR3/1
5 灰黄色シルト 2.5Y7/2
6 灰黄色粗砂ににぶい黄橙色細砂混じり 10YR7/2・2.5Y6/2
7 黄灰色シルト（鉄分沈着） 2.5Y6/1
8 黄灰色粗砂混じりシルト 2.5Y6/1
9 灰青色シルトと粗砂の互層 2.5Y6/2
10 灰色粘土（流木有） 5Y5/1
11 褐灰色粘土 10YR6/1
12 灰黄色粗砂・小石混じり砂質土 2.5Y6/2
13 黒色腐植土
14 黒色腐植土
15 オリーブ灰色粗砂多く混じる粘土 5GY
16 暗オリーブ灰色シルト 2.5GY
17 黒色腐植土
18 粗砂と有機物層の互層
19 粗砂と黄灰色シルトの互層（粗砂多い） 2.5Y6/1
20 粗砂
21 粗砂混じりシルト
22 にぶい黄色粘土質土 2.5Y6/3
23 褐灰色シルト（22のブロック含） 10YR4/1
24 16に粗砂が多く混じる
25 礫層

第35図 小谷A遺跡遺構平面（1：200）・土層断面図（1：100）

Ⅵ　調査のまとめと検討

堀田遺跡第６次調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を確認することができた。なかでも、古墳時代前期と飛鳥～奈良時代の遺構・遺物が最も充実した内容であった。この状況は、既に報告している堀田遺跡第３～５次調査[1]の状況とほぼ同じである。

ここでは、第３～５次調査の成果をも踏まえながら、第６次調査の成果をまとめておく。

１　堀田遺跡の地形状況

堀田遺跡は、中村川下流左岸に位置する。ここは、中村川が本流の雲出川に合流する１kmほど手前にあたり、標高は約10mほどの低地部である。今回の調査地は、国土地理院[2]の区分では低位段丘面、高橋学氏の区分では「沖積平野Ⅰ下位面」[3]とされている地点である。

当遺跡周辺は、現在では圃場整備事業が完了しているため、かつての地割を見ることはできない。25年ほど前に仲見秀雄氏が行った分析では、堀田遺跡の北西にあたる一志町片野付近に広がる田地には、N９～10°Wを主軸とした条里型地割が展開している[4]。圃場整備前の地形図（第36図）を見ると、堀田遺跡の東側には、条里型地割とは異なった真北方位の地割と、旧河道と思しき地割が確認できる。堀田遺跡第３～５次調査で確認された旧河道（ＳＤ８・ＳＲ41）は、この旧河道地割とも対応したもので、その起源が古墳時代前期頃にまで遡ることが確認できた。

第６次調査で確認された流路ＳＤ168は、このＳＲ41と接続する一連の流路である。出土遺物からは、古墳時代前期後半に導排水路として機能していたものが、奈良時代前半頃には水路としての機能はほぼ廃絶して落ち込み状を呈し、土器等の廃棄場として利用されていたと考えられる。

天花寺丘陵に近い第４・５次調査区では、奈良時代頃の建物跡が確認されている。第６次調査区では、奈良時代頃の井戸があるものの、建物遺構は確認されなかった。第６次調査区は、第４・５次調査区よりも地形的に低くなる場所であり、居住地としては用いられなかったといえる。

２　古墳時代前期の状況

ａ　河道と導排水路

古墳時代前期の河道としては、ＳＤ168がある。また、これに接続する溝には、ＳＤ166などがある。ＳＤ168に接続するこれらの溝は、第４次調査区で確認されたＳＤ42のように河道の支線として機能していた可能性がある。しかし、第４次調査区ＳＤ41で確認されたような杭列が見られず、導水路というよりは排水路と考えるのが妥当であろう。

ｂ　出土遺物

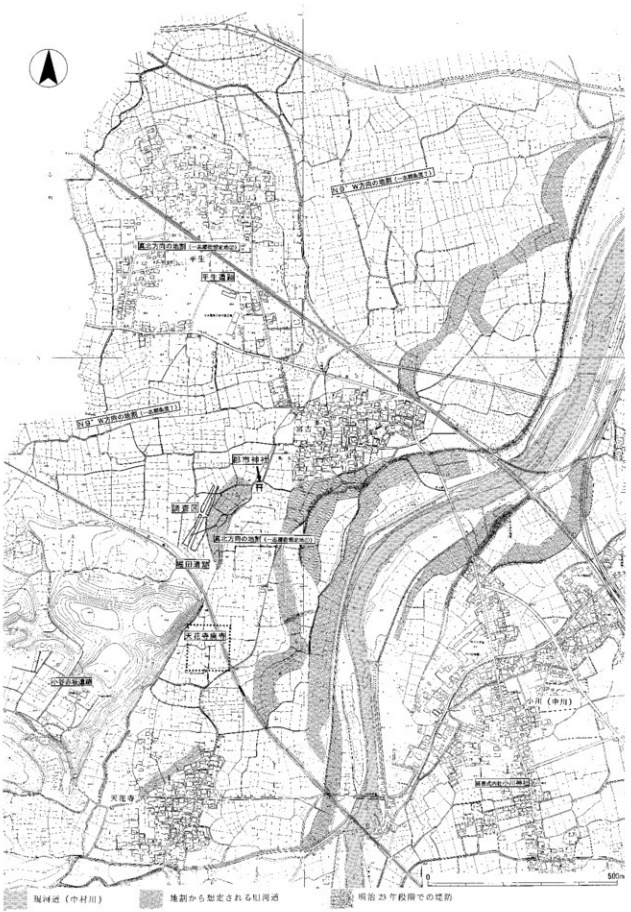
古墳時代前期の出土遺物は、土器類が中心である。ＳＤ168からは木製品も数点出土しているが、これらは古墳時代前期と確定できない。

古墳時代前期の土器は、とくに前期後半を中心としたものである。この状況は、第３・４次調査区と同じである。第３～６次調査区を通じ、堀田遺跡出土の古墳時代前期後半の土器類は、流路出土土器が中心とはいえ、この地域の標識的な資料といえるものである[5]。

今回出土した土器類のなかで特長といえるのが、被熱し、煤の付着した壺や高杯が多数見られることである。とくに高杯は、脚柱部や杯部内面にタール状の炭化物が付着したものが10点ほど確認できる。これらは通常の使用というよりは、何らかの儀式で用いられた可能性が高い。

これと同様な炭化物が付着した高杯は、城之越遺跡（三重県伊賀市）で多く確認されている[6]。城之越遺跡では、古墳時代前期後半頃の湧水点祭祀遺構が確認されており、遺跡の立地も堀田遺跡と類似する。堀田遺跡のどこかに、城之越遺跡と同様な湧水点祭祀遺構が存在している可能性も考えられる。

流路ＳＤ168から出土した木製品には、槽や盤などのほか、案（椅子）や糸巻具といったものがある。木製品は第３・４次調査区からもかなり出土しており、総合的な分析が必要である。これらは、時期的



第36図　堀田遺跡周辺の旧河道を中心とした旧地形（1：10,000）（箱野町都市計画平面図(1976)を合成）

には古墳時代前期後半から後期にかけてのものと考えられるが、厳密な時期は特定できない。

3　古代の遺構・遺物

a　遺構と遺物の傾向

第６次調査で確認された古代の遺構には、井戸・流路（土層）などがある。前述のように居住地周縁部に相当すると考えられる。

しかし、出土遺物は膨大で、とくに土師器には秀麗な暗文の施されたものが多い。時期的には、都城編年[7]の飛鳥Ⅳ～平城Ⅲにかけてのものが中心で、実年代としては、７世紀後葉から８世紀前半頃に相当するものである。

第３～５次調査の報告書で指摘したように、この調査区東隣には真北方位となる地割や郡市神社跡地がある。真北方位を主軸とする地割は、堀田遺跡北方に広がる平生遺跡付近にも展開している（第36図）。当調査区近隣に見られるこの２箇所は、当該時期の一志郡衙そのものか、あるいはそれに関する重要施設が置かれていたものと推察する。

b　土馬

第６次調査区から出土した興味深い遺物に、土馬がある。土馬は、堀田遺跡では第３次調査に続いて２例目となる。

この土馬の特長は、頭部が中空になっている点である。おそらくこの頭部を、中実の胴部に接続したのであろう。内面にはシボリメが残り、高杯の脚柱を成形するのと同じ手法である。素地の状況も、暗文土師器の精製品と酷似する。

頭部中空の土馬は、三重県内では確認例が無い。県外に類例を求めても、おそらくほとんど無いものと思われる。この土馬は、成形方法から読み取れるように、土器製作に直接携わっている人物が作成したものと考えられる。　（伊藤）

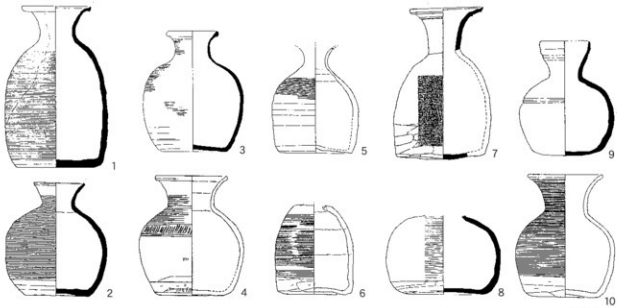
c　須恵器

堀田遺跡（第６次調査）出土須恵器は、概ね５世紀末から８世紀前半にわたる時期のものである。これらの須恵器のなかには、特異な器形をもつものや、生産地が推測されるものを含んでいる。そのため、そのことについて簡単に触れておくことにする。

特異な須恵器　堀田遺跡ＳＤ168出土の須恵器平底壺（216）は、６・７世紀の製品としては底部が平底である点、須恵器の一般的な組成のなかには無い非常に特異な器形である。このような平底壺は、頭部が細く全体として徳利の形に似るものが多く、一般には百済土器の系譜を引くものと理解されている。平底壺の出土例は、概ね古墳や祭祀遺跡などに限られ、地域的にも、北関東地域・伊勢湾西岸地域・滋賀県湖東地域・福井県若狭湾周辺地域・石川県南部地域・奈良県奈良盆地南部地域・大阪府南河内地域・愛媛県・福岡県などに偏って分布している傾向にある。なお、第37図は三重県出土の平底壺を、第38図は近畿地方及びその周辺地域出土の平底壺を掲載したものである[8]。

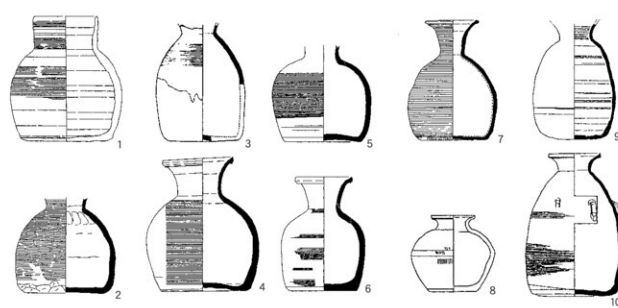
堀田遺跡出土の平底壺は、球形に近い胴部をもつものであり、胴部最大径は底部を大きく上回る。このような胴部の形態は滋賀県大津市春日山Ｇ－５号墳・三重県安芸郡安濃町中大谷13号墳・三重県津市大山田Ａ31（旧Ａ54）号墳出土品などに似ている。しかし、堀田遺跡出土の平底壺は、一般的な平底壺に比べ、胴部最大径に対し頸部径が若干大きいものであり、法量や細部形態・文様などのようすも含め全く同じものは確認できない。また、このことに加え、この製品は、生焼けであるものの胎土など肉眼で観る限り、在地で生産されたものと推測される。この平底壺が出土したＳＤ168からは赤色顔料（ベンガラ）が塗布された須恵器杯Ｈ身（212）や杯Ｇ身（226）・土師器把付鉢（196）が出土している。なかでも須恵器杯Ｈ身の体部には赤色顔料により「＋」と描かれており、ＳＤ168は祭祀との関わりの強さが窺える。このような遺構から特異な器形である平底壺が出土していることや、さらに生焼けであるにもかかわらず製品として運ばれていることはこの平底壺の性格を考えるうえで重要である。

平底壺は、現在のところ、わが国最大の須恵器生産地であった大阪府南部窯跡群からの出土例が確認されておらず、各地で出土する平底壺の形態・調整・胎土などを観る限り、堀田遺跡の製品と同じようにそれぞれの地域で生産されているものと考えられる。また、近畿地方に分布する平底壺をみると、胴長の



1 安芸郡安濃町大塚Ｃ－１号墳　2 安芸郡安濃町中大谷13号墳
3 津市大山田Ａ31号墳　4 松阪市堀田遺跡（第６次調査）　5 松阪市小谷10号墳埋葬施設１　6 松阪市小谷11号墳埋葬施設２　7 度会郡玉城町原下り藤　8 松阪市常光坊谷２号墳　9 伊賀市奥弁天４号墳
10 伊賀市天童山８号墳（小石室）

第37図　三重県出土の須恵器平底壷（1：6）



1 石川県小松市林タカヤマ窯跡　2 石川県小松市蓑輪塚古墳　3 福井県三方郡三方町きよしの３号墳　4 滋賀県大津市春日山Ｇ－５号墳　5 滋賀県犬上郡甲良町塚原２号墳　6 滋賀県犬上郡甲良町塚原１号墳　7 京都府城陽市黒土１号墳　8 奈良県御所市石光山43号墳　9 奈良県橿原市新沢千塚160号墳　10 大阪府南河内郡河南町神山丑神遺跡第６号墳

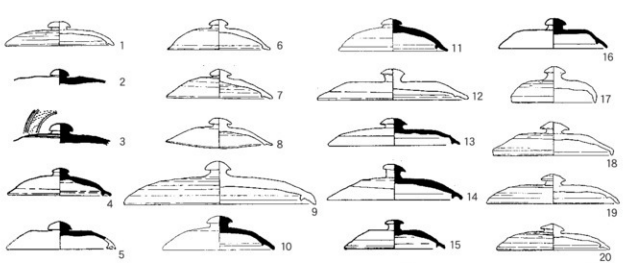
第38図　近畿地方およびその周辺地域出土の須恵器平底壷（1：6）

もの・球形に近いもの・球形に近く肩が強く張るものなどに大きく形態を分類できるものの、同時期のものであっても、法量・形態・調整などにおけるバラツキは著しい。底部が平底であることを大前提とするものの、全く同じ形態のものはほとんど認め難い。このような形態・調整などのバラツキは、何を意味しているのか現段階で答えることは困難であるけれども、消費側の注文に応じて生産側がその都度製作していた結果生じた形態差であると考えている。つまり、平底壺は古墳や祭祀遺跡などの特別な場のために特別注文によって製作された製品であると推測される[9]。

須恵器の生産地　堀田遺跡から出土する須恵器は、形態・調整・胎土などから在地産と考えられるものと、愛知県猿投山西南麓窯跡群・尾北窯跡群をはじめとする尾張地域のものとの大きく2地域にわたる生産地の製品の存在が推測される。しかし、大部分の製品の生産地を特定することは、現段階では困難であり、在地産と考えられるものであっても、三重県内で確認されている須恵器生産地との関係はほとんど判らない。

このような状況のなかにあって、SD162出土の須恵器杯G蓋（408）は旧郡の庵芸郡に所在する須恵器窯の製品の可能性が高い。この庵芸郡における須恵器生産は三重県下でも大規模な窯跡群の一つである徳居窯跡群が中心的な位置を占めている。

さて、SD162出土の須恵器杯G蓋はつまみの形状に特色があり、その形態はつまみ天井部が丸く半円形に近い。そして全体の形態としてキノコの形を呈している。このような製品は、一般的なつまみにはほとんど例をみないものである。そして、現在のところ、大阪府南部窯跡群をはじめとし近隣の窯跡では確認されておらず、出土量は少ないものの徳居窯跡群において確認できる[10]。また、徳居窯跡群に近接し、同じ旧庵芸郡に属する稲生窯跡群においてもキノコ形に近似するつまみをもつ製品が少数量認められる。キノコ形つまみ付き蓋は、徳居窯跡群で生産された製品を遠別・集積したと考えられる鈴鹿市西高山D遺跡をはじめとし同窯跡群周辺の7世紀代の遺跡で数多く確認できる。これらのことからこの製品は、徳居窯跡群を中心とする旧庵芸郡の須恵器窯における7世紀代の特色の一つとして捉えることが充分可能であろう。このことから堀田遺跡出土の杯Gは、胎土のようすも含め旧庵芸郡の窯の製品である可能性が高い。キノコ形つまみ付き蓋は、鈴鹿市北野古墳・同市西高山遺跡・同市天王遺跡（第2次）・安芸郡河芸町西毛谷北古墳・安芸郡安濃町平田20号墳・同町北浦1号墳・松阪市平生遺跡・同市堀



1 堀田遺跡（第6次調査）　2 徳居35号窯跡　3・4 西高山D遺跡
5 西高山遺跡　6～9 西毛谷北古墳　10・11 北野古墳　12 天王遺跡（第2次調査）　13・14 平田20号墳
15 清水谷遺跡　16 平生遺跡　17～19 堀田遺跡（第3次調査）　20 堀田遺跡（第5次調査）

第39図　キノコ形のつまみをもつ須恵器杯蓋（1：4）

田遺跡（第３～４次調査）・同市清水谷遺跡など鈴鹿川流域から雲出川流域にかけての地域で認められる（第39図）[11]。

このような三重県内の須恵器生産地の製品に対し、堀田遺跡ＳＤ138出土の須恵器皿Ａ（84）、SD151出土の須恵器杯Ｇ（341）・杯Ａ（359）・高杯（371）・瓶あるいは壺（374）、ＳＤ161出土の須恵器蓋（446）などは、形態・調整・胎土などから愛知県猿投山西南麓窯跡群・尾北窯跡群をはじめとする７世紀後半～８世紀前半にかけての尾張地域の製品と極めて似ており、同地域の製品である可能性が高い。また、この他にも、同地域の製品と近似するものが多数存在している。

堀田遺跡出土須恵器については、その大部分の製品の産地を特定することは困難であるものの、７世紀代には徳居窯跡群をはじめとする旧庵芸郡の製品と推測されるものが認められる。そして、7世紀後半から8世紀前半にかけて尾張地域の製品が比較的多く認められる傾向にある。

このように８世紀頃、尾張地域の製品が多く認められる傾向は、伊勢湾西岸地域の須恵器生産を考えるうえでも見落とせないものである。一部の窯跡を除いて、８世紀にはいると、伊勢湾西岸地域における須恵器生産は衰退していく傾向にあり、なかでも大規模な窯跡群である徳居窯跡群・外城田窯跡群の衰退は無視できない。徳居窯跡群は、近隣に庵芸郡衙が成立する８世紀頃、その操業の規模を縮小していく。また伊勢湾西岸の南部地域にあたる斎宮跡などでは、８世紀中頃、在地産の須恵器に取って代わるように岐阜県各務原市美濃須衛窯跡群をはじめとする他地域の製品が増え[12]、それと連動して近隣の外城田窯跡群は衰退していくという傾向が認められる[13]。

堀田遺跡は、一志郡衙との関わりが指摘されている遺跡であり、８世紀頃、尾張地域の製品が多く認められる傾向は注目できる。現在のところ、官衙と在地の須恵器生産の衰退を直接結びつけることは困難であるけれども、このように官衙施設などにおいて他地域の須恵器を採用する傾向にあることは在地の須恵器生産の衰退を考えるうえで重要である。

堀田遺跡の須恵器は、在地における須恵器生産の衰退後のようすを知るうえでたいへん注目できるものである。（淺生）

d　線刻文字

第６次調査区から出土した須恵器鉢には、焼成前の段階で線刻された文字が刻まれているものがあった。この文字は、上に「田」の字状の部位、下に「辰」の字状の部位が見られることから、「畏」ではないかと判断した。「畏」は「かしこみ」に通じる文字であり、何らかの神聖な意味を込めたものと考えられる（第40図）。

なお、第３次調査区からも同字と考えられる文字が刻まれた須恵器が出土している（第41図）。当遺跡で複数個体の同一文字が確認されたことから、この須恵器は、当地へと搬入されることが当初よりの目的であった可能性が高い。つまり、何らかの神聖な意味を込めた土器が窯元に発注され、当地へと運ば

第40図　堀田遺跡第６次調査出土須恵器の刻書（384）

第41図　堀田遺跡第３次調査出土須恵器の刻書（270）

れたと考えられるのである。その意味については明確にはできないが、堀田遺跡が一志郡衙関連遺跡であることに関するものと見るのが妥当であろう。

なお、当遺跡では第３次調査区を中心に、土師器杯類に「伊」や「木□(屋か)」などと書かれた線刻文字・記号の見られるものが４点ほどある。これに対し、墨書土器は少ない。この意味するところは不明とせざるを得ないが、注目点として採り挙げておく。

おわりに

以上、第６次調査区の状況を中心にまとめてきた。堀田遺跡第６次調査区は、遺構は溝や流路が中心で住居跡は見られない区域であったが、出土遺物は豊富であった。とくに古墳時代前期後半と古代の遺物は、当地の特長を示してあまりあるものがある。地域史を描き、地元などに還元していくうえでも、極めて重要な遺跡であることが改めて確認できたと考える。

（伊藤）

＜註＞

(1)三重県埋蔵文化財センター『堀田第３～５次調査』(2002年)

(2)国土地理院発行『土地条件図』松阪(1969年)

(3)高橋学「先史・古代における雲出川下流域平野の地形環境」(『人文地理』31－2 1979年)

(4)仲見秀雄「一志郡の条里制」(『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版 1979年)

(5)堀田遺跡出土の当該土器をもって、「堀田式」が設定できるものと考える(伊藤「伊勢における古墳時代前期後半の土師器に関する覚書」(『研究紀要』第14号 三重県埋蔵文化財センター 2005年)

(6)三重県埋蔵文化財センター『域之越遺跡』(1992年)

(7)飛鳥・藤原・平城・平安の各京による編年を総称して「都城編年」と呼称しておく。都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器１ 都城の土器集成』(1992年)を参照した。

(8)第37図は次の文献から作成した。なお、三重県埋蔵文化財センターが所蔵する平底壺については遺物の報告書番号も記すことにする。淺生悦生・田中秀和『安濃町史』第一編考古編(安濃町史編纂委員会、1994年、第149図19番)。安濃町教育委員会『中大谷一三・一六号墳発掘調査報告』(1988年)。松阪市教育委員会『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』(松阪市教育委員会、1990年)。東京国立博物館『東京国立博物館所蔵須恵器集成Ⅰ(近畿編)』(東京国立博物館、1994年)。小玉道明「長谷山古墳群大山田支群」(『伊勢湾西岸考古資料』、伊勢湾西岸考古資料編集会、1993年、第５図１番)。阿山町教育委員会『奥弁天四号墳・原六谷一号墳』(1989年)。三重県埋蔵文化財センター『堀田第６次調査』(2005年、第19図216番)。大川操ほか『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』(三重県埋蔵文化財センター、2005年、第44図290番・第51図342番)。三重県埋蔵文化財センター『天童山古墳群-現地説明会資料-』(2003年)。

(9)須恵器平底壺については著者が2000年度花園大学卒業論文のなかで、全国の平底壺を集成して検討を加えた。この論文は公表されていないけれども、その内容の一部を修正し簡単に記した。淺生卓司『古墳時代後期の葬送習俗と地域間交流』(花園大学文学部史学科卒業論文、2000年)。

(10)淺生卓司「徳居窯址群の須恵器生産」(『Mie history』vol.14、三重歴史文化研究会、2003年)

(11)第39図は次の文献から作成した。淺生卓司「徳居窯址群の須恵器生産」(『Mie history』vol.14、三重歴史文化研究会、2003年)。鈴鹿市遺跡調査会『西高山遺跡発掘調査概要』(1976年)。米山浩之「地下に眠る遺跡」(『河芸町史』資料編上巻、河芸町、2000年)。安濃町遺跡調査会『平田古墳群』(1987年)。鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会「北野古墳」(『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』1978年)。嬉野町教育委員会『清水谷遺跡発掘調査報告』(1999年)。平生遺跡調査団『平生遺跡発掘調査報告』(1976年)。三重県埋蔵文化財センター『堀田(第3～5次調査)』(2002年)。鈴鹿市教育委員会「天王遺跡(第2次)発掘調査報告」(『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』1997年)。

(12)上村安生「考古資料からみた『続日本紀』天平二年七月癸亥条について」(『斎宮歴史博物館研究紀要』九、斎宮歴史博物館、2000年)。斎宮歴史博物館編「記念シンポジウム 斎宮の土器・みやこの土器」(『斎宮歴史博物館研究紀要』十、斎宮歴史博物館、2001年)。

(13)斎宮編年のⅠ期第2段階(斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ、2001年)および奈良時代前期(1984年編年)の基準資料として用いられているＳＫ5102・ＳＥ1800・ＳＤ0170出土須恵器のなかには、外城田窯址群内の市寄窯跡群の製品と類似するものが多く認められる。これらの製品を比較するために並べてみても、法量および形態・調整・胎土などに矛盾を感じない。そのため、８世紀前半頃の斎宮出土須恵器には外城田窯跡群の製品が含まれているとみて大きな間違いはあるまい。

Ⅶ　総　括　－堀田遺跡第３～６次調査－

はじめに

三重県主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備事業を契機とした堀田遺跡の発掘調査は、1995年度の第３次調査を皮切りに、2002年度の第６次調査まで、あしかけ７年間を費やして実施された。当該事業にかかる堀田遺跡の発掘調査総面積は約6,000㎡に及ぶ。広大な面積を占める当遺跡のなかで、6,000㎡という面積は微々たるものであるが、それでも、当遺跡のみならず、旧一志郡・伊勢国の歴史を考える上で、極めて重要な成果が挙がったものと認識する。

ここでは、第３～６次調査で判明したことや、新たに究明が必要となったことなどを記し、今後の調査研究ならびに普及・公開に備えたい。

１　縄文時代

縄文時代では、晩期を中心とした土器類が出土している。晩期以外の時期のものは見られない。晩期の土器は、量的には多くはないものの調査区全域から出土している。低地の縄文時代晩期を考えるうえでは貴重な資料といえる。

近隣では、堀田遺跡南部の天花寺丘陵に所在する小谷赤坂遺跡で、当該時期の土器棺墓が検出されている[1]。また、天花寺丘陵東麓の天花寺北瀬古遺跡[2]からも、当該時期の土器片は多い。当該時期の集落が、堀田遺跡調査区近隣の天花寺丘陵北～東麓域に広がっている可能性が考えられる。

２　弥生時代

弥生時代の遺物は、流路内から中期の土器が少量見つかっているのに止まる。これは、天花寺丘陵部に後期前半の大規模集落（小谷赤坂遺跡）が存在していることと対照的である。堀田遺跡は、この時期の直接的な生活域ではなかったものと考えられる。

後述のように、古墳時代前期の流路には導水施設が見られる。天花寺丘陵内の小谷赤坂遺跡や、堀田遺跡の北西約800ｍにある片野遺跡といった弥生集落の生産域が、堀田遺跡近隣に展開していた可能性もある。当該時期の生産域を考える作業も、今後必要である。

３　古墳時代

古墳時代前期になると、自然流路とともに、人工的な導排水路が見られる。流路内からは、前期前半から後半にかけての土器類が多数出土している。第６次調査区からは、不自然な被熱と炭化物が付着する壺・高杯が多く出土しており、当該期の祭祀的な空間が近隣に存在する可能性が高い。

流路内からは、底部穿孔二重口縁壺と初期朝顔形埴輪も出土している（第３・４次）。初期朝顔形埴輪は古墳時代前期後半に相当する時期のもので、伊勢地域内最古のものであるだけでなく、底部穿孔二重口縁壺と共伴することが確認された点も極めて意義深い。

また、流路には導水路が接続しており、そこからは陽物を象ったと考えられる木製品とともに、土器類が一括出土した（第４次）。この時期の流路は、祭祀空間であるとともに、周辺に形成されていたであろう水田域の水口としても機能していたものと考えられる。また、当遺跡出土土器は、伊勢の古墳時代前期後半を考える上での標識的な意味を持つまとまった資料である。

古墳時代中～後期にも流路は継続して機能している。流路内からは槽・案・紡績具などの木製品も出土している。木製品の時期は決めがたいものが多いが、出土資料の多くはこの時期のものと考えられる。

以上のような状況を勘案するならば、堀田遺跡近隣に、古墳時代前期後半頃の「豪族居館」が存在することも充分に想定できる。地形的に見れば、その可能性が最も高いのは調査区の東側にあたる自然堤防上である。ただし、城之越遺跡（三重県伊賀市比土、旧上野市比土）のように、狭隘な谷状地に大形建物が存在する例があることから、堀田遺跡南西部の天花寺丘陵北側山麓部も候補として考えるべきであろう。いずれにしても、この周辺部にはとくに注意が必要である。

4　古代

飛鳥・奈良時代の古代前半期は、古墳時代前期と並び、堀田遺跡を最も特長づける時期である。この時期は、古墳時代前期以来機能していた流路が埋没し、それを利用して大量の土器類が投棄されている。

出土遺物の豊かさが、当該事業にかかる発掘調査の最大の特色といえる。土師器類は畿内土師器が主体で、その精緻さと出土量は、当該期の三重県内でも格段に秀でている。また、須恵器には、徳居産・美濃須衛産・猿投産のものがあり、土師器でも濃尾型の長胴甕や、伊賀？の甕もある。一地域における古代の搬入土器については、未だ検討の深化が見られないが、この点からも当遺跡は注目できる。

出土遺物の中には、須恵器類を中心に、漆の付着したものが多数認められた。漆付着須恵器には、壺K、瓶、杯Aなどが見られる。杯Aは塗布用の器として、壺類は搬入用の容器として用いられたものであろう。これら手工業を中心とした遺物の出土も、古代の遺跡を評価するうえで重要である[3]。

調査区の東隣は、明治時代前半まで存在していた「郡市神社」の跡地である。この時期の堀田遺跡には、一志郡衙ないしは郡衙関連の重要施設が存在していたものと考えられる[4]。しかし、調査区内に限れば、遺構の内容は乏しく、掘立柱建物が２棟検出されたに止まる（第４・５次）。調査区近隣で最も安定しているのは、西部の自然堤防上である。一志郡衙の存在を想定した、近隣地の計画的な学術調査とともに、開発による破壊を未然に防ぐ文化財保護行為が必要と考えられる。

古代後半期の状況は明確ではないが、三重県内では斎宮跡に出土例があるに過ぎない越州窯系青磁が出土している（第３次）。郡の要地としての機能は、この時期にもある程度維持されていたことが考えられる。

5　中世以降

中世では、12～13世紀頃に相当する土器類は少量確認されているものの、遺構は明確ではない。中世以降の当地は、耕地ないしは荒地であった可能性が高い。

中世後期には、堀田遺跡の北部丘陵上に天花寺城が造成されている。『多門院日記』の記載によれば、永禄12（1569）年８月に、この城に籠もる北畠軍と伊勢侵攻を企てる織田軍との戦いが行われている[5]。地勢的に見て、堀田遺跡近隣は織田軍と北畠軍とがぶつかり合う場所にあたる。中世後期頃の当遺跡は、現在と同じく水田地であったのであろうか。そうすると、先の戦闘頃は収穫も済み、人が動けるような地盤だったものと推察できる。こういった戦争に関する遺構は確認できるものではないが、調査の状況から、当時の土地状況を知る資料にはなるであろう。

おわりに

以上、県道改良事業に伴って実施してきた堀田遺跡第３～６次調査の成果を見てきた。堀田遺跡を地域的に評価するためには、近隣遺跡との比較検討を通じ、堀田遺跡を地域のなかで相対化することが必要である。当遺跡近隣では、幸か不幸か開発工事が頻出したことにより、発掘調査資料が豊富である。これらの資料と比較をし、地域のなかでの堀田遺跡が持つ意味を明らかにする作業を進めて行きたい。

さらに、古墳時代前期後半や古代の状況が示すように、堀田遺跡の持つ価値は、単に地域史の観点からばかりではなく、当時の列島規模で重要な要素がいくつか含まれている。この報告書ではそこまでの課題を解決することはできない。しかし、今回報告した発掘調査成果を見ても、今後意識的に究明していく必要のある、三重県内屈指の価値を持つ遺跡であることは明らかなのである。

（伊藤）

<註>

(1)三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』Ⅶ(2005年)

(2)三重県埋蔵文化財センター『天花寺北遺古遺跡（第１次）・薬師寺北裏遺跡発掘調査報告』(1999年)

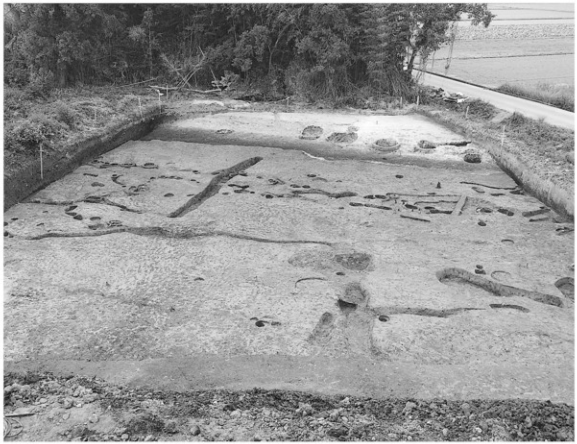
(3)奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡』Ⅱ　遺物・遺跡編(2004年)

(4)伊藤裕偉「ふたつの「こおりいち」～古代一志郡家に関する覚書～」(『斎宮歴史博物館研究紀要』11 2002年)

(5)「『多門院日記』永禄12年９月７日条(『増補史料大成』鈎川書店刊)

写真図版

A地区　東部全景　（東から）



A地区　西部全景　（東から）

A地区　SD85　西肩土坑群　（北から）

A地区　SD85　杭出土状況　（北西から）

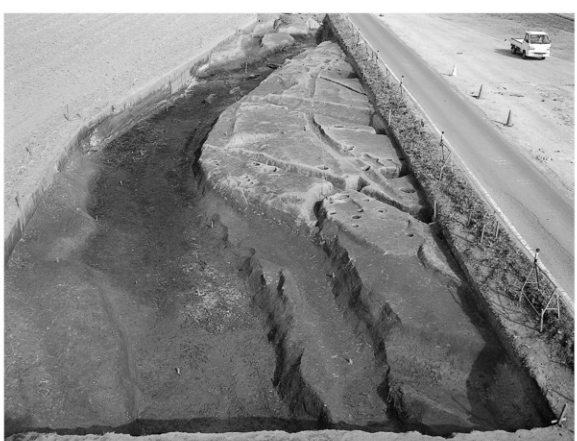
B地区　全景　（南から）

B地区　ＳＫ137　遺物出土状況　（南東から）

B地区　SK143　遺物出土状況（東から）

C地区　全景（北から）

C地区　北部全景　（北から）

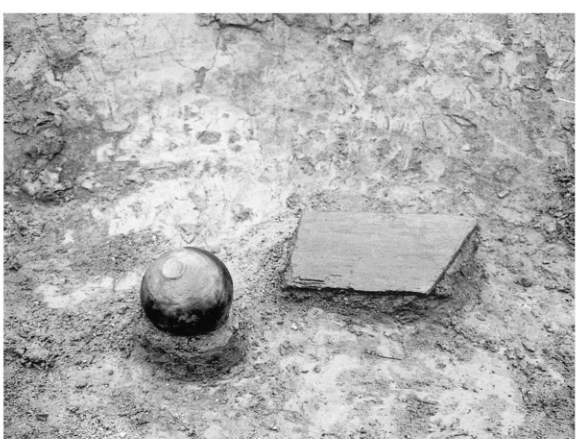


C地区　全景　（南から）

C地区　D14　SD168　東肩遺物出土状況　（南から）

C地区　D15　SD168　遺物出土状況　（南から）

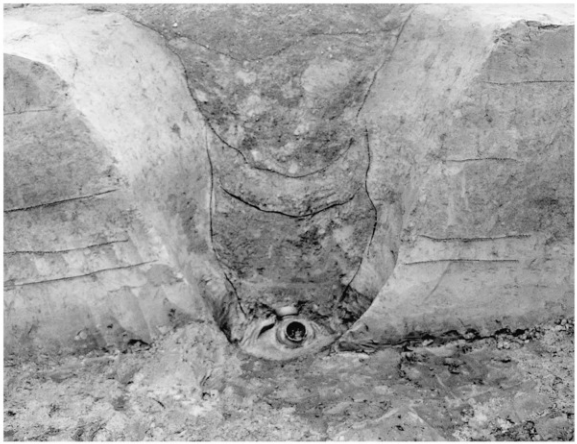
C地区　C12　SD168　遺物出土状況　（南から）



C地区　C2　SD168　遺物出土状況　（西から）

C地区　D4　SD168　遺物出土状況　（西から）

C地区　C2　SD151　遺物出土状況　（北から）



C地区　SE155　断ち割り状況（西から）

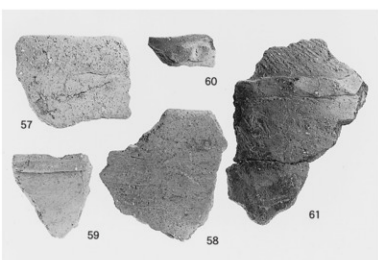
C地区　SE155　遺物出土状況（北から）

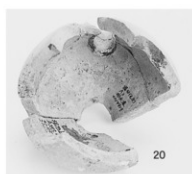
調査区全景（南から）

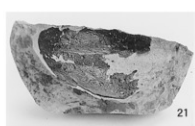
東壁土層断面（南西から）

2
3
4
5

6


57
60
59
58
61

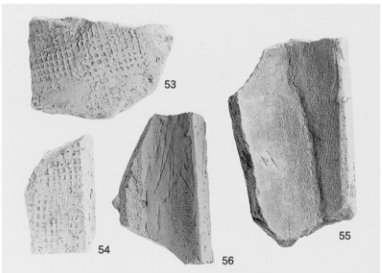

20

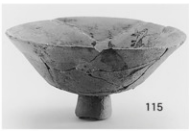

21

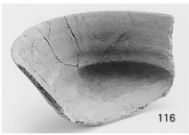
37

39

22


53
54
56
55


115


116

67

82

118

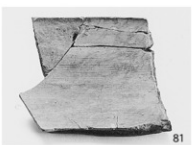
75

90

122

98

78


81

111

124

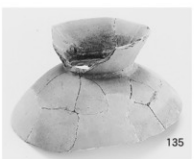
128

129

130

131

134


135

136

137

143

148

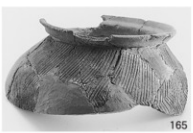
150

155

156

157

158

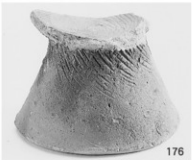

165

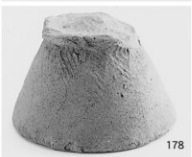
168

169

170

173

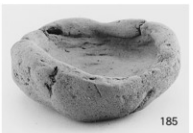

176


178

179

180

183

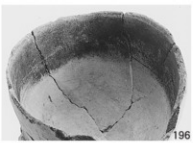

185

189

191

197

196


196

201

207

208

214

215

216

217

222

226

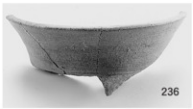
228

229

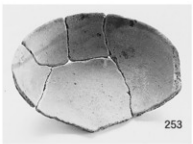
230

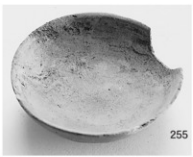
233

235

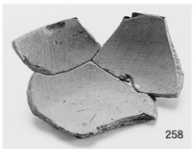

236

250

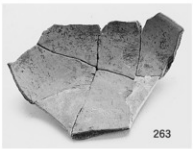

253

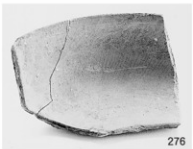

255

256

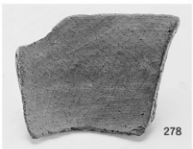

258

262


263

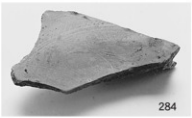

276

277


278

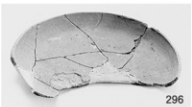
280

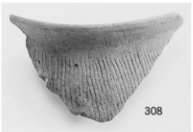
283


284

291
裏側

295


296


308

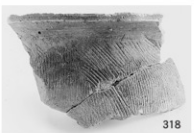
309

312

315

316

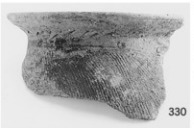
317


318

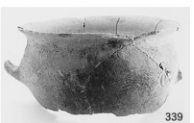
326

329

334


330

337


339

341

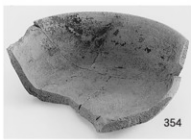
343

345

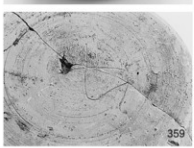
347

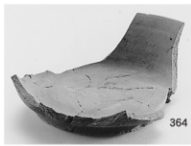
351

352


354

359

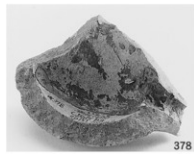

359


364

379

373

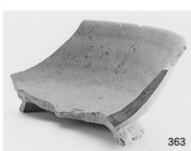
374

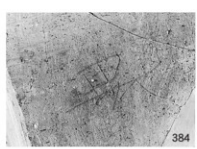

378

371

381

384


363


384

404

402

408

409

410

411

455

404

412
裏側

416

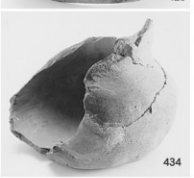
417

425

426

427

429


434

446

454

464

465

466

467

468

469

470

471

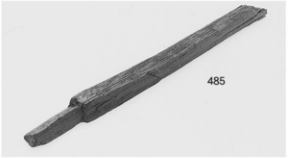
472

473

475

476

479


485

486

489

491

492

495

501

507

508

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほった　だい6じちょうさ
書名	堀田　第6次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２６１
編著者名	伊藤裕偉　水谷　豊　瀬野弥知世　淺生卓司
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒 515－0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL 0596(52)1732
発行年月日	２００５年３月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
堀田遺跡	松阪市	24204	b 224	34°	136°		3,000	県道（主要地方道）松阪一志線緊急地方道路整備工事
	嬉野宮古町			38′	28′	20010823～		
小谷Ａ遺跡	字小谷・葉山		b 91	25″	15″	20020118	600	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀田遺跡	集落跡	古墳前期 古墳後期 飛鳥奈良	流路 流路 流路・溝・井戸	土師器・木製品 土師器・須恵器 土師器・須恵器	土器類良好 暗文土師器良好
小谷Ａ遺跡	集落跡	縄文晩期～	流路	サヌカイト片・土器	

要約

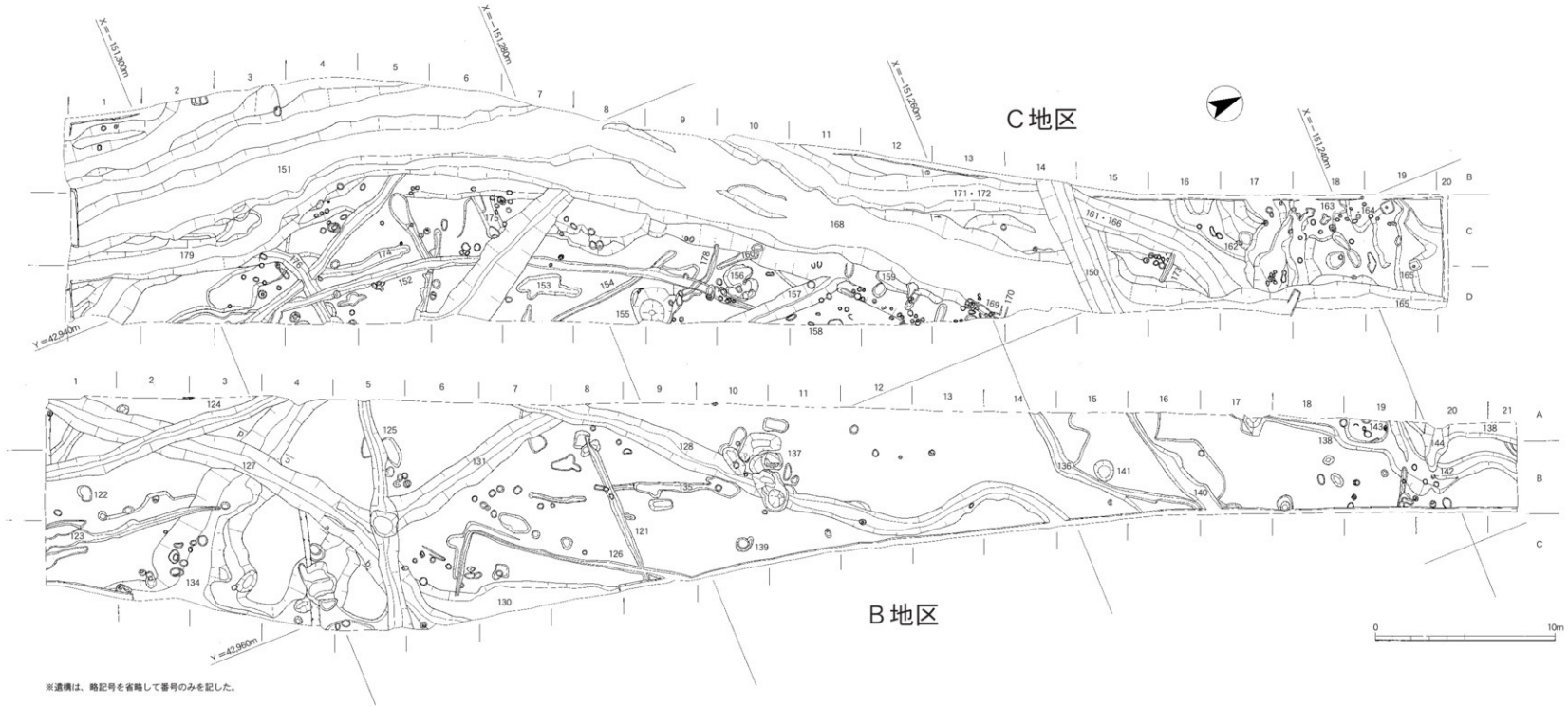
同事業による堀田遺跡発掘調査の最終次。堀田遺跡は縄文晩期～中世の複合遺跡。調査区内では主に流路を確認。流路内からは、古墳前期・飛鳥奈良期の２時期を中心とした豊富な出土遺物がある。古墳前期の土器類は被熱のある高杯・壺などが多く、近隣に祭祀空間があるものと想定。飛鳥奈良期では暗文土師器が多量に出土。須恵器は徳居窯や猿投窯、美濃須衛窯のものなど多様な状況が観察される。第３～５次調査の成果と合わせて一志郡衙関連と想定。

小谷Ａ遺跡は、縄文時代以降の遺跡。丘陵裾部で、縄文時代晩期頃以降の流路がある。出土遺物は微量。

三重県埋蔵文化財調査報告２６１

堀　田　　第６次調査

２００５（平成17）年３月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　　光出版印刷株式会社



第６図　堀田遺跡（第６次）B・C地区遺構平面図（1：200）